
大江戸でいばあていっど

門 九郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大江戸でいばあていつど

【Nコード】

N6862I

【作者名】

門 九郎

【あらすじ】

魔術消えたる科学の時代。そんな浮世に影が舞う。

彼らの呼び名は付喪神。物に宿りし力と心。

あの世とこの世の間で生きる、奇怪な呪術を持つ輩。

江戸に降り立つその名はシグマ。付喪神を繰る依巫の末裔。

不思議な物と者が織りなす和風ふぁんたじーバトル。はじまりはじまり。

人物・付喪神・用語集 （未読の方は次からどうぞ） （前書き）

作中のキャラや用語の一覧です。

常に最新話に合わせて行くので、未読の方はネタバレに注意。

人物・付喪神・用語集

（未読の方は次のからどうぞ）

> i 3 5 2 8 — 3 9 0 <

～用語～

【付喪神】 つくもがみ

またの表記を九十九神。身の回りの様々な物に何らかの理由で意思が宿ったもの。

それぞれが固有の能力を持つが、あくまで霊的な存在なのでこの世界に干渉するには依巫・依代を必要とする。

その姿は人間・動物・武器など様々。依巫としての才能がある人間にしか見ることは出来ない。

【依巫】 ヨリマシ

付喪神を所有し、使役する人間のこと。

付喪神は依巫から力を注がれる事で初めて固有の能力を発揮出来る為、どんなに力の強い付喪神でも依巫無しでは何も出来ない。

【依代】 ヨリシロ

付喪神が宿った物品のこと。

何らかの理由で様々な物体に霊的な意思が宿るとそれが依代となつて付喪神が生まれる。

依巫と付喪神を繋ぐ架け橋でもあり、霊的存在と現実との中間的な存在。

【禊】 ミソギ

依巫が付喪神に注ぐ力のこと。
これを応用して戦闘時に依巫の周りに結界を張って身体能力を高める事が出来る。

【結界】けっかい

戦闘時に禊を消費して付喪神・依巫・依代に張る事ができる。
依巫と付喪神は結界に多くの禊を使えば身体能力を水増し出来る。

【無声発動】むせこうどう

通常付喪神の呪術を使うには依巫がその名を呼ぶ必要があるが、それなしで呪術を発動する事。
本来の呪術に比べて威力は低めになり、不発する事もある。

【御名代】みなしろ

この世の様々な物に憑いた意思の名前を見抜き、それを呼ぶ事でまだ付喪神になっていない物体を無理矢理依代として付喪神を作ることのできる人々の事。

～登場人物～

【安蒜 司限】あんざん しぐま

通称シグマ、15歳。とある田舎の港町の東中学校で不良頭をやっていた。

卑怯な手段を取るのが大好きでひねくれているが、世話になって
いる鶴子と亀太郎にはそこそこ優しい。

付喪神を操ることを生業なりわいとする安蒜家の長男だが、小さい頃から
何故か付喪神を見る事が出来なかった。あるきっかでミケと出会い、
以来一族としての才能が開花する。底なしの禊の持ち主。

現在は東京の本家で姉の小町や仲間と共に暮らす。

《化猫の二又道》 シュレディンガー

ウノのカードに憑いたシグマの付喪神。通称ミケ。

白地に青・赤・黄・緑の四色の模様と二又に分かれた黒い尻尾をした猫の姿で、江戸っ子口調で喋る。

物体と物体の位置とそれぞれがしていた運動を入れ替える力を持つが、その力にはいくつか制限がある。

・障害物無しの状態だとしてミケに見える範囲内にあるものしか対象に出来ない。約半径1キロ。

・入れ替える物体同士の大きさが違い過ぎていると入れ替えられない（例…小石と人間は位置を入れ替えられない）

・結界を張っている物は対象に出来ない。

なお、条件を守れば単数対多数や同時に複数の組み合わせで入れ替える事も出来る。

《化猫の二又道・式式》 シュレディンガー

進化したシュレディンガーの呪術。

壱式では物体同士の大きさが違い過ぎると入れ替えができなかったが、貳式では物体同士の材質が同じなら大きさに関係なく入れ替え可能。

依代がウノである事に注目した小町との修行で習得した。

【源 元】 みなもととはじめ

通称ハジメ。シグマと敵対する西中学校の不良頭。金髪。

基本的に若干頭の足りない子。いつも正々堂々シグマを罠にかけようとして逆に罠にかけられる。

祖父の源太が亀太郎と知り合いなので実はシグマとは幼馴染。

ヨリマシとしての才能があることが発覚。共に上京。

その時には付喪神は持っていなかったが、後に戦いの中でグレイを手に入れる。

《怪狼を繋ぐ者》
グレイプニル

通称グレイ。銀のブレスレットに憑いた付喪神。山賊風の格好をして首に犬のお面をかけた少年の姿。少々乱暴な敬語で話す。

手から伸ばした鎖を武器として用いて戦い、その鎖には襖を吸収する能力がある。吸収した襖や相手の攻撃を放出することも可能。

【大府 愛】
だいふ あい

通称アイ。入学式の日シグマに話しかけてきた同級生の女子。ノリの軽い学級委員気質でポニーテール。シグマより微妙に背が高い。

最近街の不良を襲っていた通り魔の正体であり、依巫。戦いを異様に好む戦闘狂としての一面を持つ。

シグマと戦って負け、通り魔は止めたが戦闘狂は治らなかった。成り行きでシグマの恋人に。

《月夜の祭囃子》
ルナティックハート

通称ルナ。マフラーに憑いた大府の付喪神。

見た目は小学生くらいの女の子でマフラーと同じ水色の髪。ハッピにハチマキと祭の時のような衣装を着て、ススキの穂を象った髪飾りを頭の両側に付けている。肉弾戦では背負った杵きねを武器として用いる。

自身とその依巫と更に自分達が触れた物体の重力を操作する力を持つ。強力な能力だが消費する襖の量が多い。また、相手から触って来た場合には即座に重力操作をかけられない。

【安蒜 あんざん 小町 こまち】

シグマの実の姉。自称・安蒜家当主。主に「姐さん^{あね}」と呼ばれる事が多い。

ダルそうな話し方をする美人で、タオル一枚やパジャマのまま平気な顔で家の周りを徘徊する。

八歳の時（当時シグマは一歳）家出をしたきり実家に帰っていないかった為、シグマは姉の存在すら知らなかった。

家出の際家で保管されていた付喪神を一体盗んだので、両親には勘当され、始めから居なかったものとして扱われていた模様。

両親不在の今の内に、弟のシグマと一緒に本家に乗っ取る計画をしている。

《影牢日記》
カゲロウニツキ

通称カゲロウ。革表紙の手帳に憑いた小町の付喪神。

武士のような口調で話す黒い大蛇の姿。しかしこれはあくまでベースとなる姿である。

「影」という実体の無い体を持ち、どんな形にも大きさにも変幻自在。体を影のようにして壁や天井を這い、僅かな隙間を通り抜ける事も可能。

極めつけに相手を大きな口で丸呑みにする事が出来る。

八歳の家出のときに彼女が実家から盗んだ付喪神である。

【白川 しらかわ 小雪 こゆき】

北海道の分家から小町に家政婦として呼び出された、礼儀正しい女性。

家事に関するスキルは異様に高く、働き者。

怒らせるとかなり怖い。

《凍てつく花火師》
テルミットチル

通称テルミ。指輪に憑いた小雪の付喪神。

女性の姿だが上半身は晒さらしを卷いただけの露出度が高い、名前の通り花火師の衣装を着ている。髪は青色。威勢のいい関西弁で話す。腰布に付けた火薬玉を投げ、「氷点下の炎」を操って戦う。この炎は温度が非常に低い為触れた物を凍らせる事が出来るが、性質はあくまで炎なので発火性の物に当たれば引火する。

【桑原 剛】
くわばら つよし

シグマたちの担任。現代文の教師。
好きな物は聞きわけの良い子供、嫌いな物はそうじゃない子供。
口にするネタはほとんど滑る。常にやる気が無い。

正体はかつて安蒜家と対立していた御名代の一族・桑原家の末裔。
強力な結界を展開したり敵のそれを破ったりと、依巫としての実力はかなりのもの。

《大太郎法師》
アトラス

私立湯島学園、シグマたちの通う高校の校舎に憑いた付喪神。
正確にはまだ付喪神になるには長い年月が必要で、桑原に御名代の力で一時的に付喪神にされていただけ。言葉は喋らず、五十メートルはあるかという巨人の姿。

その圧倒的な大きさだけで、他に能力は必要ない。

【一柳 道満】
いちやなぎ じょうまん

長く伸ばしたストレートヘアを後ろで束ね、切れ長な目の少年。
聖ケルビム学園中等部所属。

九州の分家からの使いを装って安蒜本家屋敷を訪れる。
過剰な程に自分と付喪神に自信を持ち、丁寧な口調で話していても相手を尊敬する事は絶対に無い。

実際の所若さに見合わない大きな実力の持ち主でもある。

《型破りな道化師》
ストレンジピエロット

鋏はさみに憑いた一柳の付喪神。

二メートルほどの大男でサーカスのピエロを思わせる服装。両手には大きな鋏はさみを持っている。

鋏で触れた物を平面に変える呪術を使い、そうすることでそんな物でも紙きれのように鋏で切り刻む。相手の防御を一切無視するその攻撃は非常に強力。

また、呪術で平面に変えた物はいつでも元の立体に戻す事が出来る。

不気味な笑い方をするが人間型にしては珍しく、喋る事は無い。

【二宮 亘】
にのみや わたる

常に微笑んでいる優等生風な少年。スポーツ万能成績優秀な雰囲気
気が漂う。

しかし実際には相手を蔑あへんで喜ぶような残忍な一面があり、戦いでは入念な用意の上で相手を翻弄する戦法を好む。

聖ケルビム学園中等部所属。

《鋭利な残心》
サムライエッジ

カッターナイフに憑いた二宮の付喪神。着流しに笠を被って目を隠した浪人のような姿。

非常に無口で一言二言しか喋らず、腰には大小二本の刀を差している。

一度刀を振った所にその時の斬撃を半透明の軌跡として残し、触れた相手を斬りつける能力を持つ。居合を使って刀を振るのでその動きは高速。

《鋭利な残心・式式》
サムライエッジ にしき

進化したサムライエッジの呪術。

壱式の状態であちこちに残した斬撃を自分の刀に集め、一本の太い刀としてそれらの合計の威力を得る。

式式になると姿も戦国武将のような鎧武者になる。

【三木 安奈】みぎ あんな

小柄で無口、ツートールの髪型の女の子。基本的に四字熟語しか喋らない。

聖ケルビム学園という学校の生徒らしいが詳細は不明。

刺客としてハジメの所へ送られ、対戦した。

常に無表情で感情を表に出さず、淡々と敵を始末する。また自分の付喪神に「大将」と呼ばれるのを嫌っている。

《晴天霹靂》ブルースプライト

軍服を着て鷺さぎの羽を持った天使の姿の付喪神。十字架のペンダントに憑いている。

見た目の通り軍人口調でしゃべり、手に持った弓から電撃を高速で撃って攻撃する。

必殺技として雷の渦を放つ事が出来るが、大量の禊を消費するので何度も連発は出来ない。

依巫である安奈の事を「大将」と呼ぶが、安奈本人は非常に迷惑がっている。

【四井 博】よつゐ ひろし

眼鏡をかけ、ねちっこい喋り方をする少年。聖ケルビム学園中部所属。

相手を策略で陥れるのを得意とし、決してスキを見せない。どこまでも冷徹に勝利を追及する完璧主義者。

《酒神の武僧》
バツカスモンク

四井の付喪神。依代はビールの王冠だが相手に狙われないように常に服のポケットに隠している。

絵本に出てくる赤鬼のような巨大な姿。奇妙な唸り声を上げるだけで言葉は喋らない。

知能も低く四井の命令無しではただ暴れてるだけだが、その怪力とダメージへのタフさは計り知れない。

しかし本当の脅威は怪力ではなくその口から吐き出されるアルコール。戦う内に敵はそれを大量に吸い込み、アルコール中毒となつて行動不能になる。

パワータイプと思わせておいてその方法で相手を蝕んでいくのが彼らの主な戦法である。

【安蒜 亀太郎】
あんざん かめたろう

シグマの親戚の老人。昔東京からシグマを引き取ってそれ以来世話をしている。

麦茶と盆栽が大好き。でも手入れの仕方はよく知らない。

【安蒜 鶴子】
あんざん つるこ

亀太郎の妻。世話焼きで優しい人物。

シグマを我が子のように思つて世話している。

【源 源太】
みなもと げんた

名字と名前の字がカブっちゃつてるおじいさん。元の祖父。物腰が低く、孫とは真逆で丁寧な人物。影は薄い。

人物・付喪神・用語集 (未読の方は次の中からどうぞ) (後書き)

要望があれば詳細情報追加します。

メッセージボックス、感想欄からお気軽にどうぞ。

一つ。　　そうだ、東京行けよ（前書き）

今は昔、大切に使った物には心が宿ったそうナ。

そいつらは不思議な力を持って、それを操る人間も居たとか。

え？　今はもう居ないのかって？

さあ。分からないが、今夜はちよいとばかり闇が濃い気がするねえ。

もしかしたら付喪神が来てるのかもしれないねえ。

一つ。　　そうだ、東京行けよ

「……フン。逃げずに来たようだな」

月も雲に隠された闇夜の埠頭、無数に積み重ねられたコンテナの上からそいつは現れた。

待ち受ける側の少年たちの一人がそれを見て、少し感心した様子の声をあげた。

辺りに響くは波の音。それと少しの金属音。

カン、カンと一定のリズムで繰り返されるその音はコンクリートの地面と集まった少年たちが持つバットがぶつかる音。それを叩きつける相手が近づいてくるのを、今か今かと待ちわびる。

「真夜中12時の呼び出しだったのを、こっちの都合に合わせて二時間も遅らせてもらったんだ。来ないわけにやいかないだろ？」

海の魚が跳ねるように無駄のない仕草でそいつはコンテナから飛び降りた。着地もまったく乱れず、まっすぐ金属バットを手にしたむろしている少年たちの方へ向かう。

近づいて行くそいつと迎え撃つ少年たち。夜の暗さでお互いの顔は見えないが、普段からいがみ合う者同士なので声で判別はつく。

「それに……」足を止めるそいつ。「喧嘩売られて買わなかったら、東中の頭はってる俺の威信に関わる」

たむろしている側の一人がランタンの電源を入れた。ほのかな明かりが辺りを照らす。

闇の中から浮かび上がったそいつの顔はいつも通り、顔は笑っているけど目は笑っていない。死後の魂と引き換えに願いを叶えてくれる悪魔のような顔つきだ。

まだ早春だというのに赤い半袖Tシャツに前を大きく開け、着崩した黒の学ラン。ワックスでツンツンに尖らせた頭。

——まさに絵に描いたような不良中学生。

コンテナの上からやって来たそいつと同じように、たむろする少

年たちも一様に不良スタイルの目つきの悪い中学生。マスクをした者、坊主の者、金髪の者――全部で十人程だろうか？ それぞれが手に金属バットを構えている。

「今日こそ俺たち西中とお前ら東中の抗争に決着を着けるぜ！ 正々堂々勝負だ！」

金属バットを赤Tシャツの彼の方へ向け、高らかに宣言するリーダー格らしき金髪。応じて子分も臨戦態勢に入る。

――が。

「え？ 正々堂々？ 何の事？」

小指で鼻をほじりながら赤Tシャツが言った。

凍りつく場の空気。さっきまで漂っていた青春映画のような雰囲気が一気に消し飛ぶ。

「お、お前まさか……今回も何か企んでるのか……？」

坊主頭の不良が額に汗を浮かべる。

他の不良たちの間にも動揺が走った。皆一様におどおどした様子で金髪のリーダーの顔を窺う。^{うかが}

しかし、当のリーダーも動揺を隠しきれない。

「お前……今日こそは男と男の勝負だって言っただろ？！」

「正々堂々？ 男と男の勝負？……そんなもん――」

今や不良たちの恐れの対象となった赤Tシャツがポケットからライターと何かを取り出し、その何かに火を付けて空に向かって掲げた。

「――俺がするわけないじゃん！」

ピューーーー、パンツ！

彼が着火したロケット花火が雲の多い夜空に打ち上がり、爆音と共に光を放った。

そして数秒後、コンテナの間の通路を縫ってこちらにやってくるいくつかの気配と声。

「こんらあゝ！ おめえらこんな所で何花火なんて打ち上げてるだつ！」

きつい訛りのある太い声。埠頭の一面にある漁船の船着き場から漁師たちが音を聞きつけてやって来たのだ。

潮風に鍛えられた屈強な海の男たちがコンテナの影から次々に飛び出してくる。

「おっちゃんたちー。俺は釣りに来てただけで関係ありません。花火やったのはこいつらでーす」

どこからか釣り竿とクーラーボックスを持ち出し、手を口元に当てて叫ぶ赤Tシャツ。

これで彼の計画通りである。

「その制服、まあた西中のアホンダラ共かつ！ 今日という今日は許さん！」

たちまち逃げ出す不良一派。そしてその後を漁師たちが怒鳴りながら追って行く。

「畜生ゝ！ この卑怯者！ 騙し打ちのシグマめ！」

捨て台詞だけは忘れずに去っていく不良たち。

シグマと呼ばれた一連の騒ぎの犯人である少年はあかんべえをしながら

「バーカ。一人叩くのに十人以上仲間集める奴に卑怯なんて言われたくねーよ。それからこの時期になりゃ朝の2時ぐらいから漁の準備で港に大人が居る事くらい覚えとけや」

彼が相手の不良たちに申し込んだ二時間の延期も策の内である。

釣り竿を折りたたみ、クーラーボックスを肩にかけて埠頭を後にするシグマ。

彼の目は今やランランと輝き、これぞ我が最大の喜びと言わんばかりだ。積み上げられたコンテナの間を優雅に通り過ぎながら鼻歌まで歌い始める。

「それに、俺にとっちゃ卑怯者は褒め言葉だぜ」

そのまま物陰に停めてあった自転車にまたがり、最高にご機嫌な

鼻歌に乗って彼は家路へ着いた。

彼の名は安蒜^{あんざん} 司隈^{しぐま}。この関東を僅かに外れた港町の東中学で、不良頭を務める卒業間際の三年生。好きなものは他人の不幸と卑怯な手段。

——付いたあだ名が「騙し打ちのシグマ」。

今日も彼は絶好調で隣の中学との抗争にたった一人で（正確にはその他数名の漁師のおかげで）打ち勝った。

「シグマ、昨日の夜どっか行ってたのかい？」

翌朝、俺がランニングシャツにパンツ一丁で二階から下りてくると鶴ばあちゃんが台所のすだれから首を出して俺に訊いた。

寝ぼけ眼の俺はあくびを抑えきれず、ちょっと待ってと手でサインしてから目元に付いた涙を拭いた。昨夜は西中の連中のせいで寝不足である。

鶴ばあちゃんはその間も心配そうに俺に目を向けている。そろそろ自分の健康も気になる歳だろうに、本当優しい人だ。

「大丈夫だよ。町の方へチャリで下りて自販機でジュース買っただけだから」

俺とばあちゃんとじいちゃん、三人で住んでいるこの家は港町の高台……と言うか山の方にある。買い物などは基本町まで長めの坂道を下らなくてはならない。

帰りにちゃんとコーラを一本買ったので今の言葉はあながち嘘ではない。心配性のばあちゃんに心労をかけたくないという俺なりの優しさである。

「あんまり夜中に出歩くと危ねえよ……あんたはまだ中学生なんだから」

俺と違って生まれてこの方ずっと田舎の港町暮らしのばあちゃんの喋りはイントネーションが独特。主に「ん」を強く溜める癖が目

立つが、まったく耳障りに思えないのが不思議だ。

「分かった分かった。今度から気を付けるよ」

洗面所で顔を洗う合間に生返事をする。

夜に喉が渴いたら冷蔵庫に麦茶作ってあるからね、と言いながらばあちゃんは台所に首をひっこめた。じいちゃんが好きなので我が家では一年中冷蔵庫に冷やし麦茶が用意されている。

ごめんな、ばあちゃん。麦茶は俺も好きだけど、勝利の祝杯にはちと味気ないんだよな。

タオルで顔を拭き、庭に出てじいちゃんの盆栽に水をやる。麦茶の大好きなじいちゃんは盆栽も大好きなのだが、盆栽は小さいから水なしでも育つと勘違いしているらしい。見かねた俺が毎日朝と夕方にじょうろを使ってこの健気な松の鉢を救済する。

こうして毎日俺が世話をしていれば、いつかこいつにも心が宿るんだろうか……と、子供みたいなことを考えてしまうのは我が家の家業のせいだろう。実際中学生と言えばまだ子供なのだが。

しかしそんな俺も来月からは晴れて華の高校生！ 鮮烈な高校

デビューを果たす為に既に県庁の街の美容室に電話で予約を入れてある。制服の注文も済ませた。

残り少ない中学生生活を滞りなくやり遂げるのが俺の使命である。

健康的生活を心がける俺としては乾布摩擦でもしたい気分だったが、朝飯の用意が出来たとばあちゃんが呼ぶ声がしたので縁側から家に入ることにした。

大正の頃からあるというこの日本家屋の居間は俺たち三人で使うには少々広い。天井も大分高く普通なら手入れが行き届かなくなる所を、クモの巣ひとつ見当たらないのは鶴ばあちゃんのマメさの賜物である。畳も数年変えていないがその割に日に焼けていない。

そしてそんな居間に置かれた丸い机の前にどっしり構えているのは例のじいちゃん、本名亀太郎かめたろうで通称亀じいである。亀じいの場合小柄なので「どっしり」と表現するには少々貫禄が足りない気もす

る。

亀じいはポストからばあちゃんが取って来た朝刊を読みふけていた。これは彼の毎朝の日課であり、読み終わった新聞は四コマ漫画を俺が読んだ後裏のテレビ欄をばあちゃんに渡すのが普段の流れ。よって居間の一画には資源ごみの日までいつも表紙だけが欠けた新聞が平積みされている。

新聞の社会面から目を離さないまま亀じいと言った。

「シグマ。昨夜源^{ゆんべ}ん所の坊主と騒いぞっただろ」

——ギクリ。

源^{みなもと}とは夜の港に俺を呼び出した西中の奴らのリーダー格、あの金髪^{みなもと}の名字である。

このじいさん、何故知っている……。

「今朝がた源の老いぼれが頭下げに来た。孫が迷惑かけたってな」
あんたも老いぼれだろう、という突っ込みはすると危険なのでやめておく。

亀じいの言う源の老いぼれとは例の金髪^{みなもと}の祖父、源^{げんた}源太さんのことである。どうして名字とカブる名前を付けたのか親のセンスを疑いたくなる所だが、うちの亀じいと源太さんは仲が良い。時々うちの縁側で碁を打っている。

源太さんは丁寧な人だ。それはもう、どういう過程を通ったらこの人の血筋からあのアホの金髪不良が生まれるのか真剣に研究したくなるほど。

「当事者のお前も起こそうと思ったが揺すっても起きなかった。源太が置いて行ったせんべいあるぞ」

「謝りに来たって、何時頃？」

訊きながら、じいさんが目で示した机の上の菓子箱を開けて中のラインナップを確認する。俺の好きなザラメ砂糖付きのを忘れずに入れるあたり、源太さんはちゃんと分かっている。

「四時半くらいじゃったかな」

年寄りは朝が早いから困る。

「ちゃんとお返しした？ 貰いっぱなしじゃ向こうに悪いぜ」
ふんっ、と得意気に鼻を鳴らす亀じい。

「年寄りを馬鹿にするんじゃない。ちゃんと麦茶のダシ、一箱持たせた」

亀じいは麦茶のティーバッグを「ダシ」と表現する。

そうか、源太さん喜ぶ……かな？ この季節に貰っても大概の人は嬉しくない気がする。てかそもそも普通そんな物渡さねえし。

「それよりシグマ。やんちゃするにしても程度を考えろよ？ 港で決闘なんかしたら漁師らや貿易港の職員に迷惑だろうに」

あれは決闘と言うよりも俺の策にハマった源一派が尻尾を巻いて逃げて行っただけ、つまり退治に近い。仮にそれが無くても向こうは一人を十人以上でリンチしようとしていたわけで、やっぱり決闘ではない。

よってこれは源（孫）の申告ミスである。て言うか中三にもなつて自分のじいさんにそういう事をベラベラ喋るなんてみつともない。

「決闘なんかじゃないぜ。俺は殴ってもないし殴られてもない」
向こうは殴る気まんまんだったけどな、と心の中で舌を出す。

「それに喧嘩するほど仲が良いって言うだろ？ 来月には同じ高校に行くんだし、親交を深めてただけだって」

このじいさんは説教を始めると長いので、誤魔化しておこう。
しかし、亀じいの口から出てきたのは俺がまったく予想していない言葉だった。

「あーシグマ、そのことだけだな。お前江戸の高校に行く事になったぞ」

亀じいの意味する所を理解するのに少しだけ時間がかかった。

「……は？」

まだ残っていた眠気が飛ぶ。

じいさん……今なんて言ったよ？

「は？ じゃないわ、まったく。本家の方からお前に呼び出しがかかったんだよ」

ちょうど鶴ばあちゃんが俺とじいさんの前に味噌汁の器を置いてくれた時だった。

じいさんはそれに一口付けると座布団からよっこらせ、と立ちあがって年季を感じさせる桐箆^{きりたんす}の引き出しをあさり始める。

三番目の引き出しに探す何かがあったらしく、手につかんだそれをシャカシャカとやりながら円卓に戻って、俺に放り投げた。

コトンと音を立ててそのウノの箱は俺の目の前で転がった。

少し大きめのコンビニならどこでも置いてありそうな、何の変哲もないウノである。多分日本人なら誰でも知っているであろうあのカードゲーム、前の人が出した札と同じ色や数字の札を順番に出していく、アルファベットで箱にデカデカと「UNO」とプリントされているアレだ。

箱の角が削れて白くなっている辺りが古さを感じさせるそれは、本来投げるような扱いは禁じられたモノ。少なくとも東京ではそうだった。

「すまんすまん、本家の方では『ヨリシロ』のこういう扱いはご法度だったなあ」

ばつが悪そうに頭を掻く亀じい。

別に構いやしないさ。俺はもう本家の人間じゃねえし……。

「それより、亀じい。何で今さら本家が俺を江戸……ていうか東京に呼び戻すんだよ」

何故か亀じいはこの平成の時代に東京を江戸と呼ぶ。近所の子供が聞いたら笑い転げそうである。

「知らん。ワシら分家は本家の指示に従うだけだ」

顔をしかめながら亀じいは俺の前のウノの箱を指差す。ちなみにこれも本家に居た頃は叱られた行為。大切なヨリシロ様を指差すなんて罰当たりなのだそうだ。

ここまでの流れで本家だとかヨリシロだとか、多分意味不明な人がほとんど……てか全員だと思う。理解してもらうのには少し時間がかかるかもしれない。当の俺でさえにわかには信じていない事な

んだから。

黙りきったままの俺に亀じい^{つくもがみ}が重苦しく言った。

「付喪神は忘れずに持って来るように、との事だ。その札遊びの箱は絶対に忘れるなよ」

——付喪神。意思を宿した品物。同時に品物に宿った意思。

これがどういう存在か、理論は概ね分^{おおむ}かっているが俺は未だにそれ自体を見た事は無い。

そんな俺を今さら呼び戻して本家はどうするつもりなんだろう？

こうして俺は中学を卒業した15歳の春、東京^{えいど}へと旅立つことになる。

幕を下ろすはやんちゃばかりの不良時代。

幕を上げるは不思議な存在のお話。

付喪神。この世とあの世の間に居る奴らの物語。

二つ。 その名はシュレディンガー

——つくもがみ付喪神。

それは「意思」を宿した様々な物体。

テレビや教科書で、傘や草履ぞうりや杖なんかに手足が生えて顔がある昔の絵をみたことが無いだろうか？ 「百鬼夜行絵巻」、付喪神を描いた有名な絵だ。

この世のありとあらゆる物、道端の石ころや今君が使っているであろう携帯やパソコンにも「意思」が宿る可能性がある。

そのきっかけは実に様々だ。代表的なのは長い年月人に使われ続けた品物に霊的な感情が芽生える場合である。付喪神は九十九神とも書くが、この九十九とは非常に長い年月を意味する。

付喪神には大きく分けて三つの要素がある。

一つは「付喪神」そのもの。つまり物体に宿った意思のこと。幽霊みたいなものと考えてもらえば良いと思う。

人間、武器、動物など付喪神によっていろいろな姿をしていて限られた人間にしか見えないが、力の強い付喪神なら存在を感じる程度は一般人でもできる。

そして最大の特徴。付喪神はそれぞれ「特殊な術」を持つ。

二つ目は「依代」ヨリシロ。

これの説明は簡単。付喪神が宿った物体のことである。

ある意味付喪神の本体と言っても過言ではない。依代が壊れるのは付喪神の消滅を意味する。

まあ、依代は基本霊力の結界のようなもので守られているから簡単には壊せないけど。

最後は「依巫」ヨリマシ。付喪神を操り、使役する人間のこと。

付喪神はそれ単体ではあくまで物に宿った意思、想い、ただそれだけ。どんなに力の強い付喪神でもこの世界に干渉するには人間の助けを必要とする。

依巫は依代を通して付喪神に「禊ミソギ」と呼ばれる力を注ぐ。この禊があつて始めて付喪神は固有の呪術や能力を発動できるのだ。

そして俺はそんな付喪神を操る力を持った家系、「安蒜家あんざん」に生まれた。

当然小さい頃から付喪神を操る訓練をさせられたわけだが、何故か安蒜本家の長男である俺は一向に才能が開花しない。付喪神に禊を注ぐどころか、俺は付喪神の姿を見た事すらない。

見かねた両親が田舎の厳しい修行で能力を覚醒させようと五歳の時に俺を分家に送った。それがこの亀じいと鶴ばあちゃんの家であり、亀じいは俺の祖父の兄弟にあたる。

ところが両親の思惑むな虚しく、二人は俺にまったく修行をさせようとしなかった。本家での修行で叱られてばかりだった俺が頑なに拒否した為、自分の孫のような気持ちで俺に接してくれていた二人には無理強いは出来なかったのだろう。

こうしてずるずると十年間、俺は本家も付喪神も忘れて平和に生きてきた。悪さはいろいろしたけど平和に生きてきた。そこへ例の呼び戻しである。

正直に言うと俺は東京に一度帰ってみたい。昔は実家を放り出されてほっとしたものだが、今や俺は十五歳。田舎には飽きてくる年頃だ。

ところが本家に帰れば俺は必然的に修行の成果を見せるのを求められるだろう。してない修行の成果など出せるはずもなく、このまま帰れば俺と亀じいは叱られるでは済まないだろう。

せめて……せめて付喪神が見えさえすれば。

そんな事を考えながら俺の所持する依代であるウノの箱を撫でてみるが、反応は無い。

これは俺が本家から出された時に唯一持ってきたもの。元々は東京の実家の近くのリサイクルショップにあったものだ。

その日母親に手を引かれて散歩をしていると、その店の前に並べられたたくさんの商品の中に何かが見えた気がしたのだ。駆けて行って見てみてそこにあつたがこのウノである。見えたのは煙のような、紺色こんいろの光のような何か。母親にねだると意外にもあつさり買ってもらえた。

家に帰って父親に見せるとやはりそれは付喪神の宿った依代で、俺にもついに付喪神を操る力が発現したと喜んだものだ。

結局それはぬか喜びに終わり、俺はウノに宿った付喪神を見ることは無かった。望みが叶わなかった反動で俺はこのウノがいまいち好きになれず、引越す際に親に持たされたがそのまま亀じいに預けたきりだった。

これは本当に依代なのだろうか？　だとしたらどんな付喪神が憑いているのか？

学校の帰りにいくつかの用事を済ませて家路に着くと、通学路にしている橋の上で立ちふさがる者が居た。

「おいシグマ！　東京に出るってホントか？」

例の金髪不良である。名は源みなもと元。悲しい事に幼馴染。

前にも言ったがうちの亀じいといいつの祖父の源太さんが知り合いなので、こいつは俺がこの町に越して来てから最初に出来た友達でもある。小学校は一緒だったが六年生の時に大喧嘩をして不良同士が敵対する中学にそれぞれ入学、以来ずっとこの関係が続いている。

顔は客観的に言ってジャニーズ系。しかしその内側には脳みその代わりに生ゴミか何かが詰まっているらしく、どうしようもないバカである。よってよく「ハジメ君って黙ったまま動かなければカッコイイよね！」と女子に言われるようだ。それではマネキンと変わらない。

ハジメは俺の事を生涯のライバルと思っているが、俺はこんなバカをライバルだとは思わない。折角の容姿も言動で台無しにしていく為、俺にはこいつに負ける要素が一切ないのだ。

「ああ、今高校の入学取り消しの手続きしてきた。東京の入学先は本家が用意してるらしい」

さしずめ今朝源太さんに亀じいが話したのだろう。それを又聞きしたハジメが俺を待ち伏せた、と。

「何だよ！ 高校じゃまたガキの頃みたいに組んで県全体の制圧するって約束したじゃねえか！」

「いつそんな約束したよ……てかお前はまだガキだ」

「俺がガキならお前だってガキだ！」

「ああそうさ、俺もガキだがお前と違って東京に行けるんだ」

正直喜ぶべきか微妙なところだが。

ハジメは唇をギュッと噛み締めて悔しさを露わにした。そういう崩れた顔が己の見た目の印象を下けている事にこいつは気付いていない。

「俺は……俺は……ッ！」

橋の欄干らんかんを叩くようにして握るハジメ。流れる水面を眺めるその顔はどこか切ない。

考えてみれば、喧嘩した昨日の今日で普通に会話している俺たちは傍から見ればかなりおかしいだろう。

俺はハジメの次なる言葉を待ったがバカのこいつには返す言葉が無かったらしく、古びたコンクリートの橋の上を走って去っていた。

「源太さんに煎餅ありがとうって伝えてなー」

こちらにも返事が無い。そのまま角を曲がって見えなくなってしまった。

道が開いたので俺は本家への言い訳を考えながら再び足を進めた。

その夜、昨日と同じようにハジメに呼び出された。場所は町を見下ろす高台にある公園である。

メールで果たし状が送りつけられるのはいつもの事だが、今回はどこか雰囲気違っていた。具体的に言えば、ハジメのメールにも関わらず誤字が無かったのである。三行以上のメールで奴が誤字・脱字をしないのは、砂漠で雪が降るのと同じくらい珍しい。

いざという時に人を呼べるよう昨日の余りの花火を持って自転車にまたがる。中学の入学祝に買ってもらった愛車とももうお別れかと思うと少し寂しい。

高台と言っても我が家の方が山側にあるので公園へは下り道だ。坂でつけた勢いのまま公園へ乗り入れると展望台にハジメが居るのが見えた。

展望台は公園の一番海側、つまり高台から港町を見下ろすような位置に崖からせり出す形で設置されている。大都会でもないのに明かりは少なく、夜に来てもつまらないが昼は人気のデートスポットになるし、真ん中に置かれた二人組の石像が幸せをもたらすとかいう噂もある。

「こんな遅くに何の用だ？」

どうせ喧嘩に決まっているが訊いておくのが礼儀だろう。

ハジメは何か迷う様子で数秒視線を泳がせた後、

「頼む！ 俺も東京に連れてってくれ！」

いきなり腰が直角に曲がるぐらいに頭を下げた。

……何をいきなり言い出すんだ、こいつは。

「俺、最近仲間内で信用薄くって……昨日もまんまとお前の罠にかかったから余計……何て言うか、俺このままこの町の高校行ってもダメそうなんだよ！ だから……」

訊いてもいない事をベラベラとよく喋る奴だ。しかも聞く限り自業自得ときた。

まあ、言いたい事は分からんでも無い。むしろ勢いぐらいしか取り柄のないこの男が信頼を集め、三年間も不良頭を務めた事の方が奇跡なのである。その信頼が尽きかけているという事だろう。

このまま進学してもハジメは高校で馬鹿にされるだけ（実際バカ

だし）、そんな状況から抜け出すには場所を変えるのが一番である。それに異論は無い。

「でもだからって何故俺がお前の身柄を引き受けなきゃならん……？」

俺の疑問を無視してハジメは続ける。

「本家の人と話をさせてくれ！ 執事でも庭掃除でも何でもやる、だから俺を東京のお前ん家に置いてくれ！」

庭掃除はともかく執事はバカじゃ勤まらんだろう。庭も俺の記憶では荒れ放題のままにしてあった気がする。

いい加減茶番に飽きてきたので俺は自転車に向かって歩き出す。そこに立ちふさがるハジメ。

「ま、待て！ 行くなら俺を倒してから行け！」

「OK。五秒で沈めてやる」

俺は騙し打ちが主なのであまり殴り合いはしないが、それでも小学校からの経験上こいつより強い事は明らかだ。

しかし、そこに予想外の要素が加わっていた。三年という年月は俺たちの間に埋めようのない差を作り出しており、俺の完璧な見たてに誤算を生んだ。

——すなわち、身長差である。

俺は現在165センチ。特別低いわけではないが相手が悪かった。ハジメは十五歳にして身長170センチを軽く越えていたのだ。

10センチ近い身長差のある相手と取っ組み合いになれば、^{おの}自ずと勝負は喧嘩の技術よりも質量の差によって着く。

お互いもつれ合ったまま地面を転がり、危ないと思った時にはもう遅かった。忘れていたがここは展望台だったのである。

俺とハジメは勢いよく転落防止の柵の間を通過して崖に向かって飛び出した。

眼下に薄明かりの町並みが広がる。こんな状況ながら初めて自分の育った町を真上から見て、最初の一秒間程俺は感動に浸ってしまった。

――が、

ふわりと宙に浮いた気がしたのも束の間、物凄いスピードで俺とハジメは落下を始めた。

「ぬわあああああああああああゝ！」

ヤバイ！ ヤバイ！ 高さに間違いなく死ぬ！

こんな間抜けな死に方は嫌だ！ てかこの状況だと俺とハジメが心中したみたいに見えるじゃねえか！ そんな風に思われるのは死ぬより嫌だゝ！

同じスピードで隣を落ちて行くハジメは口を限界まで開けて絶叫している。どうでも良いがお前そのままだと、死に顔が大口開けたブルドッグみたいになるぞ。

仕方ない、これも運命である。ここで俺が死ねば亀じいの職務怠慢がバレないかもしれない。全国屈指の大バカを巻き添えにしたことで間接的にこの町の未来を少し明るく出来たかもしれない。

そんな風に考えて俺が人生を諦めた時、シャリンシャリンという鈴の音と一緒に声が聞こえた。

「どうするんでい！ このままだと三人まとめてお陀仏だぜい！」

ハジメと反対側の方に首を向けると、そこに猫が居た。四肢を大きく広げムササビのような体勢を取って落ちて行く三毛猫だ。

しかしこの三毛猫どこかおかしい。普通三毛猫の毛は白・茶・黒の三色だが、こいつは白地に青・赤・黄・緑の模様がある。目と何故か二又に分かれた尻尾だけが墨で染めたように真っ黒だ。首には銅色の鈴を付けている。

随分と派手な色合いの猫も居たものである。

それより気のせいだろうか？ 今この猫が喋った気がしたのだが……。

「おいそこの依巫ヨリマシっ！ さっさとおいらの名前を呼べ！」

声に合わせて猫の口が動いた。

――間違いない。こいつが喋ってる。

「な、名前っ!？」

どんどん遙か下の地面に向かって体が加速していくのを感じながら俺は訊き返した。細かい事は後回しである。

「そうよお！ お前さんおいらの依代よりしろ持つてんだろ？ そこから感じ取れ！」

依代……

今朝から気になってずっとポケットに持ち歩いていたウノの箱を俺は取り出した。そうしている間もどんどん地上は迫ってくる。

上に向かって流れていく景色の中で改めて観察したそれは紺色の光、より正確に言うなら夜の闇を濃縮したような何かを淡く放っていた。これを買った時と同じである。

そしてその紺色の光を見つめた瞬間、俺の中に何かひんやり涼しいものが流れ込んできた。間髪入れず頭に浮かぶ短い言葉。

理解した。このウノの箱を通してあの猫から何かが俺に注がれたのだ。

そして次は俺が注ぐ番だ！

「化猫シュレディンガーの二叉道！」

俺の腕の表面を温かい液体が伝っていくような感覚がした。それは間違いない手にしたウノの箱に向かって吸い寄せられ、紺色の光の中へ。

隣で落ちていたおかしな三毛猫の目が金色に輝いたと思った瞬間、俺は展望台に戻っていた。

なんだか視点が高いと思ったら、俺が上に立っていたのは展望台にあった二人組の石像の台座である。隣にはポカンと口を開けたままのハジメ。

おかしい……俺たちは崖から落ちていたはず。それにこの台座に乗っていた石像二つはどこへ？
疑問の答えはすぐに分かった。

ドカン！ ドシン！

崖の方から二つの重い音が聞こえてきた。

俺とハジメが急いで柵から身を乗り出して下をのぞくと、そこには遊歩道に落ちて半分ぐらい砕けてしまった二つの石像があった。

街灯の小さな灯りに照らされた彼らには哀れの一言しか浮かばない。

「どうだ！ お前らと石像を入れ替えてやったんだぜい！」

耳元で威勢の良い江戸弁が聞こえた。

気付かない内に例のカラフル三毛猫が、俺の右肩にハジメと俺の頭の間から下をのぞくような姿勢で乗っていた。二叉の黒い尻尾をぶらぶらとさせて得意気である。

「入れ替えた？」

疑問が次々沸き出てきて、猫が喋るという根本的な問題になかなか突っ込めない。

「そうよお。おいら『化猫の二又道』シュレディンガーの呪術は物体と物体の位置を入れ替えちまうんだぜい！」

呪術……ってことはまさか！

「お前、付喪神なのか！？」

「あたぼうよお。お前さんが持つてるそのウノのカードに憑かせてもらってるぜい！」

初めて、生まれて初めて付喪神を見た。

言われてみればこの猫の模様、青・赤・黄・緑はウノのカードの色だ。ウノの付喪神だというのも頷ける。

新しい世界が目の前に開けたような気がして俺は感激していた。

感激していたのだが……

「なんか地味な能力だな」

正直な感想である。

ところが俺の言葉に露骨に腹を立てた三毛猫はフーツと唸り声を上げた。

「てやんでい！ 文句あんならかかってこいやこの人間野郎！」

そういつて肩から猫パンチをシャカシャカと繰り出してくる。付喪神も人間に触れるらしく殴られる感触はあるのだが、それよりパンチの仕草の可愛らしさが勝る。

しばらくはそうやって笑っていた俺だが、いい加減鬱陶^{うっとう}しいので首を指でつまんで三毛猫を地面に下ろす。首根っこを掴まればおとなしくなる辺り猫らしさがあるな。

「おい……シグマ何なんだよ、そのペンキひっくり返したみたいな猫！　しかも今喋ってなかったかそいつ！」

向き直るとガタガタと震えながら足元の猫を指さすハジメが居た。忘れてた。こいつも居たんだった。

あれ？　何かおかしいぞ？

「んん！？　その金髪、おいらが見えてるのか？」

驚いた様子でハジメを見上げる猫。

そうだ。昔付喪神が見えるのは依巫の素質がある奴だけだった聞いた。

つまり……恐ろしい事だが……

「この金髪の兄ちゃんにも付喪神を扱う力があるってえ事だなあ」

この夜、俺は自分の付喪神を手に入れ、ハジメは東京へ行く口実を手に入れた。

……とほほ。

三つ。江戸の夜風は

「まもなく、東京。東京。終点です」

天井のスピーカーからアナウンスが聞こえてきて、俺とハジメは目を覚ました。

目の前には食べ散らかした駅弁の箱やジュースの缶。修学旅行以来の新幹線ではしゃいでいる内に眠ってしまったらしい。

「本日はご乗車真にありがとうございます。お忘れ物の無いようご注意ください」

周りの席の客が荷物をまとめ始めたので、俺たちもゴミをビニール袋に詰め込み、足元の旅行カバンを引きよせる。

新幹線はゆっくりとスピードを落とし、東京駅の構内に滑り込んで止まった。

立ちあがって降車する人の列に加わりうとすると下の方から声が聞こえた。

「おいシグマ！ おいらの依代忘れてるぜい！」

ミケが俺の足にすり寄りながらこっちを見上げていた。

見てみると確かにウノの箱が座席の上に置きっぱなしになっている。

「悪い悪い。うっかりしてた」

手を伸ばしてそれを掴み上着のポケットに突っ込む。少々粗い扱いにミケは顔をしかめたが、フンと鼻を鳴らしただけで黙って俺の肩に飛び乗った。

——いよいよ、東京である。

——あの後。

「改めて自己紹介と行くぜい。ウノの付喪神やらせてもらってる、
『化猫の二又道』^{シムレディング}でい。よろしくな！」

ハジメに付喪神に関していろいろと訊かれるまま説明しつつ、自

転車を押して家に帰った。

亀じいと鶴ばあちゃんはまだ起きて居間でテレビを見ていたので、向かい合ってさっきの出来事を説明する。二人とハジメは前に語った通り顔馴染みである。

座布団の上にデカイ態度で座ったシュレディンガーは俺たち四人を見渡して高らかに自己紹介。年寄り二人は本家に申し訳がついた事よりも、単純に俺が付喪神を使えるようになったのが嬉しいようだ。

「いやあ。やっとシグマにも付喪神がなあ。大切にしろよ」
心底ほっとした様子の亀じい。

「あらあら、可愛い猫ちゃんだね」

鶴ばあも目を細める。

二人に報告したことで、ようやく実感が沸いてきた。俺は今やつと家族と同じ所に立ったのだ。

小さい頃から存在は教えられていたから疑わなかった付喪神。しかし今、見て、触れて、声を聞いてみると改めて感動である。

「しかし、シュレディンガーなんて長い名前だな。あだ名が要るんじゃないか？」

ばあちゃんが出した麦茶を飲みながらハジメが言った。

こいつ、意外にもすんなり付喪神の存在を受け入れている。さっき帰路で依代だの禊だのと説明している間だって一度も俺の言う事を疑いはしなかった。

どうやらハジメの頭には生ゴミが詰まっていたのではなく、最初から何も入っていなかったようだ。だから乾いたスポンジがグイグイ水を吸い取るように聞いた知識を疑いもせずそこに収めるのだろう。是非とも学校の勉強に応用してもらいたい。

「確かにな。術の発動には正式な名前を呼ぶ必要があるが、普段呼ぶ時用にあだ名があっても良いかもしれん」

亀じいが腕を組んで何か考え出す。

放っておくと勝手にダサイ名前を付けられそうだったので、俺は

慌てて口を挟んだ。

「ミケで良くないか、ミケで。色は派手だけど模様は三毛猫っぽいし」

亀じいには名前を付けられるくらいならこの方がましだ。シンプル・イズ・ベストという言葉もある。

適当に付けたつもりだったが、当のシュレディンガーは気に入ったようでシャリンと首の鈴を鳴らして頷いた。

「おう！ それじゃミケで頼むぜ。ところでよう」

亀じいの方に向き直るミケ。

「このアホ面した金髪、さっきからおいらの姿が見えてるんだよな。こりゃ、こいつにも付喪神の扱い方を教えてやった方が良くないかねえか？」

「なんと！」

亀じいは露骨に驚いた。この目の見開きっぷりは久しぶりである。「源の血には依巫の力は無いと思っておったが、ハジメはミケが見えるのか」

頷くハジメ。その顔は期待の色に満ちている。

何がきっかけか知らないが、このバカに俺と同じ依巫の力が覚醒してしまったのは事実だ。認めたくないけど、認めざる負えない。

「安蒜の爺さん、お願いだ！ 俺を依巫にして、シグマと一緒に本家へ行かせてくれ」

「うむ。この短い期間で坊主に依巫の教育をしきれるかは分からんが、本家には問い合わせてみよう」

聞いた途端ハジメは顔を輝かせた。東京に行く気、満々である。

おいおい、一緒に行く俺の気持ちは無視かよ。

——こうして、卒業式までの少ない中学生生活をハジメは依巫としての基礎知識を亀じいに習いながら過ごした。

例のスポンジ原理で普段の奴からは想像も出来ない程のスピードで知識を蓄えて行くハジメ。しかし、分家には俺のミケとまだ姿を

見た事のない亀じいのパートナー以外に付喪神が居なかった為、実際に禊を注いだりする実践的な事は出来なかったようだ。

他人の付喪神でも使えない事はないのだが、初心者のハジメが滅茶苦茶な禊を万が一注いだりしたら、付喪神の呪術が暴走する可能性もある。亀じいの判断で無しになった。

一方俺と言えば、特に教える事も無いと言われたので毎日適当に暇を潰していた。ひっこめ方が分からず、教える事がないと言われてしまっただけは亀じいにも訊きにくいので、ミケもずっと一緒である。

本家の方から正式にハジメを依巫見習いとする通達が来て、卒業式の翌日俺たちは新幹線に乗って旅立った。

「う、これが東京か……」

駅を出た瞬間、ハジメが言った。

空に向かってそびえ立つ高層ビル。コンクリートで塗り固められた地面。俺たちの町の祭りの時より大勢で行き交う人々。

十年見ない間にまた随分と発展したと言うか、ごちゃごちゃしたと言うか……。

学校の行事でしか県外に出た事がないハジメには刺激が強すぎるだろう。

夕方の新幹線に乗ったから今は夜。この地上の低い位置からでも町中が光り輝いているのがよく分かる。

——ならば、高い所からならもっとよく見えるな。

「くうー！ 久しぶりの江戸でい！」

地面で背中を伸ばしているミケ。こいつの力、使ってみよう。

「ミケ、どこかビルの屋上で行けそうなのあるか？」

この一週間ほどで『化猫の二叉道』シュレディンガーについて分かったことがいくつかある。

まず、あまり遠くの物体を入れ替える事はできない。ミケによる

と間に障害物が無かった時にミケ自身に目で見える範囲内が限界で、実験してみたら半径1キロ程度のようなのだ。そして入れ替えの対象となる二つの物体が離れていれば離れているほど、多くの襖を必要とする。

そしてもう一つ、位置を入れ替える二つの物体の体積がほぼ同じでなくてはならない。試してみたが俺と小石の位置を入れ替える、なんてことは無理だった。

この二つのルールを守っていれば、複数の物体のペアを同時に入れ替えることも出来た。最初は地味に感じたが、騙し打ちにはもってこいの呪術だと今は考えている。

俺に訊かれたミケは首を振って周りのビルを見渡した後、こちら辺で一番高そうなビルを肉球のついた手で指した。

「あれの天辺^{てっぺん}にちょうど良さそうなのがゴロゴロしてるぜい。やるか？」

「もちろん！」

入れ替わる瞬間を人に見られないように二人と一匹でビルの間で暗がりに移動。

ポケットの中のウノの箱に手をあて、ひんやりとしたそれに向かって襖^{しゅれでんがー}を注ぐ。

「化猫の二叉道！」

ミケの目が輝き、風に巻き込まれるような感覚がすると俺とハジメはどこかのビルの屋上に立っていた。

辺りには無数のガスボンベが壁に立てかけられている。その中の二つと俺たちは入れ替わったらしい。

「ホント、便利な能力だよな」

羨ましそうにハジメがミケを見て言う。

結局俺たちの町では付喪神が見つからなかったのでハジメはまだ自分の付喪神が無い状態だ。早く呪術を使いたくて仕方ないんだろう。

しかしそんな事は正直どうでも良い。理由は目の前に広がる素晴らしい眺めだ。

街が輝いている。ビルが、道が、車が輝いている。夜闇を明るく照らす東京の光。街中の建物という建物で光を放っていない窓ガラスなど皆無である。

色とりどりの光の点が立体的なラインを作って闇に溶けたこの大都会を浮き彫りにし、その間を奔放で芸術的な曲線を作って車の光が流れて行く。

この街は生きている。夜になると街全体から息を潜めたような気配を感じられ、一帯が光の分子で作られた生物になるのだ。うごく自動車の光は血潮の流動を思わせる。

光に照らされて負けじといっそう濃く、妖しく存在する闇。夜景の主人公が灯りなら闇はそれを引き立てるオーケストラだ。

付喪神はこの世とあの世の間の存在なのだそうだ。なんとなく、この街と似ている。

「すげえ……」

ハジメの口から言葉がこぼれる。

俺たちこれからこんなすげえ街で暮らすのか——そんな感動がチラリと感じられた。

そう、この街はすごい。必ず初めて見る者を圧倒する。

屋上の角になった所の落ちるギリギリに立って大きく息を吸い込む。

「東京に来たぞー！」

柄でも無く俺は子供みたいにはしゃいでいた。

「えーっと、この辺りのはずなんだけど……」

昔の記憶を探りながら坂道を登る。目的の場所はなかなか見えてこない。

十年もすると都会では街の様子がまったく変わってしまう。ましてや五歳という右も左も分からない頃の記憶だ、まったくあてにな

らない。

今俺たちは本家の屋敷を探している。十年前の記憶では住宅街の一区画まるまる占領するような大きさだったので、すぐ見つかると思ったのだがさっきから同じ辺りをグルグル歩き回っている。

「ミケ、お前だって少しの間だけど屋敷に居ただろ。何か憶えてないか？」

「ぜーんぜん。あの崖でシグマに禊を注がれるまで、おいらはこの世に干渉出来なかったからな」

使えないなあ。

段々ハジメの機嫌も悪くなった来た。

「シグマ、腹減った。早くお屋敷行こうぜ」

「だからその場所が分かんないから困ってるんだろ！ ……ん？」

その時何か見覚えのある何かが視界の端に入った。

近づいてみると間違いない、安藤本家の屋敷の表札である。けれど掛かっているのはごく普通の一軒家にしか見えない真新しい建物だ。白い壁がさわやかな印象を与える。

おかしいな、あの無駄に広いお屋敷はどこへ？

とりあえずインターホンを押す。数秒間待つと女性の声が聞こえてきた。

「ハ―イ……今出ます」

すこぶるダルそうである。姿は見えないが二十代くらいの女性の声だ。

「随分と若い母親だな」

「お袋はこんな若々しくない。聞き覚えの無い声だな」

玄関のドアが開いた。と、出てきたのは予想通り若い女だったのだが……格好が……その、バスタオルを巻いただけである。

ギョツとする俺とハジメ。ミケも俺の肩で啞然^{あぜん}としている。

「あつ！　もしかしてシグマと見習いの子！？」

こちらまでももの凄い勢いで走ってくる女。そしてそのまま信じられないことに、俺に抱きついてくる。

俺と女では相手の方が背が高く、自然と俺の顔はギュウと間にタ
オル一枚挟んだだけの胸元へ押し当てられた。

「んんんっ！」

「会いたかったわようシグマ。しばらく見ないうちにこんなに大き
くなっちゃって。最後に見た時は赤ん坊だったのに」

風呂上がりの石鹸の香りが鼻から入って来て肺を満たし、その艶^{あで}
やかさと顔に当たる柔らかい感触で俺は呼吸困難に陥った。

見ず知らずの女に抱きつかれるほど俺はモテた事がない。十年前
の記憶ではこんな人間は居なかったはずだ。

一通り満足したのか、女は俺を解放した。やれやれである。

隣を見るとハジメといつの間にかその肩に移動したミケが白い目
で俺を見ている。羨ましいとか考えるんじゃないぞ！

「ったく、いきなり何だ！ てかお前そもそも誰だ！」

顔を真っ赤にして言っても迫力無いだろうが勘弁して欲しい。俺
だってそういうお年頃なのだ。まだ意識がぼーっとしている。

すると女の方はあからさまに傷ついた表情になり、悲しげな目で
俺を見つめ返した。

「誰だ、って……シグマはお姉ちゃんの事を忘れちゃったの？」

……お姉ちゃん？

言い忘れていたが俺は一人っ子である。物心ついてから分家に出
されるまでの二年程度の短い記憶の中でも他に兄弟が居た事は無い。
両親もはつきりお前は一人っ子だと言っていた。

わけが分からん。

「何言ってるんだ！ 俺は一人っ子のはずだぞ。お袋や親父もそう
言ってた！」

「あー、そうか。あいつら私は居なかった事にしてたんだ。納得」
頭の横に人差し指を突き立てて考える仕草をする女。その顔には
若干不機嫌な色が出ているが、よくよく見ればかなりの美人だ。

「私、シグマが一歳の頃に家出ていったから憶えてないのか。なら
しょうがないねー」

一人で納得して話を進めているが、こっちには何の事かさっぱり分からない。ダルそうに語尾を伸ばす喋り方も何だかムカつく。

よし、と手を打って女は俺の手を掴んだ。その柔らかくて温かな不意打ちに俺は再び顔を赤くする。

「じゃあ姉弟の再開を祝してパーッと飲もうか！」

そう言っってハジメとミケは置いたまま家の中へと俺を引きずって行く。意外に強い力に俺は抗えない。

「ちょ、ちょっと待て！ 結局お前誰なんだよ！？」

「ん？ だからさっきから言ってるでしょ？」

足を止めずにこちらを振り返る女。まだ湿り気を残した艶やかな黒髪が夜風に揺れる。

「安蒜あんさん 小町こまち。あんたの生き別れた実の姉よ」

俺の東京一日目は顔も知らなかった姉との再会で始まった。

四つ。 俺と姐さんの家奪い

俺の姉を名乗るその女に引きずられて家の中へ。手入れのされたフローリングで洋風な造りになった洒落た玄関を通り過ぎ、短い廊下を真っ直ぐ進んだ先にあるドアの先へ進むと景色が一変した。

古臭くて黒ずんだ廊下、あちこちひびの入った土壁、部屋の間を仕切る障子や襖。さっきまでの現代風な住宅はどこへやら、俺の記憶にある通りの本家お屋敷である。

——おかしい。外から見る限りこんなに広い家じゃなかった。

「びっくりした？ 私もね、先月帰って来た時は驚いたわよー」

自慢気に笑う小町。

話を聞く限り屋敷の劇的なビフォーアフターはこの女の仕業ではないようだ。

「近所の人に聞いたらね、どうも何年前ここが怪しい宗教団体のアジトじゃないか、って噂が流れたらしいの。察するに両親が何か変な術使って、屋敷全体が小さな住宅の集合地帯みたいに見えるようにしたのねー」

なるほど。確かに住宅街の中に一区画丸ごと占領する屋敷があればそんな噂も立つだろう。

きつとあのマメな性格の両親は幻術を屋敷にかけるにしても、「売り地の看板を出す」「重機が動いて更地にする」「住宅地分譲中」「完成」みたいにコツコツと手順を踏んでやったんだろうな。

つまり、この本家屋敷の中身は俺が知っている頃と変わらず、外観だけが怪しまれないように偽装されているわけだ。

「まあ、積もる話もあるしどっか座れる場所に行こーか」

そう言っただけで女が伸びをした瞬間、体に巻いていたバスタオルがはだけて床に落ちた。途端に露わになる裸体。突然のことだったので俺は目をそらす事も出来ず直視してしまった。

「う……あ……」

目の前の綺麗な薄肌色をした曲線美に俺は再び顔を真っ赤にしてしまう。自分で言うのもなんだが俺は初^{うぶ}な方である。

しかし当の女の方はまったく気にする様子も見せず、バスタオルを床から取り上げると体の前だけ隠すように持つ。

「何恥ずかしがっちゃてるのー？ 別に良いじゃない、姉^{きょうだい}なんだしー」

そっちはそのつもりかもしれないが、こっちはまだそのつもりじゃ無いんだよ！

バスタオルが押し当てられて変形するその膨らみはあからさまに大人の女性の魅力に溢れ、見てとれる柔らかさに俺は心の底からこの女が俺の姉でない事を祈った。実の姉にそんな感情を抱くような趣味は俺には無い。

天真爛漫な女の笑みに俺が言葉も出せずたじろいでいると、ハジメとミケが勝手に屋敷に入ってきた。

まず二人（？）はいきなり屋敷の規模も内装も変わったことに驚き、次に俺の前で微笑んでいる小町の格好に驚いた。ヒッチコックの映画ばりの連続的衝撃だろう、きつと。

さて、くどい程言っているようにハジメはバカである。そして、バカとは欲望に忠実なものである。

——この場合欲望が向かうのは……

「姐^{あね}さん！ 素晴らしい肉体美！」

どこぞの大泥棒が不二子ちゃんにするような体勢で小町に飛びつくハジメ。

呆れて物も言えなかったが放っておくわけにもいかず、廊下の突き当たりに古めかしいタンスを見つけたので、足元のミケと目配せをしてポケットの中のウノに手を当てた。

「化猫の二又路^{シユレディングガ}」

ゴッン！

小町と入れ替わったダンスにハジメは思いつきり頭から激突した。犯人の俺が言うのもなんだが、見てるだけで痛そう。

そのまま漫画みたいにズルズルとダンスの表面を伝って崩れ落ちるハジメ。気を失ったらしい。

「へー。今のがシグマの付喪神かー」

感心した様子の小町。ハジメには悪いがこれで亀じいの為のポイントを稼げたかも。

「面白い呪術だね。見た目も可愛いしー」

小町は床のミケを両手で抱き上げると目の高さを合わせて耳の後ろを指で撫でる。

ミケはと言えば褒められたから目を細めて上機嫌。しかし、その細めた目が真っ直ぐバスタオルで隠された胸元に注がれているのを俺は見逃さない。

まったく、スケベな奴らめ！

「……まあ、一言で言うとか家出だったんだよねー」

畳敷きの和風な客間に通された俺とハジメは並んで座り、向かい合った小町の話を聞いていた。

小町は一旦自分の部屋に行って着替え、今は水玉模様のパジャマにカーディガンを羽織っている。ついでに酒とつまみを持ってきたので、俺とハジメは晩飯代わりにナッツやイカの燻製に手を伸ばす。「修行ばっかやらされる生活に飽きた、って言うの？ つまんなくなっちゃったから両親と大喧嘩して出て行ったんだよねー、八歳の時に」

「八歳の時に！」

信じられないという様子のハジメ。額の腫れた個所には絆創膏が貼られている。

本人は断固として小町による治療を望んだが、これ以上身内を薄汚いガキに触らせるのは癪しゃくだったので俺が可能な限り痛みを伴う応

急手当をしてやった。

「そう、八歳の時。シグマはまだ一歳だったかな……」

どうりで記憶に無いはずである。

でも、いくつか納得が行かない事がある。

「どうして親父もお袋も俺にお前の事を言わなかったんだ？」

「ああ、家出る前に大喧嘩したって言ったでしょ」

バツが悪そうに横を向いて視線をそらす小町。

「その時にね、盗んじやったんだよ。家に保管されてた付喪神の一つを依代ごと」

「ええっ！」

とんでもない告白だ。

前にも少し触れたが、安蒜本家では付喪神をかなり神聖視している。依代を雑に扱うのはもちろん、俺がするように略称を付けるのもご法度だった。

陰陽師や霊媒師など、時代に合わせて付喪神を使った仕事で財を築いてきた一族だから当然のことかもしれないが、俺はその堅苦しさがどうにも息苦しかった。

そんな家なので付喪神を盗むなんてもっての他である。確実に勘当されるだろう。これが両親が小町を「居なかった人間」として扱った原因か。

「だって、強い付喪神が居たら思わず依代を自分で所有したくならない？」

俺のじつとりした目を見て小町が言い訳を始める。

まあここで糾弾しても仕方ない。次の質問へ行こう、と思った時にハジメに思っていた事を先取りされた。

「でも、姐さん。こんな広いお屋敷に一人で住んでるんですか？」
「どうやらハジメの中では小町は「姐さん^{あね}」で定着してしまったらしい。俺もずっと「小町」と呼び捨てするのは実の姉弟として変だし、姐さんで行こう。」

「ああ、母親とか父親とか、その他のお抱え依巫やお手伝いなんか

は全部イギリスに行っちゃってるよ」

姐さんはまたケロッとした顔で言った。

「イギリス!？」

「そう、イングランドの方で封印されてた妖怪や付喪神が目覚めたらしくて、本家総出で退治に行ったんだってさ」

「俺たちは行かなくて良いのかよ?」

「私はともかく、シグマなんて行ってもただの足手まといよ」

……反論出来ない。

自分はまだ付喪神を使えるようになったばかりなのだ。一流の依巫に混じって戦っても確かに仲間の迷惑になるだけだろう。

姐さんは自分がさりと云った言葉が弟をへこませたとも知らず、待ちかねたように手元の「銘酒・親泣かせ」とラベルに書かれた日本酒を開けた。

「そんな事よりさー、この隙に私と本家乗っ取っちゃおうよ!」

手酌でお猪口ちしほに注いで、気持ち良さそうにグイッとやる。

「ああ、そうだな乗っ取っちゃお……っておい!」

今何て言った? 本家に乗っ取る?

姐さんの発言にハジメとミケも目を丸くしている。鏡を見たら多分俺も同じ表情してるんだろうな。

「良いじゃない。だって私その為にここに戻って来たんだしー」

にっこり笑いながらも一杯酒を注ぐ姐さん。手元を見ずに正確に注いでいる辺り一人酒には慣れているようだ。

予想外の帰宅動機だが、一応話ぐらいは聞いておこう。俺は黙って目で姐さんに先を促す。

「私旅先でその本家総出の妖怪退治の噂聞いちゃってさ、これはチャンスだと思ったのよ。今なら本家には誰も人が居ないし、弟のシグマも一緒なら簡単に私が新しい安藤家当主になれるんじゃないか、って」

……そういう事だったのか。

突然の東京への呼び出し、誰も居ない本家、全てこの実の姉の仕

業だったんだ。

俺はあまりの自分勝手さに思わず目まいがして頭を抱えた。

「でも姐さん、どうして家出してたのに当主になろうと思ったんですか？」

「そうでい。本家が嫌いに出て行っただろ？」

ハジメとミケが口を挟む。

「私嫌いだったのは本家の堅苦しさだけなの。付喪神使ってお金を稼ぐのは好きだったしね、特にお金を稼ぐ部分」

ダメだ。さっき構築されたばかりな俺の中での姐さんのイメージが音を立てて崩れて行く。

「どうせ私かシグマのどっちかが後継ぐんだし、もっと気楽で楽しい一族にしようよ！」

一人で「カンパニー！」とお猪口を掲げる姐さん。相当酒が回って来たな。

呆れて物も言えない俺とは逆に、ハジメとミケのスケベコンビは見事に姐さんの口車に乗せられてしまった。

「流石姐さん！ 素晴らしい野望だ！」

「付いて行くぜい、姐さんの弟の付喪神としてな！」

「本当？ 嬉しいなー。みんな頑張っって私に楽な生活させてね」
そう言っって姐さんは残りの酒をビンに口を付けて飲み干した。

本音はそっちか……、ただ働きたくないだけなんじゃ……？

俺が予定していた東京でのワンダフルライフに不吉な予感が覆いかぶさる中、姐さんを中心にいるの間に少人数での宴会みたいになっっていた。後片付け誰がするんだろう……？

まとめてやると面倒くさいので少しずつゴミをまとめてみると、姐さんが話しかけてきた。

「そう言えばシグマ、あんたずっとミケちゃん出しっぱなしで大丈夫なの？」

「大丈夫って……ひっこめ方分かんねえからそのままなんだけど」

「……いつから？」 少し姐さんが真剣な表情になった気がした。

「崖の時からずっとだから……一週間ぐらいかな？」

「……」

新しい酒のビンを眺めながら何事か考え込む姐さん。今度は「大吟醸・唯我独尊」と書いてある。

どうしたのだろうか？ 付喪神を出しっぱなしなのはいけない事なのか？

「……あ！ 何でも無いわよ。明日から学校始まるまでしばらくあるし、二人にいろいろ稽古^{けいこ}付けてあげるからその時ひっこめ方教えるわ」

そうか、なら良いんだけど。

気になったが、ちょうどその時ハジメが酒の器に手を伸ばすのが視界の端で見えたので話は止め、素早くシュレディンガーを発動してお茶と入れ替える。

「さあ二人とも、今日はもう寝なさいな。私一人でしばらく住んだから屋敷はあちこち散らかってるけど、近い内に遠くの分家の方からお手伝いさんに来てもらうことになってるから安心してね」

「はい」

こうして宴会はお開きとなり、俺たちは手ごろな部屋を探して廊下を歩きだした。

「あの子、どう思う？」

一人客間に残された小町はちびちびと酒を一人で飲みながら誰かに語りかけていた。

小町が見ているのは床に置いた一冊の黒い手帳。革張りの表紙で高級そうな印象を与える。

「一週間もぶっ通しで付喪神を出してられるなんて普通じゃないわ。呪術を使わないにしてもせいぜい一日もすれば禊が枯れる」

「遅咲きというだけで、やはり安蒜の長男でござるな」

どこからともなく、いや正確に言うなら小町が話しかけていた手

帳の内側から低い声が聞こえてきた。

そして手帳の周りに紺色の光が宿る。

「そうね。流石私の弟」

感動からか、目を潤ませてお猪口の酒を見つめる小町。

――最後に会った時は本当、ただの赤ん坊だったのにな。

――シグマは憶えて無いかもしれないけど、最初にシグマが名前を呼んだのは母親でも父親でもなくて私だったんだよ。「おねーちゃん！」って。

それからしばらく、思い出に浸りながら少しずつ飲んでいた小町だが、最後は面倒くさくなったのかやはりビンに口を付けて一気飲みした。

「小町、少々飲みすぎではござらんか？」

「うるらいわねー！ カゲロウはちよっと黙ってて！」

呂律が回らなくなってきた小町に、手帳の中から溜め息が聞こえた。

五つ。 通り魔は月と躍る

「それ」は月夜を駆けていた。

雲一つない江戸の月夜は澄んだ闇に満たされ、人々は光で仕切られた空間を朝まで行き交う。

屋根から屋根へ、ビルからビルへと獣のような動きで跳ねまわっていた「それ」は獲物を見つけ、電柱の横に着地して足を止めた。

そこは客の少ない住宅街のコンビニ前。近くの高校の不良らしい少年たち五人程が駐車スペースに座り込んでへらへらと笑っている。すいつ、と電柱の横の暗がりからコンビニが照らす光の中に進み出る「それ」。

夜闇に溶けるような黒色の上下のジャージはサイズが大きいのか手足の丈が余ってしまっている。小柄でも大柄でも無い体格。

しかし、「それ」の服装で一番異様なのは顔である。長めの水色のマフラーをターバンで顔を隠すようにしてグルグル巻きにし、頭全体を覆っている。隙間があるのは目元だけで、そこすら夜の暗がりでは中が見えない。

不良の一人が「それ」に気付いた。まず彼は「それ」の風貌にギョツとし、その後肩を揺らしながら近づいた。

「何ガンつけてんだ？ オラァ」

喧嘩を売る不良の定番とも言える台詞を吐き、睨みつける不良。仲間もゆっくり歩いて来てそれに加わる。

「……」

「それ」は黙ったまま。まったくリアクションを見せようとしな

い。

「おい聞いてんのかコラァ！」

「……」

応答なし。「それ」はただ突っ立ってマフラーの内側から五人の不良を睨み返していた。

「なめやがって！」

そして、とうとう痺れを切らした最初の不良が拳を上げる。

——その瞬間。

一瞬、殴りかかった不良は何が起こったのか理解できなかった。

目の前の「それ」が突然消え、同時に体が真後ろに吹っ飛ぶ感覚。コンクリート塀に背中から叩きつけられてから、腹を蹴られた痛みが脳まで伝わって来る。

——トンツ

さっきと同じ地点に「それ」は現れた。

まるで上空から降りてきて着地したような音。つまり「それ」はあの殴られる一瞬で逆に相手を蹴り飛ばし、その勢いで空高く跳び上がっていた事になる。

ぞわり。残った四人の不良たちの背筋が寒くなる。

事態が飲み込めず、無茶苦茶に襲いかかる不良たち。しかし大勢での同時攻撃にも関わらず、また一瞬で「それ」は居なくなり空振り。

「コッチ」

背後から聞こえたくぐもった声に不良の一人が振り向いたと同時にその顔を襲う強烈な回し蹴り。一撃で彼は地に突っ伏して動かなくなった。

飛び交う怒号、壁や地に人が叩きつけられる音、骨を碎かれる苦痛の声。

「それ」は目にも止まらぬスピードで動き、跳ね、不良たちを華麗な動きで無傷のまま倒して行く。

「はあ……はあ……」

最後に残った不良が折れた腕をかばいながら近くに止められたバイクまで行き、キーを回して走り去る。

片腕のおぼつかない運転で片道一車線の車道を全速力。ブレーキ

を一度もかける事無く大通りを目指して彼はバイクを走らせた。

もっと速く！ もっと速く逃げるんだ！

そして突き当たりに多くの車が行き交う明るい国道が見え、彼は心の中で胸を撫で下ろす。

――が。

「逃ゲテモ無駄」

……嘘だろ。

耳元で声が聞こえた。

心臓を握りつぶされたような衝撃に耐え、不良が首を回して横に振り向くと……

バイクと並走するように「それ」が走っていた。アクセルは入れっぱなし、出しているスピードは人間が足でついてこれるレベルのものでは無い。

しかし、それは走っていた。バイクのスピードに合わせて、息も荒げずに頭に巻いたマフラーの向こうからジッと不良を見つめていた。

……こいつ、人間なのか！？

「バイバイ」

月夜の街に悲鳴が響き渡り、機械が大破する音がした。

明らかにおかしいスピードで大通りに滑り込むバイク。しかしそれはもうバイクと呼べるような原形を留めておらず、国道の真ん中を仕切る柵にぶち当たって炎上した。

遠くからサイレンが聞こえてくる。消防か救急か、はたまた警察か。

ビルの上から「それ」は燃え盛るバイクを見ていた。今日の自分の戦績に満足する気持ちで心をいっぱい満たしながら。

「戦ウツテ、ヤッパ楽シイ」

――美しい月夜のことだった。

しばらく姐さんとハジメ三人での修行生活が進み、いよいよ高校の入学式の日になった。

どうも俺は無意識の内に禊をミケに流し続けていたようで、姐さんに言われて意識して見たら出し入れが出来るようになった。

俺は他にもいくつか新しい理論や術、戦い方を習ったが難しい物は特になかった。

一方ハジメの方は手頃な付喪神が本家屋敷にも無かったので、延々姐さんが用意した人形ひとがた（人間の形に切った紙）に禊を注ぐ練習をしている。

おそらく、付喪神はどっかの誰かさんの悪行から学んだ両親がまとめて持って行ったのだろう。誰の悪行かは言わないが。

俺たち三人は全員家事が得意ではなかったので、自然と屋敷はほとんど散らかって行く。立派な台所もあるのだが、使うのはカップ麺の為の給湯ポットとコンビニ弁当を温める電子レンジぐらいだ。

このままでは俺たち姉弟で本家を乗っ取る前に、ゴミに屋敷が乗っ取られそうである。

「うん！ 二人とも似合ってるじゃない」

入学式の朝、高校の制服に身を包んだ俺とハジメを玄関で送りだしながら姐さんはにこやかに言った。

姐さんが手配して俺たちが入学することになったのは私立湯島学園ゆしま高等部。受験無しで入れる辺り大した学校では無いのだろう。俺もハジメも通知表で「4」にお目にかかるのが一年に一度ほどの成績だったので別に気にならない。（ちなみに4が付いても必ず体育である）

控えめなデザインの校章が付いた紺色のブレザー、さわやかな色合いのネクタイ、悪くない制服である。中学時代は学ランだったのでこういう制服にも慣れていた。

「式が始まる頃には私も行くからねー」

「ちゃんとした服着て来いよ」 バスタオルの一件を思い出して俺は言う。

「大丈夫大丈夫。私はこう見えて『家の外での印象だけは良い』って親によく言われてたんだから」

「それ、きつと褒めて無いぞ」

入学式は滞りなく行われた。

いろんな偉そうな人の話を聞いて、歌詞もリズムもまだ知らない校歌を口パクで歌い、後は黙って座ってる。それだけ。

式の後教室でホームルームをするので担任が来るまで座って待つ。出席番号順に並んで座っているの俺は前から三番目。安蒜という名字はこの方式で並ぶと大体この位置に来る。後ろを振り返るとクラス全体がよく見える。

まあ、見た感じ明らかなワルは（俺とハジメ含め）全体の四分の一ぐらいか。問題ありそうなのはどれも男子で、女子は割と落ち着いた学校らしい。

「怖い顔して何見てんの？」

横で女の声が出た。

見上げると長めのポニーテールに快活そうな雰囲気をした女子が、俺の机に手をついて俺の顔を覗き込んでいた。のぞわざわざ立って話しかけている事から察するに、近くの席では無いのだろう。

意思の強そうな形の整った眉にスラッとした鼻。目は悪戯っぽく大人びた印象と子供らしさが混在した顔立ちだ。美人だが俺より若干身長が高そうなのが気に入らない。

「別に、生まれた時からこんな顔だ」

「そう、じゃあ人生の半分くらいきつと損してるわね」

余計なお世話である。

その女子の口調はまさに学級委員とか、クラス合唱で不真面目な

男子にマジギレするタイプのものであり、面倒くさそうなのでなるべく懐かれぬように目をそらす。

「私、大府^{だいふ}愛^{あい}。そっちは？」

「安蒜司隈、シグマで良い。分かったらさっさとあっち行ってくれ」「イヤ。先生来なくて退屈だし」大府がキツパリ拒否する。

「なら、お前みたいな女とお話ししたがってる奴を知ってるから、そいつへ行ってくれ」

俺は顎で近くの席の女子に片っ端から声をかけているハジメを示す。

大府は横目でハジメの方をチラリと見た後、

「あの人小物っぽいからヤダ。つまらなそう」

なかなか人を見る目のある女である。もっとも、あいつが自ら小物オーラを振りまいている気がしないでもない。

「シグマ君みたいな怖い顔の人と仲良くなつとくと、学級委員やる時楽そうだし。なんなら書記でもやる？」

予想通り、こいつ小姑^{ここ}のような委員長タイプだった。

「お前学級委員なんてやりたいのか？ あんなの体^{てい}の良いパシリだろ」

「パシられる振りしながらクラスを裏で支配するって面白そうじゃない？」

「全然。不良らしく堂々と腕っ節で支配してやるさ」

多分騙し打ち中心だけど。

「おお！ やっぱ不良だったんだ！ 不良少年なんて今の時代絶滅危惧種だと思ってた」

「そう思うなら席へ戻ってくれ。絶滅危惧種はデリケートなんだ」俺がそろそろ本気で追い払おうと思った時、教室のドアが開いた。入って来たのは無難なスーツに濃い青のネクタイの男。年齢は三十歳前後か、整髪料で適当に固めたクシャツとした頭をして疲れた表情をしている。

「ほらー席つけーい」

手に持った出席簿で教卓をパンパンとやりながら生徒を席に戻す。
「また後でね」と言って大府も去っていく。

「じゃあ出席取るぞ。青木！」

すらすらと進んでいく出席確認。全員分終わった所で男が黒板に文字を書き始めた。

不必要に大きく書かれた文字。書き方もわざとやるような感じで乱暴だ。

「俺がお前ら1年E組の担任、桑原くわばら剛つよしだ！好きな物は聞きわけの良い子供、嫌いな物はそうじゃない子供、絶賛彼女募集中、以上！何か質問は？」

しーん。

教室中誰も表情一つ動かさない。振りかえらなくてもはつきり分かるほど静かだ。

何かしらのリアクションを期待していたのだろう、桑原は首をかしげながら次の話に移った。

「えー、人という字はお互いに支え合って……」

何か可哀そうに見えてきた、この教師。顔が笑いを取ろうと必死になり過ぎている。

そのまま桑原の長話以外、静寂に包まれること数分間。やっと金八先生の真似事が終わり諸連絡になった。

「……で、次だが最近この辺りで高校生を狙った通り魔が出没しているらしい」

通り魔……？

初めてこの男の言葉で興味を惹かれた。周りのものも同様らしい。「なんでも夜中に街でたむろしている不良ばかり、骨を折られるような重症にあってるそうだ。あんまり夜中出歩くなよ」

田舎じゃ通り魔の情報なんて学校から警告されなかったな。東京は俺が留守にしている間に随分物騒になったらしい。

そんな事を他人事感覚で考えていた俺は、突然桑原に指されて思わずビクついた。

「この中ではそうだな、お前！ 出席番号三番の安蒜！ お前なんて気をつけろよ」

クラスの部分部分から失笑が漏れる。桑原は初めて笑いが取れてご満悦だ。

はぁ。俺ってそんな人相悪い顔してるのか。自覚していてもヘコむ。

そんなこんなで今日はお開きになり、大府に絡まれる前にハジメを連れて学校を後にした。

時刻は午後八時。夕飯をコンビニに買いに行く事になり、三人でジャンケンをして負けた俺が買い出しに行くことになった。

「くそっ。二日連続で負けるなんてついてない」

道端の小石を蹴飛ばす。短く跳ねたそれは住宅の塀で反射してまた道路に戻る。

蹴って弾かれて、蹴って弾かれて。そんな事を繰り返しながら最寄りのコンビニまで辿りつく。

夜のコンビニは街の中でかなり浮いた存在だ。壁が透明なので他の店にくらべて圧倒的に外から見た時に明るく、街灯に蛾が集まるように人を引き寄せる。

晩飯と明日の朝飯用の弁当と飲み物を渡された金で適当に買って、重たい袋を両手に吊るし自動ドアをくぐり出る。

小石で遊んでいたせいか、店の時計を見ると結構時間がかかっていたので急いで帰ろうとすると、前方の暗がりになれかが居るのに気付いた。

――何だ？ こいつ。

水色のマフラーらしきもので顔をグルグル巻きにして隠したそいつは、黙ったままこっちを見つめていた。話しかけるでもなく、ただ無音のまま俺の事を見ている。

相手にしない方が良いと思い、不審者を迂回するように大回りで

道路に出る。

が、いつの間にかまた正面に奴が居る。

——おかしい。確かに避けて通ったはず。

疑問に思った瞬間、目の前で風を切る音がした。

反射的に体を反らして避ける。一瞬、一瞬だけ俺の頭がさっきまであった空間を謎のマフラー男の腕が一閃するのが見えた。

今の距離を一体どうやって詰めた？ 分からないことだらけだ。

そんな事に気を取られているとまた奴の姿が無い。慌てて辺りを見渡すが動くものは無し。

「シグマ！ 上でい！」

ミケの声で気付き、体を丸めるようにして地面を蹴り、コンビニの袋を守りながらでんぐり返し。

振り返ると、俺の居た場所に上空からものすごい速度でマフラー男がかかと落としを叩きこんだところだった。

「危ないところだったぜい」

「サンキュー、ミケ」

ミケの依代を持ってきておいて良かった。ミケと俺は並んで向かい合ってマフラー男と対峙する。

こいつ、やっぱり例の通り魔か！

マフラーの向こう側から強い感情を感じる。こちらからは目元すら見えないので読みとれないが、どうやら奴はかなり興奮しているらしい。

「モット、戦おう」

微かなくぐもった声で、奴が初めて言葉を発した。
言われなくてもそのつもりである。

「行くぜ、ミケ！」

「おう！ おいらとシグマの初陣でい！」

「化猫の二又道！」
シュレディンガー

コンビニの駐車場にあった赤いカラーコーンと俺の手のビニール袋が入れ替わる。これで買ったものを心配せずのびのびやれる。

「……才前モカ」

通り魔がポツリと言った。

——お前も？

続けて何か、気持ちで押されるような感覚が俺とミケを襲った。

「月夜の祭囃子」
ルナティックハート

——こいつ、依巫か！

六つ。 通り魔は不良を圧倒する

「月夜の祭囃子」
ルナティックハート

目の前の通り魔が小さく呟いた。

まさか……こいつも付喪神を使う依巫なのか!?

「おい！ お前」

ブウン！

言葉は強烈なスピードで繰り出された蹴りによって遮られた。腹狙いだったので体をくの字にして回避。

今回は目を離さなかったから分かる。こいつ瞬間移動でも何でもなく、走ってこの距離を一瞬で詰めてやがる。

右脚、左腕、また右脚。

ゲームセンターのダンスゲームをやる要領で次々と仕掛けられる蹴りや殴りをかわす。どれもとんでもないスピードだ。こんなの食らったら骨折じゃ済まないかもしれん。

「シグマ！ こいつおかしいぞ！」

通り魔の回し蹴りをジャンプでかわしたミケがブロック塀の上に着地しながら言った。俺も自然とそこに背を付けるように追い詰められる。

「そんなの見りゃ分かる！ まともな奴は初対面の人間に殴りかけらねえよ！」

「そうじゃねえ！ 付喪神の名を呼んだくせに姿が見えねえぞ」

塀に向かって奴の突き。俺とミケはそれぞれ逆方向に跳躍して避けたが、もろに食らった塀には大きくひびが入った。

——確かに。

アスファルトに両手両足を付けて着地。立ちあがって構えながら辺りを見渡す。ミケが言う通り付喪神が見当たらない。

「多分奴の付喪神は依巫の身体能力を著しく上げるタイプ、どっか

陰に隠れて最初から呪術をかけてたんだろう」

「そっか！ だったらそいつを見つけて倒せば……」

「止めとけい。この依巫がそんなこたあさせないさ。ここはいつちよ……」

通り魔の振り下ろした両腕を避け、再び跳躍。ミケと俺は今度は並んで着地する。

「二人でこの手拭野郎をのしちまった方が早ええ！」

——そうだな。

先ほど同じように真正面から駆けてくる通り魔。これまた同じフォームでパンチを繰り出すが、さっきより余裕のあるタイミングでかわせた。ここから反撃だ！

空振りした通り魔の腕を掴み、体ごと回転させながら手首を絞め上げる。背中あわせになったところで俺の石頭で後頭部に頭突きをお見舞いすりゃ……あれ？

……おかしい。頭が持ち上がらない。

頭だけじゃない。腕も脚も、体全体が動かそうとしても何かに邪魔をされる。腕を掴んで拘束しているのは俺の方なのに、逆に拘束されているような……。

——ポタ。何処かから水滴が頬に飛んできた。

雨でも降り始めたのかと呑気に考えてしまったその時、テニスのバックハンドのような動きで動いた通り魔の腕に脇腹を思いっきりやられた。激痛が走り、横向きに思いっきり吹き飛ばされる。

「化猫の二又道！」
シュレディンガー

痛みをこらえ叫ぶ。固いブロック塀に衝突する直前に俺はコンビニの裏のゴミバケツと位置を入れ替わった。

俺の代わりにゴミバケツがブロック塀に激突し中身をぶちまける。それは蓋が外れてとかのレベルじゃなく、文字通り大破して中の紙くずやら生ゴミを辺りにまき散らしたのだった。

「ふう。もうちょっとでお前さんが中身をぶちまける所だったぜ？」

「言うな。俺も同じ事考えて吐きそうになってた所だ」

俺が特攻を仕掛けている間この猫はどこへ隠れていたのやら。澄ました顔して肩に飛び乗ってくる。こんな時でもこいつは人の肩の上がお気に入りだ。

打たれた脇腹がズキズキ痛む。飛ばされた勢いの割にダメージが少ないのは姐さんに教わったばかりの「結界」の成果だろう。

依巫は付喪神と共に闘う時、身の安全を守るために禊の力を応用した「結界」を張る事が出来る。結界がある間は身体能力が高まり、結果としてダメージを軽減できるらしい。とはいえあのゴミバケツのように壁に叩きつけられてはただじゃ済まないが。

通り魔はさっきの買い物袋の入れ替えだけじゃミケの呪術の正体を理解していなかったらしく、突然俺と入れ替わって碎け散ったゴミバケツを不思議そうに眺めている。幸い俺たちが今居るのは店の裏で奴からは死角。ここからなら楽に不意打ちが……

しかし俺の考えを聞いたミケの出した答えは予想外のものだった。

「逃げるぜい、シグマ」

「……！ 何でだよ！？」

「見る。今の音で店員が勘づきやがった」

ミケが言った瞬間、自動ドアが開く音がして縞模様の制服を着たコンビニ店員が外に出てきた。店員は辺りをキョロキョロと見回し、無残に大破したゴミバケツを見て首をかしげる。通り魔はどこかに隠れたらしく、姿が見えない。

「これ以上街中でやると面倒な事になりそうでい。それにあの手拭頭はやバイ。言っちゃ悪いが今のシグマよりは全然……」

「——くっ！」

確かにミケの言う通りだ。たった一殴り脇腹に食らっただけなのに、この痛み。骨折まではいつてなさそうだがダメージは酷い。

その上奴の圧倒的身体能力。今の俺が不意打ちを仕掛けた所で勝てる可能性はかなり低い。

ここはやはり——。

「シグマ！ また来たぜい」

見ると電柱の上から通り魔が下りてきた。どうやってあの一瞬で登ったのか、謎だらけだ。

通り魔は足音を忍ばせてゆっくりと歩き回り、見失った俺たちを探している。そして段々と俺たちの潜む店の裏手へ……

「妙なことを考えるんじゃないぜい？」

「分かっている。さっきので新しく分かったこともあるしな」

ミケが俺のほのめかしの先を聞こうとしたが、今は時間が無い。

通り魔がすぐ手前まで迫っているのだ。

「化猫の二又道^{シュレディンガー}」

俺とミケは二人まとめて駐車場にあった自転車と入れ替わった。

店の裏を調べる通り魔が見つけられるのはそれだけだろう。

最初に置きっぱなしにしていた買い物袋を回収し、再びシュレディンガーで車道を挟んで反対側の歩道にあった自転車と入れ替わる。その後も屋敷まで何度も呪術を使ってショートカットしながら帰った。そうやって帰らないとあの通り魔がすぐにも後ろから全速力で追ってくるような気がしてならなかったのだ。黒いジャージをはためかせ、マフラーの奥から冷たい視線をこちらにロックオンしながら。

気が付くと上着の下に着たシャツは冷や汗でビツショリだ。まだ春だってのに……。

早い話が俺は怖かった。冷静な頭で考えてみれば東京で最初の喧嘩であり、人生で最初のヨリマシ同士の戦い。相手は呪術も付喪神も分からない事だらけと来てる。

俺は怖かった。あの通り魔の全てが。

「ただいま」

やっこの思いで屋敷まで着いた。が、様子が変わである。

——なんと、屋敷が綺麗なのだ。

さっき家を出た瞬間までは、しばらく続いた俺とハジメ、姐さん

三人の駄目人間による共同生活の結果であるゴミの山が屋敷のあちこちを占領していた。屋敷は無駄に広いのでそれでも生活するのに不自由は無く、姐さんなどは手ごろな部屋を一つ見つけてゴミ箱ならぬゴミ部屋として使用していた。

しかし今はどうだろう。クモの巣が張っていた玄関は塵一つ無い清潔な空間に変貌し、廊下は顔が映るぐらいまで磨きこまれている。ほんのり旨そうなおいも居間の方から漂ってくる。

あまりの変化に俺が咄然としていると姐さんと一緒に見知らぬ女性に廊下の向こうからやって来た。

「おかえり！ シグマ。お使い行ってきた所悪いんだけど、もう夕飯の支度してもらっちゃた。この小雪ちゃんにね！」

「どうも、白川しらかわ 小雪こゆきです。お世話になります」

「あ、こちらこそよろしくお願いします」

相手は何者なのかよく分からなかったが、つられて俺も頭を下げる。

礼儀正しくお辞儀をした見知らぬ女性はショートカットの似合う清楚な雰囲気美人さん。エプロンにハイネックのウールを着て、いかにも家政婦さんといった服装だ。母性溢れるハジメが好きそうなタイプである。

「ほら、この前分家の方からお手伝いさんと呼ぶ、って言ってあったでしょ。ついさっき北海道の方から来てくれたの。おかげで家もピカピカ、久しぶりに暖かい手料理だわ」

自分がやったわけでもない癖に自慢げに両手を広げて清潔になった屋敷をアピールする姐さん。それを小雪さんはこにこしながら見ている。苦笑じゃなくて本当に嬉しそうに笑っているのだから、なかなかよく出来た人だ。

その上俺が帰って来るまでの間に家中を掃除して晩飯まで作ったとなると、家事の腕の方もかなりものだろう。心強い助っ人が来てくれたものだ。

「お料理は居間に用意してあるので、冷めないうちに頂きましょう。」

ハジメさんはもう食べ始めていますし」

あの野郎、俺が酷い目に遭いながらコンビニ行ってきたってのに、薄情な奴め……。

俺は呪詛の言葉を胸の中で唱えながら居間へと向かった。

小雪さんが風呂場を綺麗に掃除してくれたおかげで大分快適だった入浴を終え、俺が台所を通りかかると小雪さん食器を洗っているところだった。夕食で使ったのだけでなく、棚に収まった古い食器もまとめて洗っているようだ。

「あ！ シグマさん、お湯加減どうでした？」

「ええ、丁度良かったですよ」

ここまで気の利く年頃の娘さんはそうそう居ないだろう。

食事の時に聞いたところ彼女は現在十九歳、俺とハジメのたった四つ上である。北海道にある分家で小さい頃から修行をしていて、高校を出てからはそこで家政婦をして働いていたそうだ。姐さんとは昔からの知り合いで従妹いとこのような関係らしい。

「こんな遅くまで働かなくても大丈夫ですよ」

真剣に彼女が過労死しないか心配だったの言った。

「いえ、もうちょっとで終わりますから……あら、洗剤が切れちゃいました」

食器用洗剤の容器を逆さにしてスポンジに垂らそうとする小雪さん。確かに空のようだ。

「私の荷物に予備があるので持ってきます」

「良いですよ、俺が取ってきます。姐さんの部屋の隣でしたよね？」
俺は相互主義者である。すなわち優しい相手には優しくし、むかつく相手にはむかつく態度を取るのを第一にしている。この小雪さんには最大級の優しさを提供するべきだろう。

本家の跡取りにそんな事はさせられないと小雪さんは断ったが、俺が少々強引に引き受けた。親切とは多少強引なぐらいが丁度良い

のだ。

廊下を小走りで走り抜け、姐さんの部屋の隣の襖を開ける。姐さんの部屋からは今日も酒を注ぐ音が聞こえてきたが、今さら止めたところであの大酒飲みは聞く耳を持たないだろう。

六畳の和室の隅に置かれたボストンバッグを開くと衣類やら本やらがいろいろ飛び出してきた。不意に妙齡の女性のカバンを漁る自分に恥ずかしさを覚えたが、それより今は小雪さんの仕事を早く終わらせる為に洗剤を探してしまおうと思った。

しかし次の瞬間、俺は彼女の荷物の中からもない物を発見し、ミケを呼びだした。

「ミケ！ 起きてるか？」

「何でい、こんな時間に……」

寝ぼけ眼のミケが畳の上に出現する。不満を言うそいつに俺は黙ってカバンの中に入っていた一式の服を見せた。

「こりゃあ……」

「ああ、これはまさか……」

俺とミケは背筋が凍る思いでバッグに収まった真っ黒な上下のジャージを見つめていた。

黒いジャージ……あの通り魔……

まさかな。偶然だと思いたい。

七つ。 通り魔は正体を明かす

「……」

「どうしたの？ ふてくされた顔して」

「……」

「失恋でもしたのかな？」

「……」

「ああ！ せっかく人が話しかけてあげてるのに、聞いているの？」

「……頼んでねえ」

あまりに前の席に勝手に座った大府がうるさいので、俺は突っ伏していた机から顔を上げた。

あの後、小雪さんのカバンから見つけてしまったジャージが気になって昨夜はほとんど寝付けなかった。そんな馬鹿な事があるはずないと思っても、彼女への疑念が頭から離れなかったのだ。

まだ会ったばかりだがあんなに優しいお姉さんが通り魔の正体だなんて思いたくない。けれど、彼女は分家から来ていて付喪神も使えるはず。付喪神を操る依巫なんてそこら辺にごろごろしてるはずもなく、彼女が通り魔の正体なら合点が行く。

そんな事をぐるぐると考えている内に夜は明け、学校だ。寝不足で頭がガンガンする。高校デビュー二日目だったのに……。

まだ授業は始まらず、オリエンテーション的な事が中心なので半死半生の俺でも問題無かったが、休み時間の度にわざわざ遠くの席からやってきて俺に絡む大府が正直うざい。

「え？ 友達居なそうだから学級委員として構ってあげてただけど？」

言い忘れていたがこの女は宣言通り、一時間目の係決めで学級委員に決定した。ちなみに俺は担任の桑原が現代文の教師だと言うのでその係に立候補した。授業連絡のやりとりの手間が省けるからである。体を動かすしか能の無いハジメは当然体育委員。

「入学したてで友達たくさん奴の方が珍しいと思うが」

「そう？ 私はもうクラス全体と友達だよ」不敵な笑みを浮かべる大府。

「少なくとも俺は友達じゃないな」

「ううん、私が友達って決めた」

強引な言葉を吐きながら、大府は俺の机の端にウサギのキャラクターの落書きを始める。止めるのも面倒なので放っておいた。

「友情を押し売りするんじゃない」

「押し売りじゃないよ。薄っぺらいポケットティッシュみたいな友情を配ってるの」

「……その笑顔でえぐい発言するのはどうにかならないのか？」

まったく……妙な女になつかれてしまった。

ハジメに助けを求めようとも思ったが、あいつは高校はナンパをする為にあると勘違いしているらしく、上級生だろうが教師だろうが美人が居れば手当たり次第に声をかけていて忙しそうだ。もちろん全て玉碎しているのは言うまでもない。

そうしている内に担任の桑原が入って来て本日最後のスケジュール、学校要覧とか言う分厚くて文字ばかりの本の説明を始めた。真面目に聞いている生徒は皆無。俺は取りあえず単位を三つ落とさなければ進級出来るという所だけ頭に入れた。

話の終わりに桑原が俺限定に話しかけてきた。

「現代文の係は……ああ、安蒜か。教材運ぶの手伝って欲しいから帰りのホームルーム終わったら職員室まで来てくれ」

入学早々教師に歯向かうのは得策ではないと思い、俺はおとなしく「はい」と返事をした。視界の端でハジメと大府がにやにや笑っている。人の不幸がそんなに嬉しいか、そうですか。

そのまま教室で行われたホームルームの後、俺は桑原の言い付け通りに職員室を訪ねた。

「おお。そのドアの脇、そこに積んである本をうちのクラスへ運んどいてくれ」

手が離せないという様子で机に向かっていた桑原は扉の開く音で一瞬こちらを見たが、その後はまた書類へ何か書き込みはじめ、背中を向けたまま俺に指示を出した。

俺は腰を下ろして本の束を抱えながら職員室を何となしに観察する。整頓されている机は少なく、ほぼ全ての机の上には教科書やプリントが所狭しと並び、あちこちの床にも用途が分からないような物品や本が積まれている。

まるで超多忙な巨人のビジネスマンのカバンの中みたいだ。と、思った時背中を向けたままの桑原が声を上げた。

「安蒜、学校には慣れたか？」

「授業も始まって無いのに慣れたかどうかなんて分かりませんね」
長引くと面倒くさそうなので俺は本の束を抱え上げて扉に手をかける。

「はっはっは。可愛げのない回答だな。お姉さんそっくりだ」

……！ 虚を突かれて俺は手を止める。

「姉を知っているんですか？」

「ああ。誰のコネで受験なしでこの学校に入れたと思ってんだ？」

この教師、そんな権限を持っているのか？

「姉とはどういう……？」

「まあ、腐れ縁と利害の一致みたいなもんだ。細かい事は子供は気にするな」手をひらひら振りながら適当な口調で答えた。

俺は深くそのことを聞こうとしたが、桑原の言葉に遮られた。

「こんな無駄話より今のお前には他に気になっている事があるんじゃないか？」

こちらを振り向かないが、なんとなく俺は桑原がニヤリと笑っているような気がした。

気になっていること……それはもちろん——通り魔の正体。

「話すだけじゃ問題は解決しないぞ」

少しだけ諭すような口調になった桑原の言葉を聞いて、俺はもうこの話は終わりだと感じた。これ以上食いついても奴は情報を出しはしない。

「失礼しました」

俺は重い本の束を両手一杯に抱えながら言って職員室を後にする。昨晩からのもやもやがこの桑原という男を通して増幅されたような気がした。

背中を向けて階段の方へ歩いて行くと、扉の隙間から桑原の声が聞こえた気がした。

「彼女は手ごわいからね。君に解決できるかな？」
多分、空耳だろう。きっと。

教室に戻ると誰も居なかった。

空っぽの教室と言うのは何とも表現し難い寂しさに満ちていて、俺は昔からの長方形の空間に居るのが嫌いだった。多分、教室いうのは人で満ち溢れているから教室として成立するのであって、人が居なければそこは別な名前の何かになるのだ。何かは分からないが。

俺が早く帰ろうと教材を教卓に置いて学校カバンに手を伸ばした時、ミケが勝手に姿を現した。

「シグマ！ この部屋に付喪神が居るぜい！」

「何だって？」

「間違いないや。今は消してるが、俺たちが入ってくる直前までこの部屋から廊下に気配が漂ってたんでい」

付喪神はそこら辺に簡単に転がっているものではない。俺が知る限りこの街で付喪神を使えるのは俺と姐さんと……

——あの通り魔。

ミケが言う通りなら、こんな身近に通り魔の手掛かりがあることになる。俺は目を閉じて意識を集中した。

付喪神はあの世とこの世、夜と昼の中間の存在。したがって目を閉じ、開き、という事を繰り返しながら意識を集中するとその気配を感じやすい。

約十秒ほどではっきり感じた。ミケの依代のウノを買った時と同様、昼間にぽっかり出現した夜闇の濃縮版みたいな気配を一つの机から感じた。俺とミケは教卓からその机へ。

気配はその机に乗ったカバンの中からだ。人の荷物を漁るのは二日連続だな、と思いながらチャックを開けて中を確認する。

「……間違いねえ」

俺の肩でミケがゴクリと唾を飲み込む。俺も心臓がバクバクしてきた。

そのカバンの一番上に入っていたのは長い水色のマフラーだった。あれだけ見たからはっきり分かる。これはあの通り魔が頭に巻いていた奴だ。気配はこのマフラーからなので、これが依代という事になる。

俺がカバンの主を確認しようとした瞬間だった。

「あーあ。もうばれちゃったんだ」

教室の後方側の入口に誰かが立っていた。逆光になってシルエットしか見えない。

どこかで聞いた、と言うより今朝からずっと聞かされて耳にこべりついてしまった声だ。

「せっかくもうちょっと、正体不明の通り魔として相手してもらおうと思ったのにな」

大府だった。台詞とは裏腹に、この状況を心底楽しんでい言う表情でゆっくり歩いてくる。

スカートが揺れる。ポニーテールにした髪が揺れる。俺の心は揺さぶられる。

逆光を受けながら大府は無邪気に微笑んだ。

「東京育ちの格好ばっかで弱い不良相手するんじゃない物足りなくてさ」
驚いて身動きできないでいる俺の正面に立ち、カバンの中に手を

伸ばす大府。

「骨の有りそうな田舎不良見つけて、しばらく楽しめると思ったのにね」

「シグマ！ マフラーに触らせるな！」

ミケの言葉でやっと体が動くようになり、俺も手を伸ばしたが遅かった。

「ルナティックハート月夜の祭囃子」

突風に吹かれたように俺の体が後ろ向きに吹っ飛ぶ。ミケの呪術を使う間もなく俺は壁際のロッカーに叩きつけられた。そこで初めて腹に蹴りを入れられたのだと気付く。幸い結界が間に合った。

「やつぱり、私たち依巫ってちよつとやさつとじゃダメージ受けないよね。結界のおかげだっけ？」

中段蹴りを出した後の体勢で大府が言った、首に依代のマフラーを巻き、嬉しくてたまらないという表情。

「これなら長ーく、戦えるね」

背筋が凍るような笑顔だった。とても俺と同じ年の少女がする表情とは思えない、残忍で盲信的な笑顔。

俺は痛む背中をさすりながら立ちあがる。

「見てみろい。あれがあだのネーちゃんだの付喪神でい」

祭で着るような青のハッピに白いハチマキ、膝が見える丈の短い大府と並んでこちらを睨んでいた。年齢は人間で言えば十歳ぐらいだろうか。髪はマフラーと同じ水色で女としては短め、両耳の辺りでそれぞれハチマキに刺したススキの穂かたどを象った髪飾りがウサギの耳のようだ。

「へっ。ミケより随分それっぽいじゃねえか」

「冗談かましてる場合じゃねい！ 相手やる気だぞ！」

言うが早い、大府とその付喪神が突撃してきた。大府は跳び蹴

り、付喪神の女の子の方は背中に背負っていた杵きねで殴りつける。

昨晚と同じように左右に分かれて転がりかわす。掃除されたばかりでピカピカのロッカーが音を立ててひしゃげた。

畜生！ わけが分からねえ！ 何でこの女は俺たちを襲うんだよ！？ 何でその癪学校では可愛い顔して俺に絡んできた！？

疑問は尽きないが、それより今はこの状況をなんとかしようと思っただ。

「化猫シユレディンガーの二又道！」

俺は素早く俺自身と机の位置を入れ替え、大府の背後に回って羽交い絞めにする。

「ミケ！ 付喪神の方食い止めてくれ！」

「おうよ！」

丁度付喪神同士は教壇の上で格闘戦をしているところだった。相手の方が体格でははるかに勝るが、ミケは素早い動きでそれを翻弄し、体当たりで不意を突く。

俺もとりあえず大府の動きを封じて……そう思った時、またあの感覚がした。体全体が重く、動かそうと思っても言う事を聞かない。「シグマ君。君の付喪神の呪術は物の位置を入れ替える能力、違う？」

「……読まれてたか」

「昨日から合計三回見てるからね、流石に気付くよ。でも入れ替えられない物もあるみたいだね」

見た目通り、頭の切れる奴だ。俺は諦めず体を動かそうとする。

「例えば、私を遠くの物と入れ替えちゃえば簡単に距離をとれるのに、君はいつも走って逃げるか自分を入れ替えていた。つまり、結界を張っているものは入れ替えられない」

「……ツチ」

凶星である。姐さんとの修行で気付いたのだが結界を張っているもの、つまり戦闘中の依巫、依代、付喪神を物体転移の対象にはできなかった。姐さん曰く「相手を弱らせて結界を緩めれば理論上は

可能」だそうだ。生憎目の前の大府はピンピンしている。

「じゃあ、フェアに戦う為に私の付喪神『ルナティックハート月夜の祭囃子』の能力も教えてあげる」

そう言うとお府は羽交い絞めにされた状態からくると逆上がり
の要領で脚を上げて体を後ろに回転、そのまま俺の顔にダブルキックを食らわしてそこを足場代わりに跳び上がった。

——この女、サーカスか何かにでも入ってるのか？

直撃された鼻を押さえて俺が跳ね起きると、大府の姿が教室から消えていた。あのお祭衣装の付喪神も居ない。

「『ルナティックハート月夜の祭囃子』は重力を操る付喪神」

真上から大府の声が聞こえた。

「私と月夜の祭囃子自身、更に私たちが触れたものにかかる重力を一時的に操作できるの。例えば……」

嫌な予感がおそろおそろ上を見上げる。悪夢のような光景だ。大府とルナティックハートが天井に立っていた。俺の真上、重力を無視して。彼女の髪も、服も、全て垂れさがる事もピンと張る事もなく、宇宙船の内部に居るようにゆらゆらと揺れていた。

「……重力ゼロにすればこんなことも出来るんだよ」

信じられない光景に混乱しながらも、俺の中で溜まっていた疑問に少しずつ答えが見えてきた。

奴を拘束しようとする逆と逆と身動きが取れなくなるのは、大府が触れている俺にかかる重力を増やしていたから。

あり得ないほどのスピードやジャンプ力は自分の重力を弱くしていたから。

攻撃で簡単に吹っ飛ばされるのは当たった瞬間呪術で相手の重力を軽くし、吹き飛びやすくしているから。

女の癖に一撃が重いのは蹴りや殴りを通常の重さで加速し、当たる瞬間だけ重くして威力を水増ししているから。

ここまで来てようやく実感した。通り魔の正体はこの女、大府愛だ。

「何ぼんやりしてるの？」

俺の首元まで腕が伸びてきていた。大府はそのまま天井の自分に近づけるように持ち上げながら、腕で絡めるとるように俺の首を絞め始める。

俺はとうとう抵抗できないまま天井に逆さに立つ大府の胸に抱え込まれるようにして首を絞められる。だんだん息苦しくなってきた……。

「シグマ君はまだ能力を使うのに一々名前を呼ばなきゃいけないみたい。なら首を絞めておけば安心だね」

お互い上下逆さまの状態で大府が笑う。傍から見たらかなりシュールな図だろう。こんなシーン見られたくもないが。

「シグマ！ 今行くぜい！」

「邪魔させないで、ルナ！」

俺は顔を大府に抱え込まれているので見えないが、ミケが突進しようとしたのだろう。それにルナティックハートが止めに入った。

……流石に息が持たない。そろそろ何とかしなけりゃ。

俺は渾身の力でポケットから小銭を一掴み取り出す。

「可愛いね。それを投げつけてひるませるの？」

皮肉と言うよりは、単純に俺の行動を微笑ましく見守るような口調で大府が言う。

うるせえ。一泡吹かせてやる。

俺は大府の顔の辺りを狙って小銭をぶちまける。

「本当、シグマ君って言動が可愛いね。殴り殺したくなっちゃう……え？」

そこまで言って大府の笑顔が凍りついた。今彼女の目の前には大量の画鋏が展開され、彼女の顔めがけて飛んでいるところだったのだ。

ルナティックハート
「月夜の祭囃子！」

無重力を解除するだけでは間に合わないと判断したのだろう。大府は俺を放し、名前を呼んで呪術を発動しなおすと自分への重力を

強めて加速しながら床に着地しかわした。

「あれ？ 名前なしで呪術を使えるのを自慢してなかったか？」

俺は息を荒げているのを隠しながら言う。

「汚いね。無声発動ができるなら最初からそうすれば良いのに」

初めて焦りの表情を大府が見せた。良い気味だ。

「こう見えて田舎での異名は『騙し打ち』でね。最初から手の内見せるのは主義に反するんだよ」

無声発動、つまり付喪神の名を呼ばずに呪術を使うなんて初歩的な事とはつくに姐さんから習っている。ただしこの方法は万能ではなく、不発になりやすい上に多くの禊を注がない為呪術は弱化する傾向にある。だから今大府は確実に避ける為にわざわざ名を呼んだのだ。

俺は小銭を投げると同時に無声発動で教卓にあった画鋏ケースの中身とそれを入れ替えた。そしてこの戦法を思いついたのは昨日の戦いの中でのことである。

昨日、俺が壁に向かって飛ばされた時、俺と入れ替わったゴミバケツが代わりに壁にぶつかった。つまり、化猫シュレディンガーの二又道の能力は位置を入れ替えるだけでなく、直前までそれぞれの物体がしていた運動も引き継がせる事が出来るのだ。

もしも単に位置を入れ替えるだけならば、俺とバケツの位置が入れ替わってもバケツは止まっていたのだからその場で地面に落ち、俺は入れ替わった先の位置からまた吹っ飛びの続きをするはずなのだ。しかしそうはならなかった。「物体にかかる力のベクトルまで入れ替える」地味なようでかなり便利な能力だ。

今回の画鋏はこの応用技。小銭を大府の顔に向かって飛ばし、その瞬間画鋏と入れ替えれば小銭がしていた顔への運動を画鋏が引き継ぎ、針の嵐になるのだ。

「ふーん。面白い能力」

乱れたマフラーを首に巻きなおす大府。顔には若干の苛立ちが見える。

反撃の時は来た。俺は迷わず大府に向かって全力で走る。

「無駄ア！ 殴り合いで私に勝てるのもっ」蹴り返す構えをとる大府。

「化猫の二又道！」
シユレディンガー

俺と入れ替わった教卓が大府に向かって、俺の走りという運動を引き継いだスピードで、俺を蹴ろうとした大府の脚に当たった。

「つく！」

結界があってもこれは流石に応えるだろう。しかし、俺の策はこんな所で終わらない。

俺は教卓と入れ替わった以上、今居るのは教壇の上である。そしてそこは付喪神同士が戦っていた場所。

「いくぞ！」気合いを入れる。

「おう！」ミケもそれに応じた。

バシッ！

ミケの腹部への捨て身の体当たりと俺の背後からの首筋を狙った手刀が同時にルナティックハートを襲った。

「んっ！」

苦痛に顔を歪める付喪神。姿が子供なので若干心が痛むが、今はチャンスだ。

俺は近くにあった椅子を思いっきり窓から放り投げるとミケの呪術を無声発動。俺たち二人の攻撃で一瞬隙ができたルナティックハートと椅子を入れ替えた。彼女はそのまま校庭へ向かって落ちて行く。

——これで2対1だ！

しかし、甘かった。

「ルナに手を出すな！」

今までの笑顔が完全に消えた大府が付喪神の後を追って窓から飛び出し、驚異的な加速をし空中で抱きかかえると校舎の壁に「着地」した。

……。こいつ、やっぱヤバイ。無声発動でここまでの出力なんて……。

俺とミケは一度体勢を立て直す為、廊下へ向かおうとしたが奴が窓際に帰ってくる方が早かった。

「分かった。こんなんじゃない君との戦いは面白くないみたい……」

正直に言うと、俺は振り返るのが怖かった。振り返ると今まで積み上げてきた大切な何かが全て崩れ去ってしまうような恐怖感に襲われたのだ。

しかし、それでも我慢して振り返る。

「今から本気だよ。たっぷり殴り殺してあげる」

外壁を登って教室の窓際に帰って来た彼女は、顔を隠すように長めのマフラーをグルグル巻きにして、無感情に言った。

八つ。 通り魔は涙を流す

今日も俺、源ハジメの帰り道はご機嫌なものだった。

東京に出て来て一週間とちょっと。まさか自分があの日本のあらゆる物事を中心地でハイスクールライフが送れるとは夢にも思っていなかった。

街も、音も、匂いも、女の子も何もかもがあのださびれた田舎町の数倍イカしてやがる。道が細くて入り組んでるのさえ慣れればどう考えても東京の方が良い。十五にして田舎から出てきた俺は間違いなく勝ち組だ。ああ、間違いない。

シグマの奴が桑原に呼ばれちまった為、今日は一人での帰宅である。今日も道すがら三人の女子高生に声をかけた。全部無視されたが満足だ。俺の魅力が東京で浸透するのにはまだ時間がかかるのだろう。

俺は肩で風を切って商店街を通り抜けて行く。ブレザーだといまいち様にならないが、不良としての威厳は十分だろう。

何故不良らしく見せるのか？ ——それが俺の中の格好良さだからだ！

一件強面こわもての金髪不良でも、話してみれば意外と気さく。このギャップは受けるに違いない！

——と、こんな風に考えるのが俺がバカと言われる所以ゆえんなのだろうか？ まあいい、バカだった俺とは中学でおさらばだ。これから華々しい高校生活を——ん？

そう考えてブレスレットを巻いた腕を上げ、大きく伸びをした時おかしな物が遠くのビルの上に見えた。

……シグマ？

一瞬、数百メートル先のビルの屋上にシグマが居たのが見えた。ひどく焦った様子でそのまま屋上を数歩走ると、シグマの居た場所

に雨水を溜めるドラム缶が代わりに出現して姿が見えなくなった。
ミケの呪術を使っているのだろうか？　こんな街中で何故？

理由はすぐに分かった。

どこからか物凄い勢いで大小二つの影が先ほどまでシグマが居た屋上に着地し、またそのまま風のような早さで次のビルへ。そうしてビルとビルの間を渡りながらどこかを目指して高速で消えて行った。

今のは人間……なのか？　だとすると、シグマは今の奴らに追われてる……？

ええい！　バカの俺が考えたって分かるわきゃないんだ！

手に提げていた学校カバンをリュックサックの要領で背中に担ぎ、二つの影が向かった方向へ俺は走り出した。多少トラブっても夕飯までには帰れるだろう。

「いつまでこの鬼ごっこ続けるの？」

木箱と位置が入れ替わった先で大府が正面に立っていた。マフラ―で隠された顔の向こうはきつと笑っているに違いない。

――クソ。入れ替わり先を読まれていたか。

ここは住宅地を少し外れた空き地にある建設現場の前。元々は建物をいくつも作って大型の団地にする予定だったのを、周辺住人の反発で建設が中止になっている場所だ。見えるのは雑草の生えた砂利の地面と三つ骨組みと一部の壁が出来上がっているアパート。外壁はコンクリート打ちっばなしなので灰色で味気なく、作業が終わって無い部分から所々これまた灰色の室内と中にあるセメント粉の袋や鉄パイプが見える。

本気を出した大府と教室でこのまま戦えばいろいろマズい。人が来るかもしれないし、教室をこれ以上壊したら面倒だ。そう思って俺はミケの能力を連続して使いながらこの空地まで逃げて来たのだ。しかし全力の大府のスピードと跳躍力は驚異的だった。現に瞬間

移動に近い機動力を持つこの化猫の二又道で移動する俺とミケをここまで見失わずに追って来たのだ。信じられない。

「そうか。鬼ごっこは嫌いだよ」

「嫌いじゃないよ。ただ殴り合いとか蹴り合いの方が好きなだけ」
うふつ。ハートマークが付きそうな声で大府が笑った。

……未だに分からねえ。何で普段はお節介なただの委員長キャラにしか見えないこいつが通り魔の正体なんだ？ それにさっきから殴りたいとかそんな事をとびっきり嬉しそうに言い続ける。俺はRPGに出てくるバーサーカーを思い出していた。

マフラーで包まれて大府の顔はまったく見えない。表情が把握できなくなるだけで、人間とはここまで不気味に感じるものなのか。いや、むしろ顔が見えている方が不気味だったかもしれない。あの愛嬌のある顔でニタニタ笑いながら狂喜に身を任せて襲ってくるのだ。この先ポニーテールの女を見る度に俺はこのトラウマに襲われるかもしれない。

ならここで、決着を付けてしまおう。

「行くぞ！ ミケ」

「言われなくても分かってらあ！」足元でミケが前かがみに構える。

「もっと戦ってくれて。嬉しいね、ルナ」

顔を隠した大府と並んで立っていたルナティックハートに彼女が話しかける。

「……アイが嬉しいなら、アタシも嬉しい」

ルナティックハート、大府の呼び方を真似ればルナが初めて言葉を発した。しかしその言葉はどこか無機質な響きで、何か大府に言いたげな様子だった。

そして――俺たちは同時に付喪神の名を呼んだ。

シュレディンガー

「化猫の二又道！」

ルナティックハート

「月夜の祭囃子！」

俺たちはビル屋上の建設資材と入れ替わり、大量の鉄板が角に平積みされた屋上に出た。が、すぐに呪術によって重力を無視した大

府とルナが外壁を駆け昇って来た。やっぱりスピードが教室の時の比じゃない。

俺も出来るだけ敵の動きについて行く為に俺とミケの結界に使う楔を増やす。これで身体能力を水増しできるはずだ。

「うおおおらあ！」

甲高い声で大府が叫び、薙ぎ払うように出された右パンチ。俺は体を仰向けにし、相手の足もとに滑り込むようにしてかわしつつ足払い。少しでもタイミングが遅かったら危なかった。

おそらく、ルナの呪術で触ったものの重力を操作する為には「触る」という使用者の意思が必要なはずだ。これまで二回俺は大府の動きを封じようとしたが、そのどちらも拘束した瞬間には体が重くならなかった。

つまり、こちらから相手に触る時は重力操作されるまでにタイムラグが生まれるから、一瞬だけなら触れても平気なはずである。

案の定俺は足払いで大府に触れたが何も起きず、大府は大きく体のバランスを崩す。

「もらった！」

俺は仰向けの体勢から体を横に転がすようにして起き上がりつつ、バランスを崩した大府の背中に蹴りを入れようとした時――

「こっちの台詞だよ」

真上からルナの声が聞こえた。

――やべっ！ 罠か！

大府が正面から突っ込んできたのは俺の注意を惹きつけ、その間に付喪神の方を背後に回らせる為だ！

「化猫の二又道！
シユレディンガー」

俺は蹴りを諦めると素早くミケの呪術を発動、さっき外から確認しておいた一フロア下にあるセメント粉の袋と入れ替わる。

「うわあ！」

屋内にワープした俺とミケの耳に屋上から二人分の、悲鳴に近い驚愕の声が聞こえてきた。

俺を狙ったルナの攻撃を受けたのはさっきまでここにあったセメント粉の袋。彼女の杵で叩けば袋は破け、煙幕のように辺りを粉が覆うだろう。今からが本当の攻撃チャンスだ。

「ミケ、そのブルーシートだ」

「……合点でい！　しかしお前もよくこんな事思いつくな」

部屋の隅の資材にかけられていたブルーシートの端をくわえつつミケが言う。

「大好きなんだよ。こういう嫌がらせみたいな事がな」

俺もシートのミケと反対側を持ち、二人で息を合わせつつ急いで階段を上って屋上へ戻る。そしてそのまま屋上の出入り口の屋根にブルーシートを持ったまま上る。ここは屋上でも一番高い場所、まさに天辺の天辺である。

屋上はまだセメント粉の煙幕に包まれたままで、大府とルナのシルエットはぼやけて何処に居るのかろうじて分かる程度だ。

しかしそれはまた逆も然り。事実二人は俺たちを完全に見失っている様子だ。

「ルナ、相手はどこに？」

「この煙幕で何も見えないわ。360度どこから襲ってくるかわからない」

360度ねえ……それはちょっと甘いな、付喪神のお嬢ちゃん。出入口の上から屋上の敵二人が居る方に走り出しながら俺は叫んだ。

「今だ！」

「おうよ！」ミケが応じる。

それぞれ大きなブルーシートの端を持って屋上の上に飛び出した俺たち。ブルーシートは大きく広がりながら屋上全体を覆うように風に舞い、広がる。

大府とルナは俺たちの声にどこから来るかと身構えているが、気を配っているのは自分達と同じ高さだけ。頭上に居る俺とミケ、ブルーシートにはまったく気付いていない。

それもそのはず、この一撃の為の煙幕である。

「ド派手な一撃、食らえ！ 化猫の二叉道！」
シユレディンガー

屋上全体を覆うように広がったブルーシートは、隅に平積みされていた大量の鉄板と入れ替わった。一枚の大きなシートが何重にも分割される要領で真っ直ぐ並べた鉄板に変化し、大府とルナの頭上を覆ったそれは一瞬空中に留まると重力を受けて真っ直ぐ屋上一面に落ちた。

まだ試した事は無かったが、予想通りミケの能力なら合計の大きさをほぼ同じにすれば単数対複数の入れ替えも可能なのだ。俺はますますこの能力のトリッキーさが気に入って来た。

鉄板たちからワテンポ遅れて屋上に着地した俺とミケはすぐさま鉄板の下敷きになったであろう二人を探す。今の内に依代を取り上げれば俺たちの勝ちだ。

しかし、

「おかしいぜい、シグマ。ネーちゃんもガキンちよも見当たらない」
ミケの言う通り煙幕が晴れても床一面に散らばった鉄板しか見えない。一体どこへ……

……ヒューン

耳を澄ました時、どこからか風を切って何かが落ちてくる音がして……いきなり肩に爆発するような痛みが走った。

「シグマ！」

ミケの呼び声が聞こえたが俺は何が起こったのかも分からぬまま屋上の分厚い床を突き破って一つ下のフロアを通過、更にその床も体ごと碎いて屋上から二つ下の階に落ちて止まった。

舞い上がる埃の中で、俺の背中を踏みつけるように立っていたのは頭をマフラーで隠した制服の女、大府だった。その肩には小柄なルナがしがみついている。

ようやく俺は理解した。俺が鉄板を落としたことに大府はそれに気付き、ルナの呪術を全開にして跳躍、二人で空中に展開された鉄板の群れの間を縫って遥か上空まで跳び上がったのだ。重力ゼロに

加えて結界で体力を強化すれば無理な事ではない。

そしてそのまま上空で俺たちの攻撃をやり過ぐすと今度は自分達へかかる重力を増やし、さながら流星のごとく猛スピードの威力を活かして屋上の俺めがけてキックを叩きこんだのだ。道理でコンクリートの床二枚ぐらい突き破るはずだ。

「どう？ シグマ君。参った？」

くそっ！ 悔しいが体が痛みでもう動かねえ。結界無かったら確実に死んでるレベルじゃねえか。骨を何本かやられたかもしれないな。

「やっぱりさ。こうやってお互い醜いくらい全力で戦うのって楽しいよね！ ねっ！ ねっ！」

俺の俺を踏みつけるのを止め、顔の方へ回って俺の顔を覗き込む大府。顔が近づいてようやくマフラーの向こうの潤んだ目が微かに見えた。

――涙？

「お前……何で泣いてるんだよ？」

無意識のうちに声に出していた。

それぐらい率直に疑問に思ったのだ。快活な女が通り魔の正体だった事よりも、なんでこいつがこんなに戦いを求めるのかよりも、俺の中でずっとこっちの方が引かなかった。

一瞬キョトンとする大府。しかしすぐに

「え？ 何の事？ 泣いてないよ。だって私今戦うのが最高に楽しくて……」

ポタッ。かがみこんだ大府のマフラーの隙間から雫^{しずく}がこぼれ落ちた。その雫は床に落ちるとそこを黒く染める。

俺は痛む体を無理やり立たせ、大府のマフラーに手をかける。

「何すんの！？ まだ立てるならもっと戦おうよ！」

俺は大府の言葉を見殺してマフラーを一気に引っ張った。大府は抵抗して俺から体を遠ざけようとしたが、緩んだマフラーは顔からずれてずっと隠していた彼女の顔を明らかにした。

彼女は目から涙をポロポロこぼして泣いていた。楽しそうな表情を作りながらも彼女の目は涙を流し続けていた。嬉し泣きとかそういうもんじゃない。苦しくて仕方ないのに無理やり楽しいと思いいこうとしているような、そんな表情だった。

昨日の夜を思い出す。戦っている時に俺の頬に当たる水滴があった。

——もしかしてこの女、顔を隠してる間ずっと泣きながら戦ってたのか？

「……何で泣いてるんだよ？」

もう一度俺は訊いた。

さっきまでお互いに全力で戦っていたもの同士とは思えない、不思議な空気がカビ臭い部屋に漂っていた。弱々しい光を目にたたえて涙を流す目の前の女は、俺の中でだんだんと通り魔からもつと儂はかない存在に変わって行く。

「泣いて……なんかない……泣いてなんか……」

頭を垂れて床に涙を落とす大府。その周りに再び結界が展開されるのを俺は感じた。

「泣いてなんかないんだあ！」

次の瞬間には俺の鼻先に大府の拳があった。顔を思いっきり殴られて俺は回転しながら数メートル吹っ飛ぶ。

「泣いてなんかない！　泣いてなんかない！　私は嬉しいの！　戦えるのが嬉しいの！」

一言ごとに俺に殴りかかりながら叫ぶ大府。マフラーが取れて見えるようになった顔には涙に加えて狂気の色が浮かんでいる。

「泣いてたとしても嬉し泣きよ！　私はもっと戦いたいのに！　殴りたいの！　蹴りたいのっ！」

鋭く出された上段の回し蹴りを俺は左手を使って受け止めた。大府の服装は制服のスカートなので状況が状況ならかなり美味しいシンなのだが、生憎今の俺にはそんな余裕は無い。

追い詰められているのは俺なのに、何故か相手の方が苦しそうだ

った。苦しきから逃れるために今の戦いが楽しいと思ひ込んで、でも納得しきれない心の部分で涙を流して。――俺にはそんな風に見える。

「……戦いたい」

大府の目からまた涙が一粒こぼれ落ちた。

九つ。 通り魔は恋に落ちる

——むかしむかし、ある所にとっても仲の良い姉妹が居ました。

姉は体を動かすのが好きで元気の良い女の子。小さい頃から運動が大の得意で、小学校の頃から野球、サッカー、バスケ、テニス、いろんなスポーツを男子に混じってやりました。そしてそのどれも誰よりも上手に出来ました。

妹は少し引っ込み思案でおとなしい女の子。姉のように運動は出来ませんでした。その分本をたくさん読んで物知りでした。小学校に入るとテストはいつも満点で、中学受験をする為に塾に通うようになってからもテストでは必ず満点なので全国模試でもいつも一位でした。

二人の両親はとても幸せでした。スポーツ万能の姉と全国一位の学力の妹、まさに絵に描いた様な天才姉妹です。自分の子供が優れている事は何より両親を幸せにしました。

——しかし、

ある日の事です。姉がいつも通り放課後学校で友達とサッカーをしてから帰ってくると、妹がリビングのソファで横になってぐったりしていました。妹の顔は赤く、呼吸は苦しそうです。寒気を感じるのか首には水色のマフラーを巻いています。

「どうしたの？ 大丈夫？」

姉は急いで妹に駆け寄ると、心配そうに顔をのぞき込みました。

「うん……風邪引いたみたい。お姉ちゃん、お薬ある？」

苦しそうな声で妹が答えました。

姉は泥だらけの手を洗うのも忘れて薬棚を探しました。両親の部屋も父親の書斎も、キッチンも全部全部探しました。でも、風邪薬は見当たりません。

「待ってて。今すぐお薬買ってくるから」

姉はリビングの収納に入っている「いざという時に使いなさい」と親に言われた財布を取り出して、薬局まで自分で買いに行く事にしました。

妹は熱の苦痛に耐えながら

「うん。お姉ちゃんのこと待ってる」

そう言って姉を送り出しました。

姉は走りました。

走るのは大得意で男子も含めたクラス全体で誰より脚が速かったけれど、この時ばかりは姉は自分のスピードが遅く感じられて仕方ありませんでした。どんなに速く足を動かしても、自分がカタツムリとか亀みたいな速度で走っているようにしか思えませんでした。

姉は薬局に駆けこんでいつも家に置いてある風邪薬と同じのを買いました。そしてそのまま家へまっしぐらに帰ります。走って走って帰ります。

やっこの思いで、息を切らせながら家の前まで戻ってくると一台の救急車が停まっていました。続いて開けっぱなしになった玄関のドアから担架を支えた二人の救急隊員が出てきます。

「^{るな}溜奈！」

姉は驚いて妹の名前を叫びました。なんと、その担架で運ばれていたのは妹の溜奈だったのです。

救急車に運び込まれる溜奈。駆けようとする誰かに襟首を掴まれました。振り向くと暗い顔をした姉妹の母親でした。

「どこへ行っていたの？」

静かな母親の口調の裏には何か恐ろしい感情が込められているように姉は感じました。見た事もないような母親の表情に姉は怯え、返事をする事が出来ません。

「40℃の熱を出して苦しんでいる妹を置いてどこへ行っていたの？」

姉は泣きだしました。

違うの。私はお薬を買いに行ってたの。瑠奈の具合がそんなに悪いなんて知らなかったし、熱がそんなに高いのも知らなかったの。私は瑠奈を助けようと一生懸命走ったの。

けれどその説明は全て涙や鳴咽でぐちゃぐちゃになって、母親には通じませんでした。何度も何度も言ったけど通じませんでした。

母親は怒りを押し殺した声で姉に留守番を命じると、付き添って救急車に乗って去って行きました。

とうとうその夜、姉妹の両親は家に帰ってきませんでした。

姉は一人、広い家の中で夜を明かしました。眠る事も出来ず、お腹が減る事もなく、ただただ妹が寝ていたリビングのソファの上で横になって動かずに過ごしていました。

瑠奈が巻いていたマフラーを自分でも巻いてみます。瑠奈の温もりが残っているような気がしました。

太陽が昇り朝になると、とても疲れた顔をして両親と一緒に帰ってきました。母親は昨日の暗い表情のまま、直接病院に行っていたのであろう父親は今にも泣きそうな顔です。

家族が帰って来た事に姉が顔を輝かせて玄関へ迎えに出ると、おかしい事に気が付きました。

——妹の瑠奈が一緒でないのです。

「あれ？ 瑠奈は？」

姉は無邪気な声で訊きました。

その問いに両親は二人同時に何かおぞましい怪物でも見るような目で姉を見下ろしました。普段はあまり実感する事の無い大人と子供の身長之差で姉は抗う事の出来ない威圧感を感じます。

何も言わずに父親は階段を上って書斎へ、母親は寝室へ行ってしまう。ドアの前に立って耳を澄ましてみると低い泣き声が聞こえてきます。

そうか、二人とも瑠奈が入院しちゃって寂しいんだな。姉はそう

思いました。

瑠奈はちよつと酷い風邪を引いただけで、何日か入院したら元氣になって帰って来るんだろう。そうしたら私が頑張って買ってきたお菓を飲ませてあげるんだ。

寢室のドアを軽くノックすると少しだけ隙間が空きました。漏れてくる嗚咽から母親がドアの前に立っているのが分かります。

「これ……瑠奈の為に買ってきたお菓」

ドアの隙間から姉は菓屋さんのビニール袋を差しこみました。向こうで母親が受け取ったようです。

「瑠奈が……元氣になったら……」

ピシャッ！

何かが部屋のドアに内側から叩きつけられたようです。驚いて姉が隙間から中をのぞくと、姉が買ってきた風邪菓のカプセルがコロコロと部屋のフローリングに転がっていました。母親が菓を投げつけたようです。

姉は急に怖くなってリビングまで戻って、またソファの上でマフラーを首に巻いて横になりました。このままじっとしていれば時間が巻き戻って全部無かった事になるような気がします。

次の日から遠くからたくさんの親戚が家に来るようになりました。けれど不思議な事にみんな真っ黒な服を着ています。お花がいっぱい飾られて、椅子がたくさん並んだ所にも行きました。ただ座っているだけで退屈だったので、姉はお花の山の真ん中に置かれた妹の写真をずっと眺めていました。

そして――何日待っても、何週間待っても、妹の瑠奈は帰ってきませんでした。

やがて姉は近くの公立中学校に入学しました。

部活は陸上部を選びました。小学校では全校で誰よりも脚が速かったからです。

けれども、部活が始まって100メートルのタイムを取ると姉は愕然としました。新入生の女子の中で自分が一番遅かったのです。男子と比べた場合は言うまでもありません。

こんなはずない、だって私はとっても脚が速かったもん。きっと何かの間違いだ。

毎回毎回部活ではタイムを取りましたが姉はビリのままです。焦りだけがつのって行きます。

その内姉は自分が部活のみんなから悪口を言われているような気がするようになりました。「あんな脚が遅いくせに小学校で一番だった?」「て言うか小学校で一番だったからなんなの?」実際に聞いたわけでもないのにそんな気がしてきました。

——姉は部活を辞めました。辞めて塾に通う事にしました。

姉は一生懸命勉強しました。元々才能はあったようで、通い出して数カ月で塾の全国模試で成績上位者として表彰されるまでになりました。

けれどもどんなに頑張っても全国一位にはなれません。瑠奈はあんなに簡単に一位を取っていたのに、姉はどんなに頑張ってもそこまで届きません。

一位にならなきゃ。瑠奈が居なくなっちゃったんだから、私は走っても一位になれないんだから、勉強で一位にならなきゃ。

模試の結果を見せる度に母親はがっかりしたような顔をします。

ああ、瑠奈は一位だったのにこの子は無理なんだ。この子は自分の特技でも人に勝てないで、瑠奈の代わりにもならないんだ。——そう母親の顔には書いてありました。

姉はもう何がなんだか分からなくなりました。そして段々と成績も下がって行き、中学を卒業する頃には並み以下になってしまったので地元のあまり有名でない私立高校に入学することになりました。

春休み、姉は一人でずっと部屋に閉じこもっていました。

昔は瑠奈と一緒に使っていた部屋。忘れるには瑠奈の残していっ

た思い出が多すぎます。

ぼんやりと、昔の楽しかった日々を思い出していると突然奇妙な気配を姉は感じました。まるで真昼間に一か所だけ夜になってしまったような涼やかな気配がクロゼットの中からしたのです。

気配の元を探すとそれはあのマフラーでした。マフラーの周りを夜の闇を凝縮したような紺色の光が覆っています。

「名前を呼んで」

後ろで声がしました。振り返ると、なんとそこに立っていたのは居なくなっただけの溜奈です。

髪の色は水色だしハチマキにハッピ、ススキの穂の髪飾りとおかしな格好をしています。が間違いない溜奈です。昔と同じように控えめにはにかんで姉を見えています。

「溜……奈……？」

姉は何が起こったのか理解できません。もう帰ってこないはずの溜奈が目の前に居るのです。

水色の髪の溜奈は首を横に振ると、

「違うよ。私は溜奈じゃない。その依代から感じて」

小さな手で姉が持ったマフラーを指差しました。

姉は言われるまま、感じたまま思いついた一言を唱えます。

「月夜の祭囃子！」
ルナティックハート

「離せよ！」

大府が思いっきり力を込めて俺の手を振り払った。そしてそのまま自由になった両足で次々と蹴りを繰り返して来る。

「シグマ君、君に分かるの？ 運動でも一番になれなくて、勉強でも一番になれなかった私の気持ち！ 妹死なせちゃってその代わりも務まらない私の気持ち！」

メシヤリ。

鈍い音がして強烈な回し蹴りが俺の腹を襲った。さっきの上空からの攻撃のダメージをひきずった俺の体では素早い攻撃をかわし続けることはできない。

「でも、私は変わったんだ。ルナと一緒になら私より強い人間なんて居ない！ 私とルナで完璧な一番なの！」

壁にめり込むほど叩きつけられた俺に追いうちの右ストレートを食らわせながら大府が叫ぶ。相変わらず涙は流したままだ。

まだ満足しないのか大府そのままフォームも加減も滅茶苦茶に俺を殴り続ける。

「戦うって楽しいでしょ？ みんな命かけて戦う時は見栄も建前も全部投げ捨てちゃってさ、そんな風にお互いの本性が剥がれて行く感覚が最高に楽しい！ そうやって本気でぶつかって相手に勝つのが最高に楽しいの、そうでしょ？」

ラッシュのトドメにまた回し蹴りを腹にされて、俺は壁にそって横にぶっ飛び建設途中のコンクリの柱にぶつかってヒビを入れた。

もう体はぼろぼろだ。結界のおかげでかろうじて生きているが、もう指一本動かせる気がしない。喉に何かつかえる感覚があったので吐き出してみると血反吐ちへどの塊かたまりだった。

俺は不思議だった。こんなに殴られても俺は目の前の大府が哀れに思えて仕方なかったのだ。俺は本来人の不幸が大好きな人間で、こういう相手を騙し打ちで負かすのが生きがいだったはずなのだ。知らず知らずのうちに俺はまだ会って二日目のこの女に何か思い入れをしていたのだろうか？ 何が原因か分からないが俺はとにかくこの女を助けてやりたい。それだけが今頭にある。

「もう、充分だろ」

「何が？」

「もう充分殴っただろ。俺の他にも何人も襲ったんだろ。まだ満足しないのか？」

「うん。だって私はまだまだ戦いたいもん」無邪気な笑顔を見せる

大府。また涙が床に落ちる。

「じゃあ一つ訊いて良いか？」

「うん。じゃあ答えたらもう一発殴らせて」

「お前は戦いたいのか？ それとも勝ちたいのか？」

「そんなの決まってるじゃん。私は……」

大府はそこまで言っただけで口をつぐんだ。

「お前、さっきから言い分聞いてりゃ戦いを楽しんでるようには思えねえ。単純に自分が人に勝てないジレンマを喧嘩で発散してるようにしか見えないんだよ」

「……」

「お前、付喪神っていう圧倒的な力を使って普通の人間いじめてるだけじゃねえか。プロレス選手が小学生殴ってキャンディ取り上げてるみたいだ」

「……違う」

「いいや違わない。お前は自分が勝てるに決まってるから戦うんだ。相手殴り倒して一方的な満足感に浸りたいだけだ！」

「うるさいっ！」

大府が一回床を蹴っただけで長い距離を一瞬で詰め、柱に寄りかかっていた俺の頭を掴んだ。

途端に重くなる全身。通常の何倍もの重力を受けて俺の体はミシミシとコンクリートに押し付けられる。

「依代、もらい」

子供じみた口調で俺のポケットからウノの箱を取り出すと、大府は部屋の隅にそれを投げ捨てる。

「これでもう呪術は使えないね。このまま自分の重さで潰れてもらっちゃおうかな？」

うふっ。いつの間にか大府は泣きやんでいて、良い笑顔でエグイ事を口にしながらか俺の顔を覗き込んだ。何か言い返してやろうとしたが顎が重力で開かない。依代も奪われたので無声発動も不可能だ。「そうだよ、私は勝ちたいの。昔の何もかもうまく行ってた頃が忘

れられなくて、今でも一番に執着してるの。悪い？」

……っく。開き直りやがって。

「だって世の中勝った方が正義でしょ。どんな事でも負けたらそこで終わりだよ。でも、私はこれからもルナの力で勝ち続ける」

段々とかかる重力が強くなってきた。今にも骨が自らの重さで碎けて神経が切れそうだ。

「勝てるから戦いが好き。それで正しいでしょ……あれ？」

その時だった。突然俺を押さえつけていた重力が途切れた。

——……やっと、か。

「……どうして？」

「お前、禊が無限にあるものだとも思ってたのか？」

茫然とする大府の目の前で俺はゆっくり立ち上がった。自分の策が成功したとなると俄然^{がぜん}力が沸いてくる。

「どうも調べた限りお前の付喪神の呪術は燃費が悪い」

小さい頃の修行のおかげで人の禊の量は長く触れば大体分かる。

俺が無駄と分かりながらコンビ二前に続けて教室でも大府を押さえつけたのはこいつの能力使用時間に対して消費した禊の量を調べる為だ。

「俺の計算が正しければ後数十分お前が呪術を使いまくれば禊が底をつくはずだった。計算より十五秒程遅かったが問題無いな」

信じられないという面持ちの大府。しかし証拠にさっきから黙って成り行きを見ていたルナの姿が霞んで透明になってきている。

渾身の力で振り上げた左手で俺は大府の頬をひっ叩いた。

ピシャリ！

「これで平等だ！」

ふらふらと後ずさりする大府。呪術が使えなけりゃこいつもただの女子高生だ、何も恐れる事は……

そう思った瞬間だった、俺は忘れていたのだ。このビルが建設中であちこちボロボロだと言う事を。

ミシッ。

後ずさりした大府が寄りかかった壁が嫌な音を立てた。よく見ればそれは俺が叩きつけられた壁。その時に痛んだのだろう、壁はいきなり砕けて、日の光が注ぐ外の景色を露わにした。

「あっ」

大府は恐怖とかそういう感情よりも、ただ単純に驚いたようだった。そして口を小さく開いたまま穴のあいた外壁から外に落ちて……
「危ない！」

ギリギリの所で間に合った。俺は体を穴から乗り出しながら落ちていく大府の手を掴む。

なんとか大府の体重を支える事はできたが、引き上げるだけの体力は残っていない。

——クソッ！ 大府に禰を使い寄せたのが失敗だった。

俺の依代も大府によってどこかへ捨てられてしまった為、化猫のインガー二叉道で瞬間移動もできない。

「良いよ。離して」

虚ろな目でこちらを見上げながら大府が言った。

「負けたから死ぬだけでもん。私みたいな弱い奴は死なせて良いよ」

「……調子に乗るな」

「……この状況で言う台詞じゃないよね」寂しげに笑う大府。

「調子に乗るな！ 俺が助きたいから助けんだ！ 助けてもらう分際で調子乗ってんじゃねえ！」

「……」

「お前みたいな歪んだ考えの持ち主と一緒にするな！ 手は殴るだけじゃなくて支える事も出来るんだ。脚は蹴るだけじゃなくて踏ん張る事も出来るんだ」

「……」

「俺はお前の為に支えて、踏ん張ってるんだろうが！ だから調子に乗るなあ！」

思いつくままに怒鳴り散らした。なんでこんな俺を半殺しにした奴を助けたのか自分でも分からないまま俺は力の限り大府の細い

腕を掴み続けた。

大府は何か考える風に黙って俺の言う事を聞いていたが、その目は段々と虚ろから明るい色を宿し始めた気がした。

――が、

ズルッ

踏ん張っていた脚が突然床の埃で滑った。大府の体重に引っ張られるようにして一緒に落ちていく俺たち。みるみる内に砂利の地面が迫って来る。

ああ、こんな事前にもあったな。確かあの時はあの使えないバカが一緒で……

今度は女子と一緒にだからまだましか、なんて呑気な事を考えた時、
「化猫の二又道^{シユレディンガー}！」

俺と大府は一瞬で元居たビルの埃っぽいフロアに戻っていた。位置的に俺が叩きつけられた柱の残骸があった辺りだ。

「まったく、心配かけやがって」

わけが分からず、床に突っ伏した俺の鼻先にミケが着地した。隣の足だけ見える誰かの肩から飛び降りたようだ。

「こいつがおいらの依代拾うのがもうちょっと遅かったら、お前らカップルでお陀仏だったぜい」

ミケが隣の人物を仰ぎ見る。俺もつられて視線を上げると……

「ハジメ！」

「よお。どうだ？ 俺様の華麗な呪術は」

金髪に整っている顔。ハジメだった。

「追いかけてっこそするお前らを見て気になったから後を追ってきたらこのさまだ。これで貸し一つな」

「お前……俺はお前に百を越える貸しがあるはずだ」

「なら今回のそれは全部チャラだ」

得意気に肩の横で両手を広げるハジメ。金髪なので外国人がやってるように見えなくもない。

しかしこのバカ、いつの間にか付喪神に禊を注いで術をコントロ

ールするまでに成長していたのか。姐さんの指導もなかなかのものだ。

ハジメが埃まみれになったミケの依代を俺に渡す。受け取ってポケットにしまうと大府に袖を引っ張られた。

「ねえ、シグマ」

何故か「君」が外れている。

「何だ？ 大府」

「名字じゃなくてアイって読んでよ、もう」

「……は？」

この女、頭でも打ったのか？ 何さっきまで殺そうとしていた相手に馴れ馴れしくしている？

「助けてくれてありがとう。これから愛し合おうね！」

「待て待て待て！ 成り行きが理解できん。てか今すぐく不吉な振り仮名振っただろお前！」

「え？ だってさっき告白してくれたじゃん」

「何を？」

「殺意を。『お前の為に俺は踏ん張ってる』って」

嘘だろ。これは世間一般に言う告白では確実に無いはずだ。

この展開は無茶があり過ぎる。この女、やはり感覚が根本的な所からズレている気が……

「私もね。戦いながら段々シグマの事が好きになっちゃった」

「……それはどうも」もうどうにでもなれ。

「命がけで助けてくれて嬉しかった。それでシグマも私の事が好きなんだと思ったの」

……そう言う事か。

「ねえシグマ、私の恋人サンドバックになっってくれる？」

「知るか！ そもそもお前は俺のどこに惚れたんだよ？」

「うめき声とか、殴り心地とか」

「それ惚れるポイントじゃねえ！」

「あと私助けてくれたところとか」

……そこを褒められるのは悪い気がしねえ。まあ、週一くらいならサンドバッグになってやっても良いか。

あまりの強引さに俺は驚きを隠せなかったが、同時に向こうからここまで迫られると俺が大夫を助けたかった気持ちの原因も案外同じ想いのような気がした。しつこくまとわりついてくる内に俺は彼女に惚れていたのかも知れん。そして彼女が俺との戦いの中で晒した弱さに心を掴まれたのかもしれん。

こうして、高校二日目の俺に少々強引で暴力的な恋人が出来た。人生初の、殺意から生まれた両想いである。……意外と悪くない。

九つ。 通り魔は恋に落ちる（後書き）

これで取りあえず主人公三人が出揃いました。

今後は本格的にバトル展開の予定です。

感想・指摘などいくらでもお待ちしております。

これからも「大江戸でいばあていっど」をどうぞよろしく願います。

十つ。 強くなりたい

「……姐さん、ちょっと話があるんだけど」

「何？ 畏まって」

全身ボロボロで帰宅した俺は姐さんの部屋の障子を細く開けながら話しかけた。

「あのさ、通り魔に襲われて、戦って、殺されかけて、助けて、落ちかけたならなんか彼女が出来ました」

「……はあ？」

冗談とかそういう話ではなく、本当にこんな感じのやり取りだった。

決着がつくと俺は何だか全身の力が抜けてしまってその場に崩れ落ちた。初めての呪術が上手く行ってご機嫌のハジメに肩を貸してもらい、俺とアイの決闘の舞台となった建設途中のマンションを後にする。

屋敷に帰るまでの間、大府改めアイはずっと俺の怪我を心配して「大丈夫？」を繰り返していた。よっぽどお前がやったんだと言ってやりたかったが、口を開くのも億劫おっくうだったのでやめておいた。

それにしても何でこの女はいきなり態度が180度転換したのだろうか？ さっぱり分からん。さっきまで明確な殺意を俺に抱いていた癖に、今では学校での馴れ馴れしさを三倍にしたような感じがだ。段々鬱陶しくなってくる。

アイは心配するのに飽きたら今度は俺の事を訊いた後、自分の過去の事を話した。暗い話を本人が明るく話すせいでなんともリアクションが取りにくい。

それでもどうにか屋敷に戻ると玄関で夕食の買い物から帰って来た小雪さんとはったり遭遇した。

「まあ！ シグマさんどうしたんですか？」

俺は事情を説明する暇すら与えられず家へ引っぱり込まれて小雪さんの治療を受けた。あんだけいろいろやられたのに打撲やら脱臼やらだけで済んだのは奇跡である。

「何があったか知りませんが、無茶はしないでくださいよ。大切な安蒜家の後継ぎなんですから」

「いや、次の当主は姐さんの方だと思いますけど」

「何を仰っているんですか。シグマさんだって十分素質はあるはずです」

別に当主なんてなりたくもないけどな……。

小雪さんに礼を言って、アイとハジメと三人で姐さんに会いに行く。俺の実家の事を話したらアイが姐さんにぜひ会いたいと言うので屋敷まで連れてきたが、一体どういうつもりなのだろうか？ 激しく嫌な予感がする。

そして嫌な予感の的中し、冒頭のやり取りの後俺が事情を説明し終わると、いきなりアイが姐さんに向かって両手を畳について頭を下げた。

「お願いします！ 私を安蒜家で雇って下さい！」

……は？ 一瞬言ってる意味がよく分からなかった。

ポカンとする俺とハジメを置いてけぼりに、アイは頭を下げたま続けた。

「私もっと依巫として強くなりたい。強くなって今度は誰かを助ける為にルナの力を使いたいです！」

……嘘だろ？ さっきまでの発言とは真逆じゃねえか。

姐さんは突然の申し入れにも特に動じる様子はなく、あっさり受け入れた。

「いいわよ。じゃあ私の作る新しい本家の依巫として雇ってあげる」「やったあ！」

「ただし、タダ働きよ」きっちり釘を刺しておくケチの姐さん。

「構いません、お義姉さん！ シグマと一緒にならなんでも」

気のせいだよな。今「おねえさん」の発音から不吉なオーラを感

じたのだが。

しかし、満面の笑みで喜ぶアイを見てると取りあえずこの本家で修業させるぐらいなら良いかな、と思えた。こいつの依巫としての技術は全て独学のようなだし、姐さんの指導を受ければもっと強くなるかもしれない。

こうして姐さんの本家乗っ取り計画は新たな戦力を得て着々と進んでいくのだった。

その夜、俺が痛む傷を我慢しながら居間で小雪さんとハジメとテレビを見ていると、姐さんがやって来て中庭の縁側に呼ばれた。

この中庭は昔の俺の記憶では雑草が生え放題で、両親や家の人も「修行に差し支えなければどうでもいい」と言っていた程だった。しかし今ではかなり綺麗に整頓され、池の水は澄み歴史を感じさせる石灯籠が幽玄な雰囲気を漂わせている。おそらく小雪さんが手入れしたのだろう。

「随分可愛い子捕まえたじゃない、この色男め」

このこの！ と肘で小突いてくる姐さん。鬱陶しいのだが、この程度で顔を赤くしてしまう俺もどうかと自分思う。

「別に付き合ったとか言うわけじゃねえ。向こうが勝手に付きまよって来るんだ」

「またまた、照れ隠ししちゃって」

そう言う姐さんは持っていたカップ酒を一気飲みする。この人は一日の内何時間飲酒しているんだろう？ 身内としては健康面の心配が頭に浮かぶ。

「ちょっと見せてもらったけどあの子の付喪神は強いわね。重力操作なんて呪術としてはかなり高レベルだわ」

「そんなにすごいのか？ あのルナってのは」

「うん。作り出したのがアイちゃん自身だけにかなり適合してるしね」

アイが作り出した？ 付喪神を？

「付喪神ってのは長い年月を表す『九十九』の意味もあるけど、そのまんま『喪が付いた神』でもあるのよ。『喪』つまり死者を弔う心ね」

弔いの想いが付いた神……それってつまり……

「あの子から話聞いたでしよ。月夜の祭囃子ルナティックハートはあの子の妹への後悔とか贖罪しよくぐち、懐かしみの気持ちちが時間をかけてマフラーに宿った結果なのよ」

「……へえ」

俺はわざと興味が無い振りをした。

中庭は春のまだひんやりとした夜風を流してくる。姐さんはカップ酒のラベルをぼんやりした目で見つめながら、

「多分今の彼女はかなり不安定よ。運動で挫折して勉強でも失敗して、やっと誰にも負けない事を見つけたらシグマに負けちゃったんだから。かなり無理のある展開でシグマに惚れたのも、きっと無意識のうちに何か頼るもの探しているからよ」

「まるで普通の状況だったらず俺は相手にされない、って言うてるみたいだな」

「ひねくれてるわね。まあ頑張って支えてあげなさい」
たまに大人ってのは妙に重みのある事を言う。

「……支えてやれ、か」

——手は殴るだけじゃなくて支える事も出来るんだ。
数時間前に自分で言った台詞を思い出す。

俺に出来るのかな。一人の人間を支えるなんて事が。

「強くなりたい？」

静かな声で姐さんが訊いた。普段の姐さんからは想像できないような真面目な声だったので、俺も思わず身を引き締めてしまう。

「ああ、誰かを支えられるぐらい強くなりたい」

「ふ。誰かじゃなくてアイちゃんだって言いなさいな！」

……前言撤回。やっぱりうざいだけのただの姐さんだ。

「じゃあ明日からアイちゃんの指導は小雪に任せて、私があんたの指導をしてあげる」

「この間の修行の時はもうこれで教えられることは終わり、って言うってたじゃねえか。ていうかハジメの修行はどうするんだ？」

「ハジメはもう呪術を使える段階になったし、自分の付喪神を街に出て探させるわ。そして私の考えが間違ってたなければミケちゃんの呪術はまだまだ進化する」

呪術が進化する？

「本当かい？ 姐さん！」

勝手にあぐらをかいた俺の足の上に出てくるミケ。付喪神と言う奴は呼んでもないのに出てくる事があるから困る。

「ええ、本当よ。ヒントをあげるなら『ミケちゃんはウノの付喪神』って事かな」

依代が何か呪術に関係するのか？

しかし言われてみればミケの能力は「入れ替え」。次々とカードを場に出して入れ替えて行く様子はウノに似ていなくもない。

「まあ明日になったら詳しく教えてあげるから、ゆっくり寝て体休めなさいな」

そう言っただけで姐さんは部屋へ廊下を渡って帰って行った。

俺も姐さんが置いて行った空のカップ酒を拾い、立ち上がる。

——強くなりたい。

生まれて初めて騙し打ちとかじゃなく、単純に強くなりたいと思ったのには少なからずアイとの出会いが関係してるんだろうな、きつと。

「ふーん♪ 明日からシグマと一緒に修行で嬉しいな」

ご機嫌で鼻歌まで歌いながら家へ帰って行くアイ。しかしその姿を遠くから観察する者が居た。

「あれが例の通り魔？ あんなただの女が？」

雑居ビルの屋上から双眼鏡でアイを見ていた少年が言った。

短い紙に人懐っこいクリツとした目、きちんと一番上までボタンを留めた学ランからはいかにも優等生といった雰囲気が漂う。

「油断大敵」

「その通りだよ。君は少し人を見かけで判断し過ぎるところがあるね。気を付けたまえ」

優等生風の少年の言葉に、後ろで壁に寄りかかっていた少女と少年が矢継ぎ早に言う。

少女の方は今時珍しいセーラー服を着て小柄な体格に無表情で、長めの髪をツートールにしている。一方少年は向こう側が見えない程厚いメガネをかけたガリ勉風。最初の少年と同じ学ランでねちっこい喋り方をしていた。

「何しろ彼女の付喪神は重力を操る。その上今日彼女は厄介な仲間を手に入れてしまった。どうするんだね?……」

メガネの少年が屋上の端にある段差に腰かけていた四人目の少年に声をかける。

「君が早く通り魔少女をスカウトしないから安蒜家の戦力が増えてしまったではないか。何とか言いたまえよ」

「責任問題」

少女とメガネの少年二人の非難する口調にも動じず、四人目の少年はクスッと笑った。どうやら彼らは同じ学校の生徒らしく、彼の服も同じ学ラン。襟足で結んだ長い黒髪が屋上の風になびく。

「別に問題ないですよ。華麗な僕たちがあの程度の連中に負けるわけがありません」

立ち上がる少年。切れ長な目が夜景を見つめる。

「しかし安蒜家がこれ以上戦力を集めるのは流石にマズイですね。僕たちも例の用意をしましょうか」

背中を向け、ビルに張り付くように付けられた非常階段に向かう少年。その背中には中学生ほどの子供とは思えないような暗い迫力が宿っていた。

そして、仲間三人も後に続く。

「この街の夜を支配するのが、あの古びた一族から僕たち聖ケルビム学園になる日は近い」

不敵な笑顔の少年と三人の仲間は夜の闇へと消えて行った。

十一つ。 夜戦の火蓋は落とされて

——あれから一週間が経った。

この一週間、ほとんど俺とアイは学校が終わったらそのまま屋敷の庭や道場で夜まで修行、というハードな生活を行っていた。俺の指導を姐さんが、アイの方は小雪さんが担当する。

ようやく今日になって俺は姐さんと共に新しい呪術を完成させる事が出来たので、休憩をもらってアイの修行をこっそり見に行く。縁側の端から庭を覗くと小雪さんとアイが結界をまとって組み手をしているところだった。

「せやあ！」

「甘いです。もっと蹴りを出した方の足の結界を厚めに！」

ルナの呪術によるサポート無しとは言え、結界で強化されたアイの回し蹴りを軽々と片手で捌く^{さば}小雪さん。その動きは一切の無駄がなく、まさに「捌く」といった感じに最小限の動きで攻撃をいなししている。

どうやら小雪さん、ただのお手伝いさんに見えて相当な実力者だ。さっきから見えていて結界が完璧なだけでなく、基本的な足運び一つにしても無造作にやっているようで計算的なのが分かる。俺はこの人と対峙したとして勝てるのだろうか？ 心底この人が例の通り魔じゃなくて良かったと思う。

そう言えばどうして俺がこの間小雪さんが通り魔の正体じゃないかと疑ったのかと言えば、例の黒ジャージである。見ると庭で激しく組み手をしている二人とも黒のジャージ。どうやら小雪さんのはただの運動用のものだったらしい。まったく、紛らわしい。

「今日はここまでにしましょう。私は夕食の買い物があるので出かけてきます」

「はい！ ありがとうございます！」

直前までハードな運動をしていたにも関わらず小雪さんの息はまったく上がっておらず、彼女は俺に気付いて一礼すると縁側を自室の方へ向かって行った。

一方アイはかなり消耗している様子で、修行が終了となった途端に地べたに膝をついて荒げた息を整える。組み手は俺も小さい頃よくやったが彼女たちがやっていたのは結界を展開した状態でやる、いわば上級編である。俺との戦いの敗因が禊のスタミナ切れだったアイには持久力をつける良い訓練になっているだろう。

「疲れたか？」

俺は縁側から庭のアイに声をかける。俺に気付いたアイは汗をハンカチで拭くとやってきて縁側に腰かけた。

「うん、キツイ。でもまだまだ体力には余裕があるし、自分で鍛えてた時よりもぐんぐん実力が伸びてるのが実感できるかな」

そう言うて嬉しそうに笑う。

どうやらこいつの戦闘狂っぷりは通り魔を止めても抜けないらしく、時々俺が姐さんと修行している道場までアイの叫び声が聞こえてきていた。まあこの情熱をうまくコントロールできれば姐さんが本家に乗っ取る上でアイは貴重な戦力になるだろう。

「シグマの方も終わったの？」

「ああ、ついさっき新しい術が完成したからな」

「へえ！　すごいすごい！　見せて！」

身乗り出して頼んでくる。女の子にこういう視線を向けられるのは悪い気がしない。

けれど、

「駄目だ。実戦まで秘密にしとけて姐さんに言われてる」

「えー、けちー」

子供がいじけたような言い方をして頬を膨らませるアイ。普段学校で見せる委員長気質とのギャップが可愛い……って俺は何を考えているんだ！

そもそも俺がこいつと付き合ってるのは形式的と言うか成り行き

というか、とにかく世間一般に言う「恋人」という関係であるはずがない！ 柄でも無い事考えるな、俺。

俺が自分で自分を叱りつけている間にアイはぱっぱと近くの障子を開けて部屋に入り、そこでジャージから学校の制服に着替えだす。障子越しに移るスラッとした曲線的なシルエツトを、いけないと思いついながらもつい見入ってしまう俺は間違いなく健全な男子高校生だ。……首絞めながら抱きかかえられた時にも思ったけど、胸は姐さんに比べればかなり小さい……いや、あのスタイルと比較するのはかなり酷だ。純粋な日本人とは思えないプロポーションなんだから、あの人は。

しかし姐さんより控えめな小雪さんと比べるにしてもまだ小さいな。身長は女子としちゃ高めの癖に田舎の中学の女子たちより發育悪いような……。

——気が付けば色恋沙汰とは一切無縁だった中学時代から一変、高校入学から一週間で身の回りに三人も女性が居る。いや、田舎でも鶴ばあちゃんは居たがそういう勘定には入らないからな。

「シグマ、じゃあ私そろそろ帰るね」

リボンを襟の所で付けながらアイが部屋から出てくる。

いつもなら修行が終わったら玄関先で別れていたが、考えてみれば形式的とは言え俺たちは付き合っているのだ。たまには近所でこっそりデートぐらいしても罰は当たらないんじゃないだろうか？

「なあ、アイ」思い切って切り出す。

「何？」

「たまにはデ……」いかん。続きが出てこない。焦るな、俺！

「デ、……？」首をかしげるアイ。

「デ……」

「デ、の後は何かな？」いい加減気付けよと内心思う。

「デ、電話ぐらいいしても良いよな？ たまには」

……俺の意気地なし。

一応初めてアイが屋敷に來た日にお互いの携帯番号とメールアドレスは交

換していたが、朝学校で会って修行をして夜まで一緒に行動しているとあまり必要性が感じられなくて、電話で話した事はまだ一度も無かった。そういう観点から見れば一歩、いや半歩前進である。

俺の頭の中は「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが」という有名な台詞でいっぱいになる。アームスロング船長、これは俺の人生的には大きな一歩ですよね？ 脳内イメージの船長は溜息をついて首を横に振ろうとしたが、無理やり頭を掴んで頷かせてやった。

アイは一瞬キョトンとした後、にっこり笑って頷いた。

「たまにじゃなくていつでもオツケーだよ！」

その笑顔に心から救われる。うん、やっぱり人間というのは泣いたり怒ったりしているより笑っている方が良いもんだ。

「じゃあ、また明日ね」

アイを玄関まで送ると、そう言って彼女は元気に帰って行った。

また明日、か。そう言われてしまうと今晚電話がかけ辛いじゃないか。そう思って玄関の壁にある鏡を見た瞬間、俺は自分がずっとニヤニヤ顔だったことに気付き軽い自己嫌悪に陥った。

時刻は午後六時。そろそろ夜が始まる時間だ。

「ふあゝあ」

地図を片手に辺りを見回す。古びた家屋や寺が連なる長い坂の途中でハジメは立ち止まった。

シグマのアドバイス通り目を閉じ、開くを繰り返す。反応なし。ミケの周りに見えるような紺色の光はどこにも見当たらなかった。

「ここもハズレ、っと」

地図に付けた丸を上からバツマークを赤のマーカーで書いて消す。腕に付けた銀のブレスレットが当たって色が擦れてしまった。

ここは今日九ヶ所目、幽霊坂と昔から言われているいわくつきの

坂だ。坂の両側に江戸の頃からずっと寺しか無かった為、怪談めいた逸話が多く残されているらしい。

姐さんに街へ出て自分の付喪神を探すと言われてから一週間。放課後も休日も全部潰して都内で怪談や妖怪の伝承が残っている場所を調べ続けている。今日こそは何かそういう伝承の元になった依代を見つけれられると思ったのに。

付喪神を探して来いと言われた時、俺にはこうやってローラー作戦で探す方法しか思いつかなかった。姐さんも何か手掛かりをくれれば良いものを、まあそういう投げやりなところも素敵なんだがね。坂を登りきると公園があったのでベンチで休憩。トイレの脇の時計を見ると時刻は午後六時半だ。まだもう一か所ぐらい行けるか。

「よし！　じゃあ最後に今日の本命、四谷怪談に出てくるお岩さんの井戸でも行ってみるか！」

電車で少し移動する必要があるが、少し晩飯に遅れるだけで済むだろう。なんとしても早く付喪神を手に入れたい。

俺には焦りがある。シグマ一人ならまだそういう家系だからと済ませていたが、一週間前現れたアイちゃんの影響は大きい。俺にだって依巫の才能はあるはずなのだから、早く俺も付喪神を使役してあいつらの仲間になりたいぜ！

明るい未来に向かって俺が意気揚々と公園の出口へ歩き出した瞬間だった。

ブルースプライト
「晴天霹靂」

……バチバチ。

か細い女の子の声に続いて何かが火花を散らすような音がした。ヤバイ！　理性と言うよりも直観で俺は思いつき足で地面を蹴って近くの茂みに飛び込んだ。

ドカーッン！

俺がガサガサと無様な音を立てて茂みに頭から突っ込むと同時に、背後で何かが地面に落ちて強烈な光を放ったのを感じた。

何だ？ 顔をわずかに茂みから出して様子を窺う。^{うかが}

「隠れても無駄でありますよ！ ちゃっちゃと降伏すれば命ぐらいは助けてやるであります」

……一言で言うならば、天使が居た。

もし誤解をした人が居たら申し訳ない。俺は普段からあだから多分俺が「天使」と言ったところで、多くの人が一目惚れした相手の比喻表現だと勘違いするだろう。でも今回ばかりは本当に目の前で天使が宙に浮いているのだ。

優雅な波を描いた栗色の髪。背中から生えてパタパタと羽ばたき、空を飛んでいる翼。どう見ても天使だ。しかし頭に輪っかは乗って無いし、翼の色は純白ではなく黒も混じっている。確か鷺の翼^{さぎ}がある感じだよな。来ている服も青色の軍服で天使らしくない。

よく天使は性別の無い子供の姿と言うが眼前の天使は体型からして大人の女性らしい。ピカピカ光る弓を矢を放った体勢のまま持っている。

「何だお前！ いきなり人にそんな危ないもの向けるんじゃないねえ！」
状況的にさっき俺を狙った光の一撃はこいつの弓によるものだろう。しかし俺は命を狙われる覚えは無い。

「そこでありますか。さあさあ安蒜一門の者ならさっさと付喪神を出して戦うでありますっ！」

やはり声からしても女らしい。弓を俺の居る茂みに向ける天使。おかしな事に天使の持った弓には矢がつかえられていない。というかそもそも天使は撃つ為の矢を持っている様子が無いのだ。これは一体……。

疑問はすぐ晴れた。

ブルースプライト
「晴天霹靂」

先ほどと同じ声。同時に天使の手にギザギザした青白く輝く矢が

出現した。

「目標十二時の方向、発射！」

天使が叫び、風を切って放たれた太い矢が茂みを襲った。

体を転がしてかわしたが地面に着弾した矢が弾けて火花を散らす。

それは流石にかわしきれなかった。

ビリィィィ！

「ぐわぁ！」

これは……電撃？ 体中が強烈な痺れに襲われる。

昔、電池を舐めて舌が痺れた事があったが今回はその何十倍もだ。むしろどちらかと言えば痛い。

「直撃回避。反応上々」

横になった状態から顔を上げると近くに中学生くらいの女の子が立っていた。今時見かけないセーラー服にツートールにした髪型。

小柄で平行に一文字に結ばれた口は寡黙そうな印象を与える。

……かわいい。

「その彼女、今からお茶しない？」

「……っ！ 変態青年！」

へ、変態……。畜生、こんな時代がかった口説き文句だからか？

セーラー服の時代にナンパの仕方を合わせてみたのに。

ビリビリィィィィィィ！

落ち込んだのも束の間、背中から電撃の矢を撃ちこまれて俺は地面に倒れ込んだ。

「油断大敵。自業自得」

セーラーの少女が嘲るような表情で俺を見下ろす。どうやらさっきの天使が背後から俺を射抜いたらしい。

見ると少女は首から下げた十字架のペンダントをずっと握っている。そしてその周りには紺色の光——そうか、あの天使はこの子の付喪神！ 今のが姐さんに聞いた無声発動って奴か。しかしそれでもこの威力なんて、正式発動を直撃食らったら火傷じゃ済まないだろう。

「へへん！　そう何度も外さないであります！」

「……百発百中」

得意気に依巫の近くで滞空して腕を組む天使。無表情にこっちを睨むセーラー少女。

よっしゃ！　何でこいつらが襲って来るのか理解できないが、こうなりゃ俺の依巫デビュー戦として相手を……そこまで考えて気が付いた。

——俺まだ付喪神持ってねえ……。

よし！　早く帰ってシグマの電話待ちながら宿題やろう、っと。

私はつい癖でスキップをしながら電柱の横を取り抜ける。気が付くとさっきから、いつシグマからの電話が来るかと思いながら携帯を開いたり閉じたりを繰り返してる私が居た。

——彼氏、か。

そう言えばさっきの会話が初めての付き合ってる者同士らしい会話だった気がする。学校では恥ずかしがって無愛想だし、修行の休憩中に話しても結界を効率良く張る方法とかの話になってしまう。

私たちの関係は明らかに世間一般で言う恋人同士では無い。私はこの間までシグマを全力で殺そうと襲っていたのだから。

本当にルナと出会ったばかりの私は単純で浅はかだった。今もそれから一週間しか経っていないわけだけど、少しは成長できたと思う。少なくとも衝動的に他人を襲いたくなる事はもう無い。

シグマのおかげだろうか？　シグマは私の事をどう思っているんだろうか？

——私は本当はシグマをどう思っているんだろう？

「……はあ」

駄目。全然分からない。それともこれが噂に聞く恋の悩みなのかな？

無意識に溜息をつくと同時に十メートル程先の突き当たりに人が立っているのに気付いた。もう辺りは暗くなっていて顔は良く見えないが、着ている学ランからして中学生かな？

「大府愛だね」

突き当たりの中学生が少しずつ歩み寄り、メガネの位置を直しながら言った。

「どうして私の名前を？」

私の全身に緊張が走る。

近くなって全体像が見えてきた少年はメガネをかけ、面長の顔といかにもガリ勉風。喋り方も何だかねちっこい。

「知っているさ。この街を騒がせてた通り魔の正体ぐらい」

「……全部知ってるって感じね」

「もちろん」

再びメガネを直す少年。一瞬レンズの奥の細くて人を見下したような目が見えた。

「ただね、一つ訊きたい事があるのだよ」

「何よ？」

私は上から目線の相手の言葉にムツとする。どうして年下らしい少年にこんな態度を取られなくちゃならないの？ お姉さんとして少々厳しい指導を……

その時、背後から強い殺気を感じて反射的にカバンに手を突っ込んでマフラーに触れ、ルナを無声発動して高く跳んだ。

「逆に通り魔に襲われる気分ってのはどんな感じかね？」

ギユウツ！

さっきまで私が居た位置の空気を鋭利な爪をした大きな手が握りつぶすのが見えた。危うくあれに巻き込まれるところだったみたい。近くの家の屋根に着地。襦で実体化したルナも一緒。

「アイ、何あれ？」

怯えた様子のルナ。私だって尋ねたいくらいだ。

尖った角と牙、三メートルはあろうかという巨体、血のような赤の皮膚。右手にはトゲの付いた棍棒を持っている人型の化物がそこに居た。

——赤鬼？

まさにも太郎の挿絵に出てくるような鬼だった。存在するはずの無い怪物が今日の前で夜の住宅街に出現している。

「ほら、そんな所から見下ろしてないで早く戦いたまえよ。君の相手をして時間を稼ぐのが僕の役目なのだから」

——時間を稼ぐ？

赤鬼は低く唸り声を上げながらこちらを見上げ、重量のありそうな棍棒を振り上げた。このままでは私たちが乗っている家が危ない！屋根から飛び降りて狭い住宅街の道を走る。動く標的に合わせて軌道を変えた棍棒はさいわい道路に叩きつけられただけで済んだ。

「ルナ、とりあえず広くて戦える場所へ！」

「分かってる！」

状況から察するに赤鬼はあの少年の付喪神だ。無声発動をしているようなので名前は分からないが、おそらくパワーで圧倒するタイプのものだろう。姐さん曰くこういうタイプは本体よりも依代を壊すのが最善、ならばじっくり相手の依代を探って戦える場所が要る。「ふん。逃げるなど愚かしいとは思わないかね？」

赤鬼の肩に乗って追ってくる少年。私たちは夜になったばかりの街を駆けた。

「う……緊張する。まずは何て話せばいいんだ？」

俺はぶらぶらと車の灯りが行き交う国道脇の歩道を歩いていた。

もうすぐ小雪さんが夕飯の買い物を済ませて帰って来ると思ったが、どうしてもアイに電話をかけておきたくて家を出てきた。

日本家屋という物は部屋と部屋の仕切りが薄いものばかりでプライバシーがあまり保たれない。姐さんに電話を聞かれるのだけは絶対に嫌だったので外でかけようと思ったのだ。

「『今日は楽しかったね!』、いやこれはデートまで取っておこう。『明日の宿題なんだっけ?』……これはもう学校の帰り道で訊いたな。『つい声が聞きたくなっちゃって』、無理無理無理! これはキモイ!」

多分一人でブツブツと喋りながら歩いて行く俺は傍から見てもかなり怪しい男だっただろう。心境的には最後のが一番近いのだが、俺の柄じゃない。

ふと足を止めると俺たちの高校の前だった。門は閉じられているが、時間外に通る用の小さな扉が門に付いていて鍵はかかっているようだ。

「すみません。湯島学園ってここですよね?」

俺がぼーっと校舎を見上げていると横で声がした。

振り返ると居たのは人懐っこい顔をした学ランの男子中学生。成績優秀スポーツ万能という言葉似合いそうなルックスに人当たりの良い笑顔を浮かべている。俺は慢性的に大人受けが悪いのでこういうタイプが羨ましくなる事もある。

「ああ、そうだけど」

「僕見学に来たんですけど、もしかしてここの生徒さんですか?」

こんな時間に学校見学? 東京の子供は真面目だな。

「そうだけど」同じ言葉で返す。

「良かった。じゃあ今からちょっと案内してくれませんか?」

こういう優等生タイプの必殺技、断らせない攻撃が俺を襲う。人は罪悪感を恐れてこういう爽やか君の頼みは断れないようにできているのだ。

仕方なく俺は通用口を開けて中学生を中に入れる。多分教師はまだ何人か中に居るだろうから押し付けちまおう。そう思って俺が校舎に入ろうとすると中学生が袖を引いて引きとめた。

「あ！　まず校庭を見せてくれませんか？」

随分妙な子供だ。校庭なんて校舎から眺めれば良いだろうに。

「僕サッカーやってて、部活入ったらどんな具合か知りたくって…
駄目ですか？」

「……構いやしねえよ」

俺は手をひらひらと動かして中学生を校庭へ案内する。

特に代わり映えのしない平らな土のグラウンド。強いて言うなら
都内の私立高校にしては広めだという事ぐらいだろう。

「これで良いか？」

「ええ、バッチリです。……あなたの相手をするには」

「え？」

いきなり雰囲気が変わって振り返ると中学生の隣に別の誰かが居
た。

くすんだ柿色をした着流しに朱色の帯。頭には時代劇で旅人が被
るような笠かさを被っていて顔は見えない。身長は180センチぐらい
だろうか？　そして何より目を引くのは腰に刺した大小の日本刀。

まるで時代劇に出てくる浪人のような男だった。一体どこから現
れたんだろう？

もちかしたら中学生の保護者かもしれないと思って声をかけよう
とした時、

「サムライエッジ
鋭利な残心！」

中学生がポケットから紺色に光るカッターナイフを取り出し、叫
んだ。

——付喪神！？

浪人風の男が腰の刀を抜き、同時に俺を斬りつける。体を反らす
ようにしてかろうじてかわした。

「居い合あ使いいの付喪神みてえだな！」

ミケが俺の肩の上に出現した。幸い依代は持ってきている。

居合。刀を鞘さやから抜くと同時に切りつけることで、鞘と刃が起きます「鞘滑り」と呼ばれる現象で限界まで高まったスピードで攻撃する神速の剣技だ。それを結界で強化された付喪神が使うとなれば……威力は計り知れない。

剣を鞘に戻した付喪神と並ぶように中学生が歩み出る。

「時間を稼ぐだけで良いんだけど、あんまり弱かったら殺して良いとも言われてるんだ。安蒜家の長男君」

「……お前何者だ」

「聖ケルビム学園中等部、二宮 亘にのみや わたる。よろしくね、長男君」

なんかいかにも凄そうな学校名だ。てか名前と制服が合って無いだろ。普通そういう学校はブレザーでは？

俺とミケ、二宮と浪人風の付喪神。2対2で睨み合う。

「ミケ！ このガキに上級生への口の訊き方教えてやるぜ！」

「あたぼうよお！」

全身の毛を逆立たせるミケ。

こいつの目的は分からないが丁度良い。ミケの新しい呪術・「弑に式しき」を試す良いチャンスだ

「ははっ！ そういう台詞を吐くのは死ぬ奴だってお決まりがあるんだよ、長男君」

「……笑止」

さっきまでとは打って変わってデカイ態度の二宮。付喪神の方は聞き取れるギリギリぐらいの低さの声で一言喋っただけだった。

「手加減なしだ！ ド派手に行くぜ！」

アイへの電話は完全に忘れていた。

——こうして三人の刺客との戦いが始まる。
そしてもう一ヶ所、静かに戦いの場へとなりつつある場所があった。

「ごめん下さい。九州分家の使いで来たものですが」

一人の人物が普通の一軒家に幻術で偽装された安蒜本家屋敷のインターホンを鳴らした。

「はい」

抑揚のないダルそうな声でそれに応えるのは現当主（自称）の安蒜小町。シグマの姉である。

事前に使いが来ると連絡があったのだろう。珍しく和服を着て正装している。

「遠くからわざわざお疲れ様です。今回は何のご用事ですか？」

「小町様が新しく当主になると聞いたので、そのお祝いにお酒などを」

客を中に通し、幻術が途切れ古屋敷に戻る廊下を歩きながら小町が訊くと、その使いの少年は上品に笑って答えた。手には仰々しい包装がされた酒瓶を抱えている。

「まあ！　ありがとうございます。ご一緒したいところですけど、お使いさんはまだ未成年ですね？」

「ええ、まだ中学生です。けれどこちらには構わずどうぞ飲んで下さい。お酌します」

「随分と気が利く事。うちの弟にも見習わせたいくらいだわ」

小町の言葉に苦笑する使いの少年。しかしその目の奥は笑っておらず、常に小町の間隙を狙っているのだった。

「その必要は無いと思いますよ」

——どうせ弟さんはもう細切れでしょうから。

そう心の中で呟いて、伸ばした髪を後ろで束ねた少年は微笑んだ。あの屋上で仲間にしたのと同じように。

十一つ。 夜戦の火蓋は落とされて（後書き）

web拍手導入してみました。

匿名で感想や意見が送れるので良かったらどうぞ。

用語集ページにも下手糞ながら挿絵いれました。

十二つ。 覚醒、グレイプニル

——夜の公園、ハジメ。

くそっ！ 付喪神無しでどうしろって言うんだ！

俺はこちらを見下すようにして見ている依巫の女の子と天使っぽい付喪神を見て考える。確か名前は「ブルースプライト」だったか。考えろ。さっき射抜かれた感覚からしてブルースプライトの能力は電撃の矢を撃ち出す事。つまりは遠距離や中距離専用みたいなもので、近づけば素手でも勝機があるはずだ。いざとなれば結界でサポートも出来る。

でもそう簡単に近づけるか？ あの矢の早さは並ではないし狙いもかなり正確だ。それに近づいたところで依巫の結界を破けなさやろくなダメージを与えられない……。

——ええい！ 俺はバカなんだから難しい事考えなくて良いんだよ！

「うらあああああ！」

適当に雄たけびを上げながら突っ込む。

ブルースプライト

「晴天霹靂」

ビリリリイイ！

——やっぱこうなりますよねー。

真正面から雷の矢を食らって押し戻されえる。結界は十分厚く張ったので少し体が痺れただけで助かった。

みぎ

「三木 あんな 安奈大将、やはり結界を破らなくては大きな損害を与えられないであります！」

ブルースプライトが依巫に向かって言う。どうやらあのツートールの少女は三木安奈という名前らしい。とりあえず安奈と呼ばせてもらおうとうるか。

「……重々承知。敬称不要」

安奈は相変わらず無表情のまま。ブルースプライトの中では彼女は大将という設定なのだろうが、彼女自身はそういうのを名前の後に付けられるのは嫌なようだ。

それにしても安奈は本当に口数が少ない。というか喋る事がさつきから聞いていて四字熟語だけな気がする。俺は国語は苦手なのであまり難しい熟語を使われると意味が把握できないのだが……まあ苦手なのは国語に限った事ではないけど。

「出力増大！ 結界撃破！」

安奈の声に呼応するようにブルースプライトの弓に番え^{つが}られた電撃の矢が太く大きくなる。

ブルースプライト
「晴天霹靂！」

こんなのを食らったら本当に結界が吹っ飛んでしまう！

俺は声と同時に電撃をかわそうと大きく飛び退いた。

――が。

「あれ？」

電撃が俺の居たポイントに落ちてこない。

おかしいと思って足を止めブルースプライトの居た方を見上げた瞬間、今まで味わったことの無いような痛みと衝撃が頭の中から爪先まで全身を貫いた。

そこでやっと気が付いた。安奈は付喪神の名を呼んで呪術を発動するふりをして、実際には発動していなかったのだ。俺がフェイントにかかってかわしたと思い、油断した所を無声発動で強烈な電撃を撃ち込んだ。

「ぐあああああ！」

俺の体の周りを覆っていた結界がガラスが碎けるように粉々になる。マズイと思ってすぐに張り直そうとしたが何故か思うように再構築できない。

「さっすが安奈大将！ 敵の結界が破れたであります！」

「作戦成功」

結界が張れないばかりか体もうまともに動かない。たった一瞬

の油断の為に俺は全身ボロボロになって地に伏す事になった。

「神経遮断。結果不可」

安奈が十字架のペンダントを一層強く握り、禊を付喪神に注ぐ。

「つまり本官の呪術の電撃が、貴様の電気信号による神経伝達を妨害しているのであります。結果なんて集中力が要る行動はもうできないでありますよ！」

ブルースプライトが弓を引くと今度はさっきと同じくらい大きな矢が三本も番えられてた。

あんなの三発も同時に食らったらマジで死ぬじゃねえか！

三本の矢は正確に倒れた俺の体を狙い、安奈の声で一斉に放たれた。

ブルースプライト
「晴天霹靂」

……やっぱり俺はダメだ。

昔っから体が丈夫な事くらいしか取り柄が無い。実際には大して女にモテるわけでもないってのも自分で分かっている。

——言うなれば俺は生まれた時から脇役だ。

小学校時代、俺たち子供の間では東京に住んでいたと言うだけでシグマは憧れの的だった。その上あいつは捻くれてこそいるものの友情とかには熱く、何事も卒なくこなすタイプだったから学年一の人気者だった。

そんなあいつの影みたいにくっついて回る俺は主人公のお供の三枚目キャラだ。人気者の親友というポジションにしがみついて、ただ目立つ為だけに虚しくワルっぽい事をやる。

あいつに降り注ぐ明るい光のお裾分けを味わっていただけなんだ。中学三年間あいつと対立して不良頭をやったと言っても、実際には俺が猪突猛進で空回りしていたに過ぎない。

あいつと喧嘩別れをした後もあいつに注がれる光の味が忘れられ

なかった。そんな思いは嫉妬や執着を生み、ますます俺とあいつの距離を開かせた。俺があいつを狙って付きまっても距離は開いて行くばかりだった。

だから……だからあの時は本当に嬉しかったんだ。

公園の展望台で俺に依巫の才能があると分かった時の事。これでやっとシグマと同じになれると思った。足元じゃなくて同じ視点で光を見上げられると思ったんだ。

でも東京に出てきてもなかなか付喪神は手に入らなくて、焦りばかりが募って行って……このさまだ。

周りの奴が言うように俺は本当にバカだよ。後先考えずにただ憧れるままに動いちまう。今回だって敵わないに決まっているんだから、始めから戦おうとせず逃げれば良かったんだ。

……悔しい。

折角あいつと肩を並べられると思ったのに……今度こそあいつと対等になると決めてたのに！

「怨霊だろうが悪霊だろうが何でも良い！俺の付喪神になって力を貸してくれ！」

地面を拳で叩き、声に載せて思いをぶちまけた。――そして気付く。何かがおかしい。

もうとつくに俺に当たっているはずの三本の雷の矢が空中で静止している。まるで時間が止まっているように。

「あのさ」

突然横から声をかけられた。うつ伏せ状態の俺の顔の横に小さな足がある。

「どうせ頼るんならもうちょっと身近な奴に頼って下さいよ。悪霊とかじゃなくて」

奇妙な格好をした少年だった。歳は大体小学六年くらいか？子供独特の鋭さのある目つきと対照的に人形のような整った顔立ち。

上半身は和服の上に灰色の毛皮のベストのような物を着て、下半身には先の細くなった、袴と言うよりズボンに近い何かを履いてる。確かかるさん軽衫かるさんって言うんだよな。じいちゃんが山に入る時良く着てた。何より目を引くのはその髪だ。眩まばゆいばかりに輝く綺麗な銀髪をしている。そして何故か首には夏祭りで売っているようなセルロイド製の犬のお面を、首の後ろに回すような感じでかけている。

確かテレビで見た山賊がこんな恰好だった。犬のお面を除けば。静止した世界で二人つきり。俺たちだけ正常な時間軸からズレてしまったとでも言うのか？

「……お前は？」

「かーっ！ 鈍いですね。まだ気付かないんですか？」

呆れたように頭を掻く山賊風の少年の銀色の髪が揺れる。明らかに年下の相手に馬鹿にされると流石の俺も腹が立った。

「何だよ急に現れて生意気な！」

「そんな事より早く名前を呼んで下さい！」

——名前？

首を傾げる俺に、俺が腕に付けたブレスレットを指差して少年が怒鳴った。

「その依代から感じて下さいってば！ 僕はあなたがずっと付喪神を探している間も傍に居たんだ！」

——ずっと居た？

俺は腕に付けた銀のブレスレットを撫でてみる。するとたちまちその周りに夜闇を濃縮したような紺色の光が溢れてきた。

——全然気付かなかった。

俺は全てを理解し少年に話しかける。

「……ごめんな。ずっと一緒に居てくれたのに気付けなくて」

「本当のピンチに気付いてもらえて良かったですよ。だから早く名前を感じとって！」

後半はせかすように声が大きくなった。右腕に集中すると浮かんでくる一つの言葉。

——ここからが本当のデビュー戦だ！

「グレイプニル怪狼を繋ぐ者！」

俺が唱えると同時に止まっていた時間は動き出した――

グレイプニルが両手を宙に向かって伸ばすと手から無数の鎖が飛び出した。

それぞれの太さは自転車のチェーン程。でも俺は直感で多く禊を注げばより太く、長く鎖を変えられる事を悟っていた。

飛び出した鎖は俺に向かって直進していた三本の電撃のとぶつかり、お互い正面から勢いを相殺――し合わない。何故だ？

一瞬の出来事だったからよく分からないが俺には電撃の矢が細い鎖に飲み込まれたように見えた。砂漠の砂が水を吸い込むように、ぶつかった瞬間鎖が矢の周りを包みこんで電撃を飲み込んだのだ。

「……！ 攻撃失敗？」

「何者でありますか！ お前は」

突然現れた俺の付喪神に驚きを隠せない二人。良いぞ、俺の天才的呪術裁きでもっと驚け！ 良く分からないが形勢逆転じゃないか？ これは。

俺は悲鳴を上げる体に鞭を打って無理矢理立ち上がった。もう名前を呼ぶだけで精一杯だが構わない。

「グレイプニル怪狼を繋ぐ者！」

さっきよりも太い鎖がグレイプニルの左右の手から五本ずつ飛び出してブルースプライトと安奈を襲う。

「緊急回避」

「了解であります！」

しかし相手のスピードの方が上だった。ブルースプライトが素早

く安奈の腕を掴んで空高く飛び回避する。

相手は遙か頭上。そこから無声発動で電撃を連射してくる。

ビリッ！ バチッ！ ドカンッ！

射撃の角度がほぼ真上からだからまさに雷だ。焦っているからか距離があるからか、さっきよりも狙いが正確でないから助かる。

「付喪神のガキンチョ、この調子で試しに無声発動だ！」

「任せなよ！ 呼び方はグレイで良いから」

心の中でグレイの名を呼んで禊をブレスレットに注ぐと、グレイが細い鎖が何本も放って撃ち降ろされる電撃を迎撃した。やはり間違いでなく鎖が相手の攻撃を吸収しているようだ。

「僕の呪術の鎖は相手の禊を吸収する。だから彼らみたいな禊を攻撃に変換して飛ばすタイプの相手には滅法強いです」

大人びながらも子供らしさが垣間見える口調でグレイが説明する。なるほど。そういう事だったのか。

「て、事は――」

俺は禊を注いで鎖を増やし高速で上空の付喪神を狙う。すると見事にブルースプライトの体に三本の太い鎖が絡みついた。

「――こうすれば直に禊を吸えるんじゃないか？」

「バカと言われる割には機転が利きますね」

電撃を迎撃して吸収しながら器用にこっちを向いて言うグレイ。使える付喪神だが性格は俺と合わないかもしれない。

そんな俺たちを他所に上空の二人組は突如絡みついた鎖に大慌てだ。

「動きにくいであります！ しかもこの鎖からどんどん禊が流れ出て行く気が……」

「理解不能！」

考えるより先に口が動いた。勝負を決めるなら今だ。

グレイブニル
「怪狼を繋ぐ者っ！」

鎖で相手の動きを制限できる内にもっと鎖を重ねて一気に禊を空にしてしまおうんだ。そうすれば俺たちの勝ちさ。

俺は既に絡みついている三本の周りを伝わせるように上空めがけて無数の鎖を飛ばした。これだけあれば吸い尽くせる！

だが相手もそれなりの依巫、簡単に逆転勝利とは行かなかった。

「……全身全霊、晴天霹靂！」
ブルースプライト

おとなしそうな目をカッと見開き、小さな口を精一杯に開けて安奈が叫んだ。寡黙な彼女だが言葉にする必要もない程の本気が伝わって来て、俺は思わず身震いする。

……来る。何かとんでもないものが。

「エネルギー装填量最大。目標伏角76度、十二時の方向。発射！」
ブルースプライトも依巫に負けないくらいの迫力で叫び、番えられた矢の放つあまりに大きい光で輪郭が見えない弓を解き放った。

放たれた特大サイズの矢は加速しながらジグザグと夏の雷がするように曲がり、最終的に鋭角的な渦巻きになって俺たちの鎖とぶつかった。大地を削るドリルのようなそれは絡みついて飲み込もうとする鎖をことごとく跳ねのけ、ジワジワと俺たちへ接近してくる。

「つく。威力がでか過ぎて飲み込めない。……多分結界に使う分も注いだ連中の全力の一撃だ」

のしかかる雷の圧力に耐え、苦しそうに顔を歪めるグレイ。付喪神とはいえ子供にしか見えないその姿にどんな重圧がかかっているのかと思うと俺も何かせずには居られなかった。

「俺も一緒に支える！」

鎖を掴むグレイの小ぶりの手を上から俺の手で包む。この付喪神を使った戦いで俺のような結界無しの人間の腕力が役に立たないのは分かっていたが、そうしなければならぬ衝動に駆られて俺は共に鎖を支えた。

「うおおおおおおお！」

俺に残った襖も全部今の鎖へ。しかし追加の襖で太く強化した鎖でもジリジリと押し戻される。

「襖が足りねえ！」

「ならさっきの分も使って下さい！」

悔し紛れに叫ぶと 그레이 に即答された。

——さっきの分？

「やっぱり鈍いですね！ さっき吸収した分を使えと言ってるんです！」

「え？ 使えるの？」

「その為の呪術なんですよ！」

「ならお言葉に甘えて——」

ブレスレットに意識を集中。すると確かに依代であるこの腕輪の中から俺のものでない襪の温かい脈動を感じた。

——これがあの安奈の襪……意外と暖かい。

そう思ったのも一瞬、俺は喉が潰れても構わない気持ちでもう一度叫ぶ。

「怪狼^{グレイブニル}を繋ぐ者！」

次の瞬間、長く続いた均衡が崩れた。

雷と均衡を取りながらも少しずつ押されていた鎖を伝ってさっき吸収した電撃が走る。鎖の先端まで高速で駆け抜けたそれは、水の雫^{しずく}同士が引き合うように渦となった電撃を僅かながら取り込み、それを発端に鎖が渦を飲み込み始めた。

「そのまま突きぬけろ！」

一本、また一本と鎖が渦の中を通って上空の二人に向かって進みだす。渦の回転の軸がぶれ始め、不安定になって来ているのが分かった。

「全身全霊！ 一射入魂！」

安奈が叫ぶ中、だんだん渦が回転の勢いを保ったまま崩れていく。

「誠心誠意唯我独尊三寒四温叱咤激励我田引水唯々諾々紆余曲折老婆親切大同小異電光石火抱腹絶倒七転八倒公明正大針小棒大焼肉定食朝三暮四神出鬼没明鏡止水群雄割拠序破急！」

「最後のは四字熟語じゃねえ！」

鎖全てが渦を突き破り、天へ駆けのぼる鋼の雪崩の中に安奈とブルースプライトは飲み込まれて見えなくなった。

「……俺でも分かる」

それだけ眩くと俺の体力も禊も底を尽き、地面に仰向けに横たわった。見るとグレイも隣で同じ格好になっている。お互い息を荒げたまま喧嘩の後の不良みたいに笑い合う。（あ、俺元々不良だった）デビュー戦の割には上出来じゃないか。

——……これでやっとないつらと同じ場所に立てたのかな？　まあ今はどうでも良い。

立てるようになるまでもう少し横になっていよう。そう考えて一旦目を閉じた。

——源 みなもと元&怪狼グレイプニルを繋ぐ者 VS みき三木 あんな安奈&晴天霹靂
——勝者・ハジメ。

十二つ。 覚醒、グレイプニル（後書き）

用語集ページの挿絵変更しました。

予定していたクリスマス番外編で使うはずのものが、文の方が書き上がらなかったものであちらに載せておきます。

十三つ。 式式、進化する呪術

——私立湯島学園校庭、シグマ。

向かい合う俺たちと二宮と名乗った少年、そしてその付喪神。他に誰も居ない広い校庭の真ん中で二組の依巫と付喪神が睨み合っている事になる。

相変わらず二宮は優等生のにこにこ顔を崩さない。しかしその表情の裏には何か不気味な感情が渦巻いている気がした。サムライエツジと呼ばれた浪人風の付喪神は頭の笠かさが邪魔で顔が見えない。それでも何かこちらを圧倒するような凄味がある。

「サムライエツジ鋭利な残心！」

付喪神が腰の刀に手をかけたまま、目にもとまらぬ速さで近づいてきた。そして俺の胴体を真つ二つにするように一閃。

それをギリギリでかわしたが、また斬！ 斬！ 斬！

絶え間なく続く攻撃の嵐。とうとう反射神経でかわせないレベルになってきたので、俺は呪術を使う事にした。

「シユレディンガー化猫の二叉道」

いくら高速の居合でも、攻撃が来るタイミングが分かっていたら慌てる事は無い。俺はギリギリまで引きつけて俺の体を校庭の端にある由来の分からない石碑と入れ替えた。

これで奴は石碑をぶった切る事になる。日本刀は刃こぼれしやすく人間を一度切った刀は研とがなくては使い物にならないそうだ。石なんて切れば刀の方が折れる！

そう思って俺は移動した先の木の陰から離れた所の敵二人の方を見たのだが——

スパッ！

「……気のせいだよな。あの付喪神日本刀で岩石を真っ二つにしたように見えたんだけど」

「日本刀と言ってもあれは付喪神の一部だからな。禊消費して結界を張ればいくらでも強化できるんでい」

分かり切った事、と言わんばかりに前足で顔を洗いながら言うミケ。そう言う事はあらかじめ言って欲しい。

「元々石碑があつたのはあっちだよ。奴らはあそこだ、サムライエッジ鋭利な残心」俺たちの居る木陰を真っ直ぐ指差す二宮。命令に短く頷くとサムライエッジはブンブンと滅茶苦茶に刀を振り回しながら全速力でこっちに向かって来た。

「シグマ、マズイぜい！ 連中おいらたちの呪術の事を知ってやがる！」

「ああ、校庭の物の配置まで覚えてて予習熱心な野郎だ」

明らかにあの二宮という少年は事前に入念な下調べをして挑んできている。おそらく依巫本人がさっきから校庭の真ん中から動いていないのも、校庭で俺が入れ替えに使えるような物体があるのは端だけだから、中心に居れば入れ替えによる瞬間移動を警戒しないで済むと分かっているからだ。

無駄口を叩いている間にもサムライエッジは俺たちとの距離をどんどん詰めてくる。無残に二つに斬られた石碑で実証されたように、結界がかかったあの刀の威力は計り知れない。

——こういう時にどうすべきかはいつの時代もただ一つ。

「逃げるぞ、ミケ！ シュレディンガー化猫の二又道！」

敵わない相手からは勝つ方法が見つかるまで逃げ続ける。格好悪いかもしれないが長い不良生活で培つてきた俺なりの喧嘩美学である。

俺は間違いなく校庭を囲うフェンスの外に見えたゴミ捨て場のダンボールと俺自身を対象に呪術を発動した。——そのはずだったのだが。

次の瞬間俺とミケは校庭の真ん中、二宮の正面に投げ出された。

まるで校庭全体を覆った見えない壁に弾かれ、この位置まで押し戻されたかのように。

「なっ！」

何が起こったのか理解できない。しかし理解しようとする暇も無かった。

サムライエッジ
「鋭利な残心！」

俺たちを追って校庭の端を目指していたはずのサムライエッジがいつの間にかここに帰って来ている。始めからあれは俺たちを焦らせる為だけのフェイントだったのか！

体を転がして地面スレスレを薙ぐように振るわれた刀をかわす。そして体勢を立て直そうと後ずさりをした時——俺は後ろから斬りつけられた。

——何故だ？ 敵は二人とも俺たちの正面に居るぞ？

着ていたパーカーの布地が斬り裂かれ、背中から血が噴き出す。まるで待ち構えて置かれていた刀に自分から飛び込んで行ったような感覚だった。

「つぐう！」

肉を裂かれた痛みにうずくまる俺。一体さっきから何がどうなってる？

「しっかりしろ！ シグマ！」

「ふっ。何が起きたか理解できないって顔だね。長男君」

ミケの励ましに被せるように二宮が言った。その目は羽を聳った昆虫を眺めて楽しむ子供のような残酷性で満ちている。

「まず君たちの逃走が失敗した原因、これは僕のせいじゃない。事前に僕は君の相手をする場所はここにしようと考えていたから、僕たちのリーダーに頼んでこの校庭全体を特殊な結界で囲んで貰ったんだ」

腕を大きく広げて語る二宮は舞台の上で拍手喝采を受ける司会者のようだ。

俺は痛みに耐えて無理矢理立ち上がる。こんな野郎に弱った様子

は見せられねえ。

「僕と君が入った時点でこの校庭は外部とありとあらゆる干渉が不可能になった。外から助けを呼ぶ事も出来ず、逃げ出す事も出来ないバトルフィールドになったんだよ！」

面白くて仕方がないと言う様子で笑いだす二宮。

これに入れ替わろうとして弾かれた理由は分かった。しかし今誰も居ない背後から斬りつけられたのは何故だ？

俺は慎重に痛みを感じたポイントを振り返る。すると夜の暗さではっきり分らないが、何か半透明の線のようなものがその空間を横切っているのが分かった。

「やっと気付いたかい？ 鋭利な残心サムライエッジの能力は高速の居合だけじゃない。一度刀を振った場所にはその軌跡をなぞるように斬撃が残るんだ。君は僕たちが最初に呪術を使って斬りつけた時、つまり過去の刀に斬られたのさ」

俺は最初この二宮が豹変して襲って来た時の事を思い出す。確かに付喪神の攻撃をかわしたのはこの位置だった。

「残る斬撃……てことは……」

「そう、既に何度か刀が振るわれたこの周辺は斬撃の包囲網が完成している。僕と僕の付喪神は自分の呪術を無効にする結果を纏っているおかげで食らわないが、下手に動くと君たちは細切れだろうね」
目を凝らす。半透明だったせいで気付かなかったが、二宮の言う通り辺りには曲線や直線が様々な角度で入り乱れて格子こうしのようになっていた。

完敗だ。俺はまんまとこの中学生の策略にはめられた。勝負に負けると言う事よりも知略に置いてこんな年下に負ける事の方がはるかに悔しい。

絶望に包まれ膝をついた時だった。俺と並んで地面に転がった真つ二つの石碑が目に入る。その瞬間、一か八かの逆転法が思いついた。

——そうだ。俺には式式にしきがある。

「……シグマ」

ミケが声をかけてくれたが答えるよりも今は行動が先だ。

斬撃の間を縫うようにして俺は思いつきり地面を蹴って二宮に向かって突っ込む。

「迎撃しろ！」

二宮の命令でサムライエッジが刀の柄に手をかける。しかし俺も肉弾戦をする気なんてない。

「化猫^{シュレディンガー}の二又道！」

俺は自分と二つに斬り分けられた石碑の片割れを入れ替えた。敵に向かって突進していた俺の移動をそのまま受け継いだ石の塊は凶器となって二人を襲う。アイと教室で戦った時にやったのと同じ応用技だ。

二宮はそんな俺の攻撃に特に驚いた様子も見せず、「不要だ」と短く言ってサムライエッジに構えを解かせた。そしてその言葉通り、俺が放った石碑は空中に残った無数の呪術による斬撃の中を通り、小さな細切れになって威力を失った。

「何をするかと思えば悪あがきか。君たちが物体を飛ばして攻撃するのが得意だったのは分かっているから、僕たちの周りは嚴重に斬撃の網で守ってあるよ」

一瞬見せた焦りも消え、元の余裕満点の笑みに戻る二宮。

俺は相手の言葉を見殺して地面に散らばった石碑の欠片の一つを拾う。

「……嬉しそうだな、二宮」

うつむいたまま俺は言う。

「……ああ、嬉しいよ。名門安蒜家の長男に勝ったって事は僕は相当な実力者って事になるからね」

少し首をかしげて俺の態度を不審がる様子を見せながらも、二宮は微笑んだまま答えた。

「そうか。嬉しいか。……ところで知ってるか？ ——」

俺は手に持った石碑の欠片を二宮に向かって投げる。それを見て

二宮は鼻で笑っただけだった。石ころ一つでは恐れる必要は無いと思っただろう。

小ささを活かして張り巡らされた斬撃の間を通過して行く欠片。そこで俺は顔を上げた。

「――俺は他人の不幸が大好きなんだ」

「……！」

二宮を真っ直ぐ見据えた俺の顔は満面の笑みだったんじゃないだろうか？ にやにやしてるのを誤魔化す為に今までうつむいておいたのだ。

「化猫の二又道・式式！」
シユレディンガー にしき

斬撃の間を通過して二宮とサムライエッジの顔の数十センチ前まで飛んでいた破片がいきなり大きな石の塊に変わった。いや、正確に言うなら代わったのだ。

予想外の事態に目を見開く二宮。付喪神に迎撃させようとしたがもう遅い。

「ふっ。何が起きたか理解できないって顔だね。中学生君」

俺はさっき言われた台詞を丸々返してやることにした。

――化猫の二又道・式式。シユレディンガー にしき俺が姐さんとの一週間の修行で習得したミケの新しい呪術だ。

「いい？ ウノって基本的に『同じ数字』か『同じ色』のカードを出していくゲームでしょ？」

修行初日。道場に呼び出された俺とミケに指を二本立てながら姐さんが言った。

だいたいあってると思ったので俺たちは黙って頷く。

「で、仮にミケちゃんの『入れ替え』って呪術がカードを出して積み札の一番上を入れ替えて行く、って事に対応するとすれば、『入

れ替える物体の体積がほぼ同じでなくてはならない』って条件は、

『同じ数字』のルールに対応していると私は考えたの」

ミケの依代となっていてウノの箱を開け、中身のカードを並べながら説明する姐さん。青の9の上に緑の9を重ねて見せる。

「つまりミケの呪術はウノのルールに当てはめる事が出来る、そういう事か？」

俺の解釈に姐さんは頷く。

そして今度は赤の9と赤の5を取り出してそれぞれ右手と左手に持つ。

「そこで考えてみて。だとしたら『同じ色』に対応する条件での入れ替えも可能だと思わない？」

姐さんが二枚のカードを重ねる。

——同じ色？

「つまりね——」

まだ姐さんの言葉の意図する所が分からなかった俺に悪戯っぽく姐さんは微笑みかけた。

「——大きさが違っても『同じ材質のペア』なら入れ替え可能！
それが——化猫の二又道・式式だ！」
シユレディンガー
にしき

進化したミケの呪術、式式。習得するのは楽ではなかったが、こいつは俺たちの戦い方の幅をグッと広げてくれる。

相手に十分なダメージを与えるには十分な大きさの物体を当てなくてはならない。しかし今回は斬撃の格子に守られた奴らにそんな大きい物をぶつけるのは不可能。

だから俺はわざと石碑の半分を斬撃に当てて細かくし、斬撃をかくぐれる大きさにした。そしてその破片の状態で斬撃を避けつつ相手の目前まで飛ばし、一気に残ったもう半分の石碑と入れ替えたのだ。

サムライエッジに斬られる前は元々一つの石碑。材質は完璧に同

じだから式式を使うにはもってこいだった。

そして半分になったとは言え大きな石の塊だ。結界破ってノックアウトするには申し分ない大きさだろう。

「勝負は最後まで分らないもんだな！」

俺が高らかに勝利宣言をしたのと、重い石の塊が二宮とサムライエッジの二人の顔にまとめてぶつかって鈍い音を立てたのが同時だった。

そのまま後ろに吹っ飛んで倒れる二人。石碑はゴロゴロと校庭を荒っぽく転がって止まった。

——安^{あんざん}赫^{しぐま} 司^{しゅ}限^{れい}&化^{しゅ}猫^{れい}の二^に叉^{のみ}道^や VS 二^に宮^{のみ} 亘^{わたる}&鋭^{さむ}利^{らい}な残^え心^{っし}
——勝^{しょう}者^{じや}・シグマ。

十四つ。 夜戦、第二ラウンド

——湯島天満宮境内、アイ。

「うおらああああ！」

私は渾身の力を込めて巨大な相手の付喪神の額にかかと落としを叩きこんだ。結界で体を強化した上で、自分にかかる重力も通常の三倍にして。

しかしそれでも赤鬼のような姿をした付喪神は一瞬ふらついただけで、すぐに私めがけて尖った爪を伸ばしてくる。爪と言ってもそれぞれが中華包丁くらいの大きさがあるのだからたまったものじゃない。

「ギギギギギ」

鬼の口から禍々しい唸り声が漏れる。どうやらこの付喪神は言葉を話すだけの知能は無いらしい。

私が結局逃げ込んだのは学校の近くにある神社の境内だった。学業の神様が居ると全国規模でそれなりに有名で、受験シーズンには遠くから多くの学生が参拝しに来る。

思いつきり戦っても迷惑がかからなくて広い場所って言ったらこの他には思いつかなかったのだ。でも考えてみればこの神社だって気を付けないといろいろ被害が出てしまう。

眼鏡をかけた中学生っぽい敵の依巫は離れた所から私と赤鬼の戦いを傍観しているだけだ。自分が結界を使って戦いに参加しなくても勝てる自信があるのだろう。

しかし実際この付喪神は強い。体が大きいとか馬鹿力があるし、更には異常なまでのタフさだ。さっきから頭や首といった急所を狙って蹴りを入れているがほとんど効いている様子は無い。結界は破りながら蹴っているはずなのだが、この付喪神自体が肉弾戦に特化

していて打撃には強いのだろう。

しかし敵の動きは鈍重。私にかかる重力をカットしてスピードに特化させれば攻撃を食らう事はまずない。となればお互い無意味な攻撃をしあうから持久戦になる。

——持久戦、か。

私はこの間隙を切らてシグマに負けた時の事を思い出す。あの時は本当に悔しかった。

でも今の私は違う。小雪さんの稽古のおかげでかなり禊の総量は増えたはずだ。それに勝利への布石はもう用意してある。

「ギグガアア！」

鬼が大きく振り被って私めがけて腕を薙ぎ払う。それを私は軽々かわして繰り出されたその右腕の上に乗ってみせた。

「うふ、そんなに死にたいの？」

大分自制は出来るようになったがやっぱり通り魔をやっていた頃感覚が抜けきらない。私を見失ってキョロキョロする鬼の耳元まで私は腕を駆け上って囁いた。

「ギガ？」

「手加減なし」

私はこつちを向いた鬼の鼻に足の重量を十倍にした状態で回し蹴りを当てた。骨が碎ける音がして真っ赤な血が飛び散る。

流石の鬼もこれは応えたらしく、大きくのけ反って神社の石畳の上に倒れた。

「月夜の祭囃子」
ルナティックハート

私はそのまま鬼の胸板の上に立って鬼に重力を数十倍にする呪術をかける。こうして居れば鬼は増幅された自分の体重で立ち上がれないはずだ。

——この時を待っていた。

「今よ！ ルナ！」

「分かってる！」

ルナは私の声に答えると同時に隠れていた木の上から眼鏡の依巫

に向かって飛び降りる。そして杵で頭を殴打！

——私がずっと鬼の相手をしていたのは、ルナが敵の眼鏡少年へ死角から近寄る為の時間稼ぎだ。こんなタフな奴を倒すよりも、貧弱そうな中学生をノックアウトする方が早い。

よし、これで依代さえ奪えば——

「あれ？」

ルナが首を傾げる。彼女が振り下ろした杵は眼鏡少年の頭から数十センチ離れた空中で止まっていた、まるで見えない壁がそこにあるかのように。

「何か不思議な事かね？」

少年はルナの方を見ようとせず眼鏡の位置を直しながら言う。

「この四井^{よつゐ} 博^{ひろし}がまさか付喪神と離れた所に居る自分自身の防御を怠^{おこた}るとでも？」

防御……まさか結界？

普通私たちが纏う結界は目には見えないし触る事も出来ない。結界で防御力が高まると言うのもそれが鎧として機能するからじゃ無く、結界によって身体能力が上がるからだ。

しかしこの少年の結界は物理的な鎧としての役割を果たしている。こんな事が可能なんだろうか？

「どういう事よ？」

「付喪神の呪術は進化できる。それと同様に我々依巫の結界も進化すると言う事さ。僕は自分の戦法に合わせて何物も触れる事の出来ない物理的な結界を完成させた」

呪術の進化——さっき修行の後シグマが言っていた事だろうか？

しかしどうしよう？ 私たちの呪術はあくまで重力操作。強力なサポートにはなるが攻撃自体はどれも打撃に頼らざる負えない。

本当、嫌な相手。だったらやる事は一つしかない。

「そのムカつく結界ぶっ壊すわよ！」

「言われなくても！」

いつもの通り「分かっている」といったそっけない口調で答えた

ルナは思いつきり杵を振り被って四井と名乗った少年を殴る。少年の方は避けようともせず、ただ立っているだけだ。

ルナティックハート

「月夜の祭囃子！」

しかし、重力で威力を増やした杵の一撃も厚い結界に阻まれて四井まで届かない。でも諦めずに何度もやればいつか破れるはずだ。

「そんな無駄な事をしている暇があるのかい？」

小さな体で何度も杵を振り下ろすルナを横目で見ながら四井が言う。

「そろそろこっちの付喪神もまた戦わせてもらうよ？」

バツカスモンク
「酒神の武僧」

途端に私の足の下で伸びていた付喪神が跳ね起きるように立ちあがった。

「ゴギガアアア！」

振り払われた私は慌てて重力を緩めて安全に着地する。

考えてみれば四井が付喪神の名を呼んだのはこれが初めて。つまり今までの怪力は威力が若干劣る無声発動だったんだ。

さっきまで必死に戦っていた相手が全力では無かったと思い知らされて、私は挫けそうになった。バツカスモンクが起き上がった今、四井だけを集中的に狙っているのはこっちがやられる。

逃げる、という選択肢が頭の中でチラつく。年下でも明らかに今の私で敵う相手じゃない。

——でも、そんなの……

「私の性に合わないんだあああ！ 月夜の祭囃子！」

ルナティックハート

自分への重力を完全に解除して私は地面を駆けた。重さゼロ。私の中の最高速度状態だ。

そのスピードを保ったまま私はバツカスモンクを足、腹、肩、顔の順番で蹴りつけて行く。全て合わせて一秒以内、インパクトの瞬間には全て足の重量を跳ねあげて威力を高める。

「食らえ！ 食らえ！ 食らえ！ 食らえええ！」

何だろうか？ 感覚が麻痺したような感じた。考えるより先に口と体が動いて自制が効かない。

ビクともしないと分かっているながら、私は本能の赴くままに巨体の付喪神を蹴り続けた。なんだかとっても気分が良い。

——マズイ。戻りかけてる。

この一週間抑えていた感情が爆発していた。もう二度と人を傷つけない為に封印したつもりだった感情。

「戦うって楽しいいいいい！」

この頑丈な相手を倒して屈服させたい。私の方が優れていると思ひ知らせたい。そんな欲望で体中が満たされ、私は攻撃するのを止められなかった。

「見苦しいよ、大府愛。やっと効き目が出てきたようだが、少しは落ち着いたらどうだい？」

四井の声で我に帰った。神社の屋根の上に着地。

あれ、どうしてだろう？ 体が熱い。それに平衡感覚がおかしいような……。

「君は一つ勘違いしている」

四井が屋根の上の私を見上げながら言う。

「僕の付喪神、酒神の武僧バツカスモンクの能力は怪力だけじゃない。こいつは常に口からとある化学物質を吐き続けているのさ」

「……化学物質？」

私は回らない頭で考える。まさか毒たぐいの類か？

フラフラして立っていられなくなり、倒れこむ私。それを見て四井は満足げに笑った。

「——アルコールだよ。」

「アルコール？ お酒とかに入ってる？」

もしかして今の私は酔っている状態なの？ 確かに顔は火照ほてるしフラフラして真っ直ぐ立ってられない。さっき気分が妙にハイになったのも？

「アルコールは実に単純な構造だ。水素と酸素と炭素、自然界に満ち溢れているこの三つだけで作れる事が出来る。バツカスモンクは体内で臭いが少ない特殊なアルコールを精製して、戦う相手に向かつ

て常に吐き続けているんだ」

全然気が付かなかった。でも酔っぱらったくらい私は平気よ……
そう思って立ち上がるうとしたが無理だった。頭がクラクラして体がまったく動かない。なんとか呪術を使おうと思ったが、意識を集中する事も出来ない。

嘘。たかがアルコールくらいで？

「よく勘違いされるがアルコールにも十分な毒性はある。君はかなり激しい運動をアルコールが充満した空気の中でしたからね。約300グラムの致死量ぐらいいは余裕で吸いこんでいるのだよ」

眼鏡をまた直して宣言する四井。そして彼の付喪神に命令する。

「その女はもう戦闘不能だ。チビを捕まえたまえ」

「ギガアアア」

のしのしと歩いてルナを追うバツカスモンク。依巫の私が戦闘不能となった事で呪術が使えないルナはいとも簡単に捕まってしまった。

「何すんのよ！」

握りしめられたバツカスモンクの手の中でもがくルナ。その光景を私は何も出来ず、ただ屋根の上で倒れたまま見ていた。

——悔しい。

敵を見た時私は一気に力押しするタイプの付喪神だと思い込んでしまった。しかし実際には吐き出すアルコールの毒性で少しずつ相手を蝕持^{はくし}久戦型。まんまと相手の策に私ははまってしまった訳だ。

相手に踊らされていた自分が悔しい。一瞬でも敵の術の作用で戦闘狂に戻りかけた自分が悔しい。

——今ルナが苦しんでいるのに立つことすら出来ない自分が悔しい。

「ア……イ……」

苦痛で顔を歪めながら私の名を呼ぶルナ。しかし私はそれに答えて名前を呼び返す事も出来ない。

ドクドク。ドクドク。血管を通してアルコールが全身に回るのを

感じる。

「気を付けたまえ。酒に溺れるとろくな事が無い」

段々呼吸が深く、ゆっくりになって行くのを感じた。そして視界がぼやけて意識が遠のき……。

私は抵抗できないままバッカスモンクのもう片方の手に握られ、ルナと一緒に捕まってしまう。

トドメを刺さずとも私はアルコール中毒で勝手に死ぬと考えたのだろう。四井は神社の出口へ向かって行き、ルナと私を握ったままのバッカスモンクもその後を追う。

——大府^{だいふ} 愛^{あい}&月夜^{ルナティックハート}の祭囃子 VS 四井^{よつ井} 博^{ひろし}&酒神^{バッカスモンク}の武僧
——勝者・四井^{よつ井}

「これからは上級生への口の訊き方は気を付けな！」

倒れた二宮を指差して俺は言った。背中の傷は激しく痛むが勝利は勝利である。

流石に死んではいないだろう。後処理をするのが面倒だったので、俺は気絶しているだけだと決めつけて校庭を出ようとした——が、出られない。見えない壁に邪魔される。

「……どういう事でい？」

ミケが俺の肩で首をかしげる。俺もてっきり二宮を倒せば校庭を囲んだ結界は解除されると思っていた。

その時だ。背後から強烈な殺気を感じたのは。

「まだ終わりじゃないからだ！」

振り返ると頭から血を流した二宮が居た。その目は怒りで赤く燃えている。

「呪術を進化させたのが自分だけだと思ふなよ！ 使うぞ！ 式式

だ！」

「なっ！ 式式だ？」

思わず叫んだ。こいつらの呪術にも次の段階が！？

俺たちの攻撃によって頭の笠が取れ、素顔が露わになったサムライエッジ。その無表情で和風な顔立ちが一気に残虐な笑みで満たされた。

そして校庭の真ん中に張り巡らされていた無数の斬撃が、釣り糸で引っ張られるかのようにサムライエッジの腰の刀に集結する。それに合わせて彼も刀を抜き、俺たちへ向かって肩の高さで突きだすように構えた。

サムライエッジ
「鋭利な残心・式式！」

辺りに突風が巻き起こり、俺とミケは思わず顔を覆う。

「ヤバイぜい！ あいつに集まった禊の量が半端じゃねえ！」

ミケの叫び声が突風のせいで聞き取りにくい。そして風が止む。

……付喪神の姿が変化していた。

体中を覆う赤を基調とした立派な鎧は戦国武将を思わせる。そして手に構えた刀は持ち主の身の丈程もあり、太さも数倍に変化していた。

「どうだ！ これが俺たちの式式、壹式の状態で展開した斬撃の威力全てを一か所に集めて刀とする」

額から血を垂らしながら高笑いする二宮。

ただでさえ切れ味抜群だった日本刀。その数十倍の威力の刀……敵うわけがねえ！

「勝負は最後まで分らないんだっただな？ 長男君」

巨大な高速の刃が俺たちに向かって振り抜かれた。

あんざん
——安蒜 司隈&化猫の二又道 VS 二宮 亘&鋭利な残心
にのみや わたる サムライエッジ
——勝者・二宮……

「そこまでだ」

突然誰かの声がした。

恐怖で閉じていた目を恐る恐る開けると俺たちの首はまだ体とくつついている。あのドデカイ刀に斬られたはずだったのに……。

見ると刀は薙ぎ払う途中で止まっていた。そしてその真正面に立って念力で押し留めるように手を伸ばしている男――。

「桑原！」

だらしない髪にダルそうな目つき。俺の担任の桑原だった。何故こいつが？

「おいおい、教師を呼び捨てにするのは感心しないぞ」

こつちを振り向きながら言う桑原。見ると桑原の周りには薄らと光のようなものが漂っていて、それが壁となって刀を抑えているようだった。

――まさか、あれは結界？

物理的に存在する結界なんて聞いた事が……と考えた所で気付いた。そう言えばさっきからこの校庭を覆っている奴もそうじゃないか。

「何でお前が？ てかどうやってこの結界を越えて入って来た？」

思いついた順番で口に出した。

「……質問の多い奴だな。先生は今頑張ってるんだからそこで応援してくれ」

全然頑張る気の無い表情で言う桑原。こいつの言葉はどこまで本気でどこまで冗談だか分からない。でも一つだけはっきりした事がある。

――俺は桑原に助けられた。

「……っ！ ここで邪魔が入るか」

苦々しげな顔をする二宮。

「しかも式式になったサムライエッジの刀を止める程の結界とは……おっさんタダ者じゃないな？」

「先生と呼べ、先生と。そして俺はただの高校教師だ」

そして少しだけ真剣な表情になって二宮を睨みつける。

「だから教え子は全力で守らせてもらうぜ」
俺はそのあまりの迫力に一瞬寒気がした。なんで桑原が依巫の術を使っているのか分からないが、こいつは格が違う……

「何だね？ 君は」

神社の鳥居を目指して付喪神と歩いていた四井は足を止めた。
彼の見つめる先には一人の人物。ハイネックの服にスラッとした体。清楚な雰囲気顔がショートカットと綺麗に調和している。

「……その子たちを放しなさい」

感情を殺した声でその人物——白川小雪は言った。

その言葉には普段の温和な彼女からは想像もできない迫力があり、私も含めその場の全員の顔を冷たい汗が伝う。

「……小雪さん……」

逃げて！ そう言おうと思った。それが無理ならせめてこの付喪神の能力だけでも教えようとしたが、呂律が回らない。

「断る。君は彼らの仲間かね？」

掴まれた私たちを見上げながら言う四井。返答次第では容赦しないと言う雰囲気だ。

それにもまったく表情を変えず、小雪さんは淡々と答えた。

「いいえ、ただの家政婦です」

「ならそこを早く退いてくれたまえよ」

四井が合図してバックスモンクが歩き出した瞬間だった。

何かが小雪さんの横から放たれ、バックスモンクの両足が凍りついた。

バックスモンクは振り払おうと足に力を込めたが、地面に固定された両足はどんなにもがいても自由にならない。

——もしかして……小雪さんの付喪神の呪術？

「もう一度だけ言います。その子たちを放しなさい」

そう言う小雪さんの手には紺色の光を放つ青い宝石の付いた指輪が輝いていた。

——安蒜本家屋敷。

少年は非常に満足していた。作戦通り安蒜小町は眠りに落ちていく。

少年が土産として持って来たのは仲間の四井の付喪神を使って作った特別アルコール度数の強い酒。小町は大酒飲みだという情報を手に入れていたが、いとも簡単に泥酔状態に陥った。

「うーん。何だかもう酔っちゃいました。ごめんなさい、お使いさん」

居間で適当に酌をしてやりながら酒を飲ませるだけで良かった。すぐに彼女は自室へフラフラと去って行ったのだった。

——これで邪魔者は居なくなった。

一人になった居間で少年は考える。

——目的の物は地下にあるはずだ。そしてその封じている場所への道がどこかにあるはず……。

少年は床を見るようにしながら瞬きを繰り返す。そして見つけた。ここからでもはつきり分かるくらいに地面の下から迸る紺色の強い光を。

少年は光の真上を目指して部屋を出る。そして着いたのは一つの部屋の押し入れの前。

——ここの下か。

「そいつはあんたには扱えないよ」

突然声をかけられる。

背後に小町が立っていた。和服で正装した上に羽織りをした姿は威厳で満ちている。

――何故？

彼女の方に向き直る少年。畳敷きの室内で二人の視線が火花を散らす。

「ふっふっふ。私を酔わせたけりゃ酒蔵ごと出張してくるんだね」
不敵に笑う小町。さっきまでの酔っぱらった様子は微塵もない。

「名乗りな！ あんた九州分家の使いなんかじゃないね」

「何を言ってるんですか？ 僕は確かに土産を渡されて……」

しらばくれる少年にピシヤリと小町が言う。

「無いんだよ。九州分家なんてうちの一門にはね」

「御冗談を！ 安蒜一門は全国に分家があつて……」

「正確には今は無い。あそこは過激な連中が多いから、私の本家乗っ取り計画の邪魔にならないように先月潰しておいた」

「……そうですか」

少年は人の良さそうな作り笑いを捨て、狡猾そうに唇を持ち上げた。

「ご挨拶が遅れまして申し訳ありません。僕は華麗なる聖ケルビム学園中等部所属、一柳 道満いちやなぎ どうまん。この安蒜家に封じられている物を頂きに参りました」

一柳と名乗った少年は学ランの内ポケットに手を入れ、紺色の光を放つ鍔はやりを取り出す。

応じて小町も懐に手を入れると以前、シグマと再開した日に話しかけていた手帳を取り出した。そしてこちらも紺色の光を放ち始める。

「まったく、こんな子供が相手なんて私もなめられたもんだね」
困ったもんだ、と小町が呟いた。

「さて、ガキ同士の喧嘩はここら辺でお終いだ」

校庭で二宮とサムライエッジを睨みつけ、桑原が言う。

「良い子はとっくにお家に帰っている時間ですよ」

鳥居の真下で手に付けた指輪を突きだしながら言う小雪。

――そして。三人の言葉が重なる。

「ここからは大人の時間だ！」

十五つ。 大人の時間

「貴様……どうやってこの結界の中に入って来た？」

一旦サムライエッジに攻撃を止めさせ、険しい顔をして言う二宮。

「ああ、これか？ 結界張れる奴が居れば解除できる奴も居るってことさ」

なんてことは無い。そう言ってヒラヒラと桑原は手を振った。

試しに俺が背後にあるはずの結界に向かって手を伸ばしてもまったく手ごたえが無い。確かにさっきまであった見えない壁は消えている。

「……まあ良い。次の相手がおっさんなら、さっさと付喪神を出しな」

手に持った依代のカタナナイフを二宮が挑発するように桑原に向けた。おれに一撃食らわされた怒りを全て桑原にぶつけて発散するつもりらしい。

——桑原の付喪神。

さっきから高位な依巫にしか出来ないような事をしまくっている以上、桑原も付喪神を操る依巫なのだろう。となれば当然特定の付喪神を持っているはず……。

しかしおかしな事に桑原は一向に依代を取り出す様子はない。俺は瞬きしながら探ってみたが、桑原の体のどこにも紺色の光を放つ物は見つからなかった。

「おい、桑原！ お前付喪神……」

「ああ、持っていない。そして先生と呼べ、先生と」

「持っていないって、んなら敵うわけが！……」

「良いからお前は黙って見てろ。そして先生の雄姿を二百パーセントくらいに美化してお姉さんに伝えるんだ、良いな」

そして下手糞なウイंक。何を考えているのか分からないから不気味だ。

姐さんの話題になったので以前問い詰めようとしてはぐらかされた先を訊こうとした時、

「喋り過ぎだ——」

殺気を感じて敵の方を見ると、鎧を纏って強化されたサムライエツジが大きく刀を振り被った所だった。狙いは真っ直ぐ桑原の頭。

「——死ね！ 鋭利な残心！」

「お？」

桑原が見せた反応は少し驚いたような顔をしてそちらを見ただけだった。

「危ない！」

俺の叫びと同時に刀は桑原の頭を斬り裂いて——

ブヨン。

——いなかった。

巨大な刀はまたも桑原の前の空中で止まっていたが、今度は少しばかり様子が違う。さっきのように光が刀を抑えつけているのではなく、サムライエツジと桑原の間に出現した“何か”が刀をかわりに受けていたのだ。

“何か”の色は薄茶色が入った半透明。特に模様は無く、弾力のある素材で出来ているようで振り下ろされた刀が中に沈み込んでいる。言うなれば巨大な風船人形の掌てのひらのようだった。

そう、“何か”は手の形をしていた。しかしこれが仮に何かの手だとしたらとんでもない事だ。何しろ直径が七、八メートルはあるのだから、手の持ち主は想像も絶するような大きさになる。

そして恐る恐る上の方を見上げた俺は見た。——巨人である。

昔読んだ本に世界の果てで天空を持ち上げ、支えている巨人の話があった。今俺の目の前に居る巨人はまさにそれが出来そうな程大きい。冷静に見積もっても五十メートル以上の高さは確実だ。

巨人はずんぐりとした体型で、足は太いが短くその付け根辺りは

胴体の中で一番太い。そして頭まで上って行くにつれて緩やかに細くなって行く、いわば三角形のような体型をしていた。人間だったら酷いメタボリック体型だ。

全身は手と同様に薄茶色の半透明。頭は人間の顔と言うよりはただ潰れた球体に乗っているという雰囲気、顔のパーツは二つの黄色く光る丸い目だけ。それ以外は耳も口も鼻もない。

——そんな巨大な“何か”が手を伸ばし、桑原を刀から守っていたのだ。

「く、く、桑原あ！ 何だよこれ!？」

「だから先生だと……まあ良い、見ての通りこいつは付喪神だ」

付喪神……こんなビルぐらいデカいのが!？」

ていうかそれ以前の疑問がある。

「貴様、付喪神は持っていなかったはず……」

二宮が代わりに言ってくれた。突然現れた巨人に相手も混乱している。

そう。桑原は依代は持っていなかったはずなのに、今ここに彼を守る付喪神が鎮座している。

「……御名代みなしろかい」

俺の肩でずっと成り行きを見守っていたミケがポツリと言った。

「ミナシロ？」

「とっくの昔に根絶やしになったと聞いていたがな……」

俺の問いを無視するミケ。それくらい目の前の事態に驚いていたのだろう。

桑原はヨレヨレのスーツのポケットに手を突っ込み、タバコの箱とライターを取り出して吸い始める。余裕たっぷりだ。

「良く知ってるな、猫の付喪神」

「そりゃあな。史上最悪の依巫一族の事くらい知ってらあ」

——史上最悪の依巫？

ふうー、とタバコの煙を吐き出しながら桑原が説明を始めた。

「俺の家系、桑原家はこの地でお前ら安蒜家と対立していた依巫の

一派でね。生まれつきの特殊な才能としてあらゆる物体の意思の名前が分かるんだ」

「物体の意思？」首をかしげる俺。

「そう。俺たちが付喪神と呼んでいる者だ」

それって、つまり……

「物体の意思は依巫と会話が可能になるまで育たなければ付喪神にはなれない。名前が分からなきゃ依巫も呪術の使いようがないからな。しかし俺たち桑原家は無理矢理その名前を読み取り、まだ付喪神になるには早い物体でさえも一時的に付喪神として扱えてしまう。それが御名代^{みなしろ}の力だ」

……何でも付喪神にして操れる、って事か？

正直言っただけ信じられない。ただの三十路手前の教師だと思っていた男が依巫で、しかもこんな特殊な力を持っているなんて、信じろと言う方が無理がある。

それにしてもこの巨人が桑原が無理矢理呼びだした付喪神だとしたら、依代になっているのは何なんだ？

「そんなふざけた話があるか！ 即席で作る付喪神なんてそんな馬鹿な……」

最早優等生ぶった笑顔を浮かべている余裕は無いのだろう。茫然とした顔つきになった二宮。

桑原は駄々をこねる子供を前に途方に暮れた父親のように後頭部をかき、

「あんまりうるさい声を出すな。こいつはこの間体内で乱闘が起きたから不機嫌なんだぞ」

体内で乱闘……一つだけ思い当たる節があった。俺とアイの戦いである。

と、言う事は……見ると高校の校舎は薄らと紺色の光を放っている。

「安蒜、挨拶しとけよ。お前がいつもお世話になっている校舎の付喪神さんだ」

うううううう、と聞こえるか聞こえないかギリギリのラインの低い声が上から聞こえてきた。俺はあまりのスケールに言葉を失い、ただヘラヘラと曖昧に微笑んだだけだった。

まさかよりによって校舎を付喪神化するとは。桑原はやはりタダ者じゃない。

「ぷ。ぷはははははは！」

笑ったのは二宮だった。

「馬鹿じゃないの？ 付喪神は依代を壊されたら終わりなんだよ？ こんな馬鹿デカくて動かせない依代なんて狙って下さいつて言ってるようなもんだよ！ ぷははは！」

二宮の言う通りである。結界である程度守れるとは言え、サムライエッジに校舎を壊されたら桑原の負けだ。

「行け！ 鋭利な残心！」
サムライエッジ

校舎に向かって刀を振り上げるサムライエッジ。今の奴の剣の切れ味は数十倍に跳ね上がっているはず。こんなコンクリートの校舎なんて簡単に……。

しかし当の桑原は相変わらずやる気の無さそうな顔のまま。

「やめておけ。早く諦めて家に帰っとけ」

「ははは！ 誰がお前の言う事聞くとと思う？」

「……聞きわけの無いガキだな」

その言葉を放った一瞬だけ、単調だった桑原の口調が陰しくなった気がした。二宮も俺と同じ事を感じたのだろう、不審がって尋ねる。

「……どうした？ その付喪神の特殊な能力でも使うのか？」

「特殊な能力ねえ」

答えるのも面倒くさいという様子で髪をいじる桑原。

そして、ついに彼は自分が作り出した付喪神の名を呼んだ。

「大太郎法師」
アトラス

その瞬間ずっと動かなかった巨大な付喪神が地面を蹴って空中に浮かんだ。その時の衝撃で辺りは大きく揺れ、校舎を斬りつけようとしていたサムライエッジもバランスを崩す。

そして空中に浮かんだアトラスはそのまま前のめりに体を傾け、巨体で校庭の大部分を覆うように倒れ込んでいく。

「な……」

あまりの事態に言葉が続かない二宮。それもそのはず、アトラスは彼めがけてうつ伏せに倒れ込んで来ていたのだから。

「圧倒的な大きさ、質量、その他に何か能力が必要か？」

ズシューーーン！ ……。

アトラスが腹から着地して、さっきの数倍はあろうかと言う地震揺れが辺りを襲った。間違いなく地震で言えば震度6は超えている。

——そのまま押し潰しやがった。

大胆と言うかシンプルと言うか、コメントし辛い決着だった。俺とミケは二人揃ってポカンと口を開けたまま。

揺れが収まると辺りは静寂に包まれた。桑原は表情を変えないまま黙っているだけだし、うるさくまくしたてていた二宮の声もしない。

どうして良いか分からず唖然としたまま巨人が校庭に倒れこんでいる光景を見ていると、半透明のアトラスの体を通して下敷きになった何かが目に入った。

「……く、……こんな事で……」

まだ二宮はしぶとく意識を保ったままだった。サムライエッジが主を守るようにのしかかる巨体を支えて僅かな空間を作り、そこにうずくまって二宮は生き延びていたのだ。

「何故だ！ お前はそこの長男の家とは対立しているんだろ！ どうしてそいつの見方をする！」

冷静さを完全に失った二宮の姿は醜かった。相手を罵倒し、目の

前の現実を受け止めようとしたくない見苦しい幼稚さのせいだ。

ふーっ。タバコの煙もう一度だけ大きく吐き出し、吸殻を土に落として踏みつける桑原。

「お前にはまだ忠告してなかったか」

一旦言葉を切って二宮の憎しみに満ちた目を見つめ返す。

「俺は聞きわけのない子供が嫌いなんだ」

その瞬間、二宮を守っていたサムライエッジが消えた。二宮の襖が底をついたのだ。

そして、辺りは再び静寂に包まれた。

——安蒜 あんざん 司隈 しぐま & 化猫の二又道 VS 二宮 にのみや 亘 わたる & 鋭利な残心

乱入により、

——勝者・桑原 くわばら 剛 つよし & 大太郎法師 アトラス

「……一体何をしてくれたんだね？」

鳥居の下に佇 たたず む小雪さんを睨みつけながら四井が言った。眼鏡越しのその目にはあからさまな敵意が宿り、炎を燃やしている。

「さあ？ 答える義理はございません」

あくまで丁寧 ていねい に、丁寧ながらもトゲのある言い方で小雪さんは言い返した。

まわりつuitた氷を振り払おうともがいていたバツカスモンの足がやっと自由になった。私たちを握りしめたままのそいつはそのまま依巫 より を倣 なら って小雪さんを睨み、低く唸り声を上げる。

「ギギギギ……」

説明を聞いた今は、少しでもこの付喪神の口が開くたびにそこから何か薄らと妙な匂いが噴き出るのが分かった。アルコールが辺りの空気を満たし、このままでは小雪さんも私のように行動不能に陥ってしまう……。

「それより早くお二人を解放して頂けませんか？」

「だから断ると言っただろう。酒神バツカスモンクの武僧！」

四井が名を呼んでバツカスモンクが小雪さんに襲い掛かった。鋭い爪が付いた手が彼女めがけて振り下ろされる。

テルミットチル
「凍てつく花火師」

ピキピキ……ピキ。

小雪さんが叫ぶと同時に銀色の何かが彼女の隣から迸り、振り下ろされるバツカスモンクの腕を包むとその腕が肩から凍りついた。固まってしまった腕は彼女まで届く事は無い。

「……また氷……やはり付喪神か」

不愉快そうに四井は小雪さんの隣にいつの間にか立っていた人物を見た。

深い海のような青い髪をした女性だった。その青は小雪さんが指に付けた依代の指輪の宝石と同じ色で、その髪は雑に頭の後ろで結い上げられている。上半身には胸に晒さらを巻いただけで肩もへそも全部丸見え、腰から下は暗い色の生地で作られたズボンのような物を履いている。お祭りで神輿を担ぐ大人たちが着ているような、あんな感じのだ。

足には足袋たびと草履ぞうり。手には忍者が付けるような薄い籠手こてを装着し、腰布にはいくつも黒っぽい団子のような物がくくりつけられている。――あれって火薬玉？

「うちが相手や、デカブツ」

ドスの効いた関西弁でその付喪神が言った。自分の数倍もある体躯の持ち主相手にまったく物怖ものおじしていない。

――これが小雪さんの付喪神。

テルミットチル
「凍てつく花火師！」

テルミットチルは小雪さんの声に応じて腰の火薬玉を一つ掴み、

バツカスモンクの足もと目がけて投げつける。

すると黒い火薬玉は空中で揺らめく銀色の何かに変わり、矢のような早さで敵の足に当たるとそれを再び氷漬けにした。あれは煙……いや、どちらかと言えば炎に近い揺らめき方だった。

しかし、いくら付喪神自体を圧倒していてもこの辺りの空気が体の自由を奪うアルコールで満ちて行く……早く小雪さんに注意しないと、彼女もまた四井の戦略の餌食に……。

テルミットチル
「凍てつく花火師」

もう一度呪術を使う小雪さん。付喪神が放った冷気が私とルナを掴んでいる腕の付け根に当たって凍らせる。

「ギガアアアア！」

氷を振り払うために私とルナを放すバツカスモンク。地面に投げ出された私たちの元へ小雪さんが駆け寄る。

「大丈夫でしたか？」

「……息を吸っちゃダメ……この辺りはアルコールで……」

私は精一杯の声を振り絞って彼女に伝えようとした。蚊の鳴くような声だったけれど、小雪さんにはちゃんと伝わったようだ。

「冷気を操る付喪神か。やっかいそうじゃないか」

明らかに嘲りの色を込めた口調で言う四井。

彼の付喪神はどれほど攻撃されても持ち前のタフさで問題無い。

彼らの本当の武器はバツカスモンクの口から放たれるアルコールなのだ。

「冷気？ 勘違いしないで下さい」

四井の言葉を否定する小雪さん。

——え？ テルミットチルの呪術は冷気じゃないの？

「そうや！ うちが使うのは“冷気”やのうて“火い”や！」

無声発動で呪術を使い、いくつもの火薬玉をバツカスモンクの顔に投げつけるテルミットチル。軽やかな笑顔を浮かべ、彼女は勝利を確信していた。

「火？ 触った物を氷漬けにするのにかね？」

四井が怪訝な顔をする。

その間も小雪さんは私たちを引きずってなるべく敵から引き離そうとしていた。戦いの方は完全にテミットチルに任せたようだ。

「火いなんや、ただ温度が氷点下なだけでな！」

空中で火薬玉が弾けて迸る銀色の揺らめき。改めて見てみれば確かにその動きは炎だった。

小雪さんが優雅に微笑みながら後を受ける。

「そう、凍てつく花火師テルミットチルが操るのは銀色の冷たい炎。性質はあくまで炎です」

「炎……あ！」

初めて四井が焦りを見せた瞬間だった。私にも次に何が起こるかは容易に想像できた。

敵に背中を向けながら、わざとらしく呟く小雪さん。

「忘れていました。アルコールってよく燃えるんでしたね」

ドカーーン！

銀色の炎がバッカスモンクの吐き出したアルコールに引火して大爆発を起こす。

それは何とも奇妙な光景で、映画のスタントシーンのように一瞬で四井と付喪神を含む辺りの物が炎に巻き込まれ、それら全てが次々と爆発の中心から順番に凍っていくのだ。

爆発の威力は四井の自慢の結界をもってしても防げる規模ではなかったらしく、無敵の防御は吹き飛ばされて驚愕の表情のまま彼は氷漬けになった。

「さあ愛さん、ルナさん。夕食の準備が出来ていますが、屋敷でご一緒しませんか？」

何事も無かったかのように笑顔で言う小雪さん。

正直私はあの赤鬼のような付喪神よりもこの人の方が怖い。

——大府だいふ 愛あい&月夜ルナティックハートの祭囃子 VS 四井よつゐ 博ひろし&酒神バツカスモンクの武僧
乱入により、
——勝者・白川しらかわ 小雪こゆき&凍テルミットチルてつく花火師

十五つ。 大人の時間（後書き）

皆さん、あけましておめでとうございます。

今年も頑張って更新していくのでどうぞ大江戸でいばあていっど、並びに門 九郎をよろしくお願いします。

お暇な方はお年玉としてweb拍手送って頂けると嬉しいです。

十六つ。 安蒜小町は戦わない

——安蒜本家屋敷・封印の間。

「子供とは言え僕は荣誉ある聖ケルビム学園中等部のトップを任された者。あまり舐めてかからない方が良いでしょう」

二十帖ほどの広さの部屋の中、小町と一柳は向かい合っていた。

部屋にはこれといった特徴は無く、家具も一辺の壁に二つ古い桐^き箆^{りたんす}が置かれているだけ。人が生活する為には作られていない、まるで何かを閉じ込めて置く為のような雰囲気を漂わせている部屋だった。

天井から釣られた電灯の光が妙に強く、向かい合う二人の畳に映る影が不気味に強調される。一流と一流、他とは一線を介する依巫同士が火花を散らしていた。

「さあね。そんな学校の名前聞いたことは無いが、どうせバックにあるのは『教団』だろ？」

手に持った革表紙の手帳のページを無造作にめくる小町。

「お察しの通り、我々は教団が所持する学園に教団の戦力として集められた依巫です。そして今回教団があなた方安蒜一門に宣戦布告する事になったので、刺客として送り込まれました」

依代の鋏をくると指で回し、より一層紺色の光を増やす一柳。

「あなたの可愛い弟さんとそのお友達の前にも僕の仲間が行っています。無事だと良いですね」

そして目を細めて口元を吊り上げる。それは普通の人間がやれば「笑う」という行動になるのだろうが、小町には目の前の少年が笑ったようには見えなかった。どちらかと言えば「蔑^{さげす}む」に近い何かだ。

電灯の明かりが揺れる。部屋全体を無数の見えない何かが蠢^{蠢い}いているような、二人を中心に二つの小さな低気圧が存在しているよう

な揺れ。

「心配なら要らないよ。あの子たちには戦い方を教えてあるし、いざという時の為の安全装置もある」

小町は三人の子供と二人の仲間を思い浮かべる。

ハジメはちゃんと自分の付喪神がずっと傍に居た事に気付いただろうか？ アイは破壊衝動に吞まなかったか、シグマはちゃんと式式を実戦でも使えたか？

いろんな不安が小町の頭を過ったが、生きているかどうかはまったく心配していなかった。彼女には、シグマたちの世代はいずれ自分や小雪の世代を超えて行く、と言う自信があったからだ。

その事を頭の中で再確認し、小町は言葉を続けた。

「それよりあんたは自分の心配をしな」

小町の目が鋭くなり、一柳を真っ直ぐ射抜く。

「それには及びません。僕の強力な付喪神には誰も敵わないのですから」

「自惚れてる暇があったらさっさとそいつを出すんだね」

「もう、出ていますよ」

一柳が再び口元を吊り上げた。

「っ！」

「型破りな道化師」
ストレンジヒーロー

小町の背後に立った何者かが彼女に襲い掛かった。振り返って体を傾ける程度しか回避する時間の無かった彼女の右腕が攻撃を受ける。

——何だ？

重い金属で殴られる感触が一瞬だけし、その後は何故かまったく痛みが無い。背後から襲って来た敵の姿を確認する事も出来ないまま彼女は安全の為に襖の間を抜けて隣の部屋へ。——そしてそこで二つの事を認識した。

一つは背後から襲って来た一柳の付喪神。身長2メートル程の男のような姿でサーカスのピエロのようなカラフルでダボダボの服。頭は髪の毛と帽子の無いピエロそのものだが、その顔はただのボールにピエロの化粧をしたかのように凹凸が無い。

これだけでも十分異様な姿だが、何より目を引くのはその両手に一つずつ持った巨大な鋏だ。^{はさみ}工作に使うようなタイプではなく、庭の手入れに使うような先の丸まった鋏。それを十倍に拡大したような具合だ。

——私はこの鋏で殴られたのか。

そう考えた瞬間だった。小町がもう一つの事実を認識したのは。

——右腕が……無い!?

しかしすぐにそれは正確な認識では無いと彼女は気付く。彼女の右腕はきちんと肩にくっついていて。ただし、薄い紙のようにペラペラと垂れ下がっていたのだ。

それは腕と言うよりはさっきまで肩に付いていた彼女の腕を誰かが絵に描き、それをそのまま切り出したような状態だった。早い話が腕の厚みが消え、平面にされている。

「……あんだ、何をした?」

——これが奴の付喪神、ストレンジピエロットの呪術と考えていいだろう。しかしその仕掛けが分からない内は迂闊に攻撃できない。彼女の右腕は今や障子の隙間を抜けて中庭から入って来る夜風に揺れるばかりで、まったく腕としての役割を果たさない。これでは圧倒的に小町が不利である。

「さあ? これから死ぬ人間に教える義理はありませんね」

一柳が笑う。

「手強いと聞いていたので酒で眠らせるだけにしようと思っていたが、大した事ありませんね。計画変更です」

そして手に持った依代の鋏に襖を注ぐ。

「殺せ! ^{ストレンジピエロット}型破りな道化師!」

依巫と同じようにニンマリ笑って小町に突進するストレンジピエ

ロット。両手の鋏を大きく開き、今度は殴るだけでなく切り裂く気が満々だ。

「ちい！」

舌打ちをしてもう一つ隣の部屋へと逃げる小町。少しでも追跡の妨げになればと思い、襖を閉じたのだが……。

チヨキン。 チヨキン。

両方の襖が意図も簡単に大きな鋏で切られてしまう。

——おかしい……いくらデカイ鋏でも一切りであの大きさの襖を真つ二つだなんて……。

再び目の前に迫るストレンジピエロット。そして足元に散らばった襖の破片を見ると、彼女の腕同様に薄い紙きれと化している。

——やはり、こいつの呪術は鋏で触れた物を平面に変えるのか！

「中々トリッキーで良いでしょう？」

次々と部屋を抜けて逃げる小町を付喪神と共に追いながら言う一柳。

「型破りな道化師ストレンジピエロットの能力は鋏で触れた立体を平面に変える事！」

小町を追いながら滅茶苦茶に鋏を振り回すストレンジピエロット。机、椅子、花瓶……その鋏が触れた物が次々とペラペラの平面に変わっていく。

途中にある壁や扉なども平面にされてしまえば簡単に破け、切られてしまうので意味をなさない。

「そしてもう一つ——」

一柳が平面になった今の大机を拾ってちり紙のように丸め、小町に向かって投げつける。

「型破りな道化師！」

小町の背中に迫った丸めた机は一瞬にして元の立体に戻り、小町の体に覆いかぶさって身動きを封じる。

「きゃあ！」

「――この能力で平面にした物はいつでも元に戻せるんですよ」

小町は机の下敷きになった両足をなんとか引き抜こうとしたが、それより先に追いつかれた。ストレンジピエロットがその机の上に乗って脱出を封じる。

「安蒜小町……あまりにあっけない」

心底残念だと言う顔で一柳が溜息を吐く。しかしその表情もすぐに残忍な微笑みに上書きされる。

一柳はトドメに入った。

ストレンジピエロットが鋏をチョキチョキと鳴らしながら小町に向かって片手を伸ばす。その顔は人を切り刻めるのが嬉しくてたまらない、とでも言いたげに口を三日月型にしてにやけていた。

「せめてもの慈悲です。一思いに殺して差し上げましょう」

完全に追い詰められた小町だが、彼女は泣き叫ぶ事は無くただ一言だけこう呟いた。

「……そろそろ飽きたな」

……チョキン……。

静寂の中で鋏の音が水面に落ちた雫の波紋のように広がり、小町の体は腰から綺麗に真っ二つになった。

何の抵抗もなく、彼女のグラマラスな体は葉書か何かのようにあっさり切られてしまったのだ。

「……さようなら。安蒜小町」

もう返事をする事もない小町に背を向けて追跡路を戻ろうとする一柳。

しかし、振り返った瞬間彼はとんでもない物を目撃した。

「お別れにはまだ早いよ、一柳道満」

小町だった。たった今ストレンジピエロットが殺したばかりの小町が、彼らの行き先に立ち塞がっていたのだ。

しかもそれだけではない。呪術によって平面にされていたはずの

彼女の右腕は何事も無かったかのように正常なままだ。そしてその手には眩いばかりに紺色の光を放つ手帳。

「……一体……何故？」

机に足を挟まれた小町の死体を振り返る一柳。しかしそこに死体などは無く、あるのは不自然に壁を伝って天井へと伸びる一筋の影だけだった。

一柳が目でその影の筋を追うと天井を伝って部屋の反対側まで伸び、そこからまた壁を伝って床へ……そして最終的にその影の根源は小町の手の手帳だった。

「もう良いでござるか？ 小町」

何処からともなく良く通る男の声が響いた。

「ええ、そろそろ子供をおちよくるのにも飽きたところ」

やれやれといった様子で目を閉じる小町。そして彼女の付喪神の名を呼ぶ。

カゲロウニッキ
「影牢日記」

一筋の長い影が一瞬で太く、厚くなる。そしてそのまま漆黒の大蛇へと変わった。先程の声の主の正体である。

体の太さは直径一メートルは優にあり、体長も軽く見積もって十メートル。目は爛々らんらんと琥珀色こはくに輝き、尻尾の先は依代である手帳の中に溶け込んでいる。

「やはり人間に化けるのは少々窮屈でござるな」

体を縮めるように小町の横で鎌首をもたげる姿は禍々しさを通り越して神々しく、一柳とストレンジピエロットはあまりの迫力に身じろぎする。

「な……蛇だと？ いつから入れ替わっていた!？」

「最初からさ。お前がずっと追いかけて喜んでいたのはこのカゲロウが私を真似た姿だよ」

そう、一柳の背後に現れた小町は最初からこの蛇の付喪神が化け

た偽物だったのだ。手帳から伸ばした体の先を小町そっくりに偽装していただけだったのだ。

「哑然とする一柳を他所に、小町が言葉を続ける。」

「影牢日記は影の体を持つ変幻自在の付喪神。その大きさや形には限界が無く、ちよいと多めに襦を使えば色まで本物そっくりに化けることだって可能なのよ」

「……」

「私はあんたが偽物を追ってる様を遠くから影を伸ばして見ているだけで良かった。中々面白い小芝居だったよ」

「……おのれ！ 型破りな道化師！」

ストレンジピエロットが小町に襲い掛かる。

「防げ！ 影牢日記！」

「御意！」

しかしカゲロウニッキが体を伸ばして間に割り込む。

ストレンジピエロットは躊躇ためらわずその体を平面に変え、二つの鋏で切り刻む。

「ははは！ 嬉しいですよ！ どんな形であれあなたが戦う意思を見せてくれたようで！」

己の勝利を微塵も疑わない一柳の言葉。彼は自分の付喪神が相手をみじん切りにしてるのを見て最高に愉快な気分になっていた。

——自分はやはり強い！ この付喪神に切れないものなんて無いんだ！

しかし、小町はその些細な挑発の言葉に初めて怒りの表情を見せた。

「戦う？」

普段の呆けた彼女からは想像もできない顔だった。まるで1足す1は3だと言う人間に街で出くわしたような顔。

相手の常識を疑う表情。

「あんたねえ、『戦う』ってのはどんなに偏ってても、両方に勝つ可能性がある争いの事を言うのよ」

襖を手帳に注ぐ小町。すると紙きれのように切り刻まれたカゲロウがあつという間に元の大蛇の姿で復活する。

「カゲロウは影の体を持つ付喪神、だからその体には実体が無い。いくら切り刻んでも襖で体は再生するし、元々平面にも立体にもなれるんだからそいつの呪術は通用しないわ」

「……く！」唇をかみしめる一柳。

「私たちが今からあんたに施すのは『戦い』じゃなくて『蹂躪』、
或いは――」

次の瞬間カゲロウがまさしく影のように体を薄くして床に落とし、ストレンジピエロットの足の間を抜けて背後に回り込んだ。

変幻自在。床を這って回り込む時だけ体を影にして首を伸ばし、またその影から首が伸びて実体のある大蛇の頭が敵の背中を狙う。

「――『捕食』だ」

ストレンジピエロットがそれに気付いたのと、カゲロウが首を立てに戻して伸ばし、その大きな口を開くのが丁度同時だった。

……パク。

カゲロウの口はまったくつかえる事無く敵の付喪神の全身を丸呑みにした。そして後には何も残らない。

直後数秒間、不気味な静寂が部屋を支配した。

「……え？ ……え？」

状況を受け入れられない一柳。しかしそれも無理もない。

何故なら、彼の付喪神は一口で相手の付喪神に食われてしまったのだから。

「何が……何がいけなかった？」

その場で膝をつき、頭を抱える一柳。

あまりの事態に冷静さを失った彼を閉じ込めるように、部屋の壁という壁をカゲロウが体を伸ばして這いまわる。まるで部屋の壁に沿って四角くとぐろを巻くようにも見えるその行動によって、部屋

の壁はほとんど黒くて太い影の筋に覆い尽くされ、包囲を完成させた。

「僕の付喪神はどんな相手でも切れるはずだった。僕の作戦はちゃんと安蒜小町を孤立させたし、ちゃんと僕は安蒜小町を殺したはずだった……」

彼は必死に思考を巡らせていた。

——自分はちゃんと「教団」の指令通りに目的の物を手に入れられるはずだった。それを手に入れて我々が東京で最強の依巫集団になるはずだった……。

——何故？ 何がいけなかった？

「さあね。知らないよ」

付喪神を失って戦意を喪失した一柳に小町が歩み寄る。

「あんたに特に間違っている所は無かったよ。敵の戦力を分散させる作戦は効果的だったし、偽物ながら片手を潰して私の行動を封じる事に成功した。負けたのだって私の付喪神の能力があんたの付喪神の呪術と相性が悪かっただけさ」

部屋の壁を這うカゲロウの動きが止まる。

「ただ一つ間違っている事があるとすれば——」

壁の一边からカゲロウが首を伸ばし、膝をついたまま動かない一柳に迫る。

そして……、

「——あんたは私を舐め過ぎた」

カゲロウの口が開き、この夜二人目の獲物を丸呑みにした。

「ごちそうさま」

呟き、パタンと音を立てて手帳を閉じる小町。そして手帳の中に収まったカゲロウニッキに話しかける。

「あの子たちは無事かしらね？」

「心配無いでござるよ。小雪殿と桑原家の末裔がいざとなれば助けに入るはず」

カゲロウニッキの返事は早かった。まるでずっと小町がその事を

心配しているのを察しているかのようなうだ。

ずっと張っていた肩を休める小町。長い付き合いになるパートナーには全てお見通しと言う訳か。

「敵わないわね、カゲロウには」

彼女は信頼と感謝の意を込めて、過去の家出の際に盗んだ依代の手帳を優しく撫でた。

——安蒜小町あんざん こまち&影牢日記カゲロウニツキ

VS 一柳道満いちやなぎとうまん&型破りな道化師ストレンジピエロット

——勝者・小町

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6862i/>

大江戸でいばあていっど

2011年2月12日02時23分発行